宇都宮市埋蔵文化財調査報告第17集

稲荷古墳群

昭和60年3月

宇都宮市教育委員会

発刊にあたって

宇都宮市西部の鹿沼市と境を接する上欠町の低丘陵上に位置する稲荷古墳群は，前方後円墳と３基の円墳からなる古墳群です。同古墳群は，宅地，工場敷地等として開発される可能性は低いと考えられておりましたが，数年前から古墳群が立地する丘陵の南西部より土取りが行われ，隣接する古墳群も現状変更されるおそれがでてきました。

当教育委員会では，埋蔵文化財を重視する立場から稲荷古墳群の土地所有者，文化庁及び栃木県教育委員会をはじめとする関係機関と協議を重ね，古墳群全体の範囲の確認に重点を置いた発掘調査を実施いたしました。

発掘調査は，国庫及び県費補助を得て本市文化財保護審議委員会委員の塙静夫・小堀時蔵両先生並びに栃木県教育委員会文化課・財団法人栃木県文化振興事業団・栃木県立博物館の専門職員諸氏の御助言をいただきながら当教育委員会社会教育課があたりました。

調査の結果，本古墳群の主墳と考えられる２号墳（前方後円墳）は，墳丘上に堅固に葺かれた葺石がみられ裾部に円筒埴輪がほぼ等間隔に据えられているという極めて保存状態が良好な古墳でした。また，半壊状況にあった１号墳（円墳）の内部主体を調査した所，河原石を小口積みにした横穴式石室で直刀・土製玉等を検出いたしました。この成果は，本報告書に記録いたしましたので御活用いただければ幸いです。

なお，当教育委員会では，今回の調査結果を基礎資料として，稲荷古墳群が今後も保存されるよう関係各位と協議していきたいと考えております。

末文になりましたが，調査にあたり御指導いただきました上記の塙・小堀両先生と３機関，また，なにかと便宜をお図りいただきました土地所有者の佐藤氏（市内上欠町701番地）に対しまして深くお礼申しあげます。

昭和60年３月

宇都宮市教育委員会教育長　後　藤　一　雄

例　　言

1　本書は宇都宮市上欠町719番地外に所在する稲荷古墳群の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は宇都宮市教育委員会が主体となって昭和59年10月1日～11月6日まで実施したものである。なお，本調査は国庫・県費の補助事業である。

3　遺物の整理及び実測図・写真図版の作成等については，金田信夫・水沼良浩の協力を得て梁木誠がこれにあたった。

4　本書の執筆は梁木（第1，第2，第3章1～4節，第4章1，2，3，5節）と水沼（第4章4節）が分担し，編集は梁木がこれにあたった。なお，第3章5節の縄文・弥生式土器については財団法人栃木県文化振興事業団・藤田典夫氏より原稿を頂戴した。記して感謝の意を表す。

5　発掘調査の関係者は次のとおりである。

助言者	宇都宮市文化財保護審議委員会				委員	塙	静夫
					委員	小堀	時歳
事務局	社会教育課長	加藤	悦男	調査員	文化振興係	定岡	明義
	文化振興係長	小林	綿一		文化振興係	手塚	英男
	文化振興係	桜井	敬朔		文化振興係	阿部	信弘
	文化振興係	渡辺	卓		文化振興係	梁木	誠
調査員補						金田	信夫
調査補助員	安生 サキ	安生	ミカ	小林 マサ	小林 ミキ	斉藤	イク
	佐藤 正男	島崎	熊夫	福田 カネ	福田 タイ	福田	タイ
	堀田 一夫	松本恵美子		松本 和子	松本 トシ	松本	トリ
	味野和テツ	森	ヒロ子	谷中 一郎	山崎 トキ	渡辺	フミ
学生	水沼 良浩（早稲田大学）						

なお，発掘調査および報告書作成に際しては，多くの方から御援助，御教示を賜った。記して心から感謝の意を表する。

専修大学教授久保哲三氏，財団法人栃木県文化振興事業団竹澤謙氏，同大金宣亮氏，同田熊清彦氏，同小森哲也氏，同大橋泰夫氏，同齋藤弘氏，同植木茂雄氏，栃木県立博物館橋本澄朗氏，作新学院山ノ井清人氏，宇都宮大学講師橋本博文氏，芳賀町免の内遺跡調査員宮崎光明氏，上三川町教育委員会秋元陽光氏。

目　　次

・発刊にあたって
・例　言

第1章　位置と環境
第1節　古墳群の位置 …… 1
第2節　古墳群をとりまく環境 …… 2

第2章　調査の契機と経過
第1節　調査の契機 …… 8
第2節　調査の経過――発掘日誌抄―― …… 8

第3章　調査内容
第1節　発掘前の古墳群の概要 …… 15
第2節　2号墳の調査 …… 16
第3節　1号墳の調査 …… 52
第4節　3・4号墳の調査 …… 61
第5節　縄文・弥生式土器 …… 64

第4章　まとめ
第1節　2号墳の墳丘について …… 66
第2節　2号墳の円筒埴輪列について …… 70
第3節　2号墳の円筒埴輪について …… 72
第4節　周辺地域の円筒埴輪について …… 74
第5節　稲荷2号墳の位置付けについて …… 82

挿　図　目　次

第１図　稲荷古墳群位置図 …… 1
第２図　稲荷古墳群周辺の遺跡分布図 …… 3
第３図　稲荷古墳群周辺の主要古墳分布図 …… 4
第４図　稲荷古墳群全体図 …… 13
第５図　稲荷２号墳トレンチ配置図 …… 17
第６図　稲荷２号墳後円部東側平面図 …… 18
第７図　T_1・T_2・T_3断面図 …… 19
第８図　稲荷２号墳前方部東側平面図 …… 20
第９図　T_4・T_5・T_6断面図 …… 21
第10図　稲荷２号墳前方部西側平面図 …… 22
第11図　T_7・T_8・T_9断面図 …… 23
第12図　稲荷２号墳後円部西側平面図 …… 24
第13図　T_{10}・T_{11}・T_{12}断面図 …… 25
第14図　T_{10}円筒埴輪出土状態 …… 27
第15図　T_{12}・T_{13}円筒埴輪出土状態 …… 28
第16図　T_1西壁断面図 …… 29
第17図　T_7周溝内土器出土状態 …… 30
第18図　T_1周溝内土器出土状態 …… 31
第19図　稲荷２号墳出土土器 …… 32
第20図　稲荷２号墳出土円筒埴輪(1) …… 34
第21図　稲荷２号墳出土円筒埴輪(2) …… 35
第22図　稲荷２号墳出土円筒埴輪(3) …… 36
第23図　稲荷２号墳出土円筒埴輪(4) …… 37
第24図　稲荷２号墳出土円筒埴輪(5) …… 38
第25図　稲荷２号墳出土円筒埴輪(6) …… 39
第26図　稲荷２号墳出土円筒埴輪(7) …… 40
第27図　稲荷２号墳出土円筒埴輪(8) …… 41
第28図　稲荷２号墳出土形象埴輪(1) …… 45
第29図　稲荷２号墳出土形象埴輪(2) …… 46

第30図　稲荷２号墳出土形象埴輪(3) …… 47
第31図　稲荷２号墳出土形象埴輪(4) …… 48
第32図　稲荷２号墳出土形象埴輪(5) …… 49
第33図　稲荷２号墳出土形象埴輪(6) …… 50
第34図　稲荷２号墳出土形象埴輪(7) …… 51
第35図　稲荷１号墳トレンチ配置図 …… 52
第36図　稲荷１号墳全体図 …… 53
第37図　稲荷１号墳横穴式石室周辺平面図 …… 56
第38図　稲荷１号墳横穴式石室 …… 57
第39図　稲荷１号墳出土土器 …… 59
第40図　稲荷１号墳横穴式石室出土遺物 …… 60
第41図　稲荷１号墳横穴式石室出土直刀 …… 60
第42図　稲荷３号墳全体図 …… 61
第43図　稲荷４号墳全体図 …… 62
第44図　稲荷３・４号墳トレンチ断面図 …… 63
第45図　稲荷古墳群内出土縄文・弥生式土器拓影 …… 64
第46図　稲荷２号墳全体図 …… 67
第47図　稲荷２号墳復元図(1) …… 68
第48図　稲荷２号墳復元図(2) …… 69
第49図　稲荷２号墳円筒埴輪列復元図 …… 70
第50図　鹿沼市狼塚古墳出土円筒埴輪 …… 75
第51図　鹿沼市下台原古墳出土円筒埴輪 …… 77
第52図　鹿沼市下台原古墳・宇都宮市亀塚古墳出土遺物 …… 78
第53図　鹿沼市判官塚古墳出土遺物 …… 81
第54図　周辺古墳出土土器 …… 83

表　目　次

表１　稲荷古墳群周辺の主要古墳(1) …… 6
表２　稲荷古墳群周辺の主要古墳(2) …… 7
表３　２号墳出土土器観察表 …… 33
表４　２号墳出土円筒埴輪観察表(1) …… 42
表５　２号墳出土円筒埴輪観察表(2) …… 43

表6　2号墳出土円筒埴輪観察表(3) …… 44
表7　2号墳出土円筒埴輪の器形と調整 …… 73
表8　各古墳出土円筒埴輪の口径と底径 …… 74

図版目次

PL1　(1)　遺跡遠景　(2)　遺跡全景
PL2　(1)　2号墳下草刈り風景　(2)　発掘前の2号墳全景
PL3　(1)　2号墳T_2　(2)　2号墳T_3
(3)　2号墳T_4　(4)　2号墳T_4
PL4　(1)　2号墳T_5　(2)　2号墳T_5
(3)　2号墳T_6　(4)　2号墳T_6
PL5　(1)　2号墳T_9　(2)　2号墳T_7
(3)　2号墳T_8　(4)　2号墳T_8
PL6　(1)　2号墳T_{10}　(2)　2号墳T_{10}
(3)　2号墳T_{12}　(4)　2号墳T_{11}
PL7　(1)　2号墳後円部北西　(2)　2号墳後円部北東
PL8　(1)　2号墳くびれ部東　(2)　2号墳くびれ部西
PL9　(1)　2号墳前方部西　(2)　2号墳前方部中央～西
PL10　(1)　2号墳全景　(2)　2号墳T_{10}葺石部断面
PL11　(1)　2号墳T_1葺石部断面　(2)　2号墳T_1葺石裾部断面
PL12　(1)　2号墳後円部北西（T_{12}・T_{13}）円筒埴輪列　(2)　2号墳T_{12}円筒埴輪出土状況
PL13　(1)　2号墳くびれ部西（T_{10}）円筒埴輪列　(2)　2号くびれ部西（T_{10}）円筒埴輪列断面
PL14　(1)　2号墳T_{10}円筒埴輪出土状況　(2)　2号墳T_{10}円筒埴輪出土状況
PL15　(1)　2号墳前方部南東コーナー（T_8）円筒埴輪列　(2)　2号墳T_8円筒埴輪・土師器坏出土状況
PL16　(1)　2号墳T_1周溝内土師器坏出土状況　(2)　2号墳T_7周溝内土師器坏出土状況
PL17　(1)　発掘前の1号墳全景　(2)　1号墳横穴式石室検出状況
PL18　(1)　1号墳横穴式石室　(2)　1号墳横穴式石室

PL19 (1) 1号墳横穴式石室閉塞状況 (2) 1号墳横穴式石室閉塞の断面
PL20 (1) 1号墳横穴式石室羨道部埋土状況 (2) 1号墳横穴式石室羨道部埋土状況
PL21 (1) 1号墳横穴式石室全景 (2) 1号墳玄室床面上鉄器出土状況
PL22 (1) 2号墳出土土師器坏 (2) 2号墳出土形象埴輪(1)
PL23 2号墳出土形象埴輪(2)
PL24 2号墳出土円筒埴輪(1)
PL25 2号墳出土円筒埴輪(2)
PL26 2号墳出土円筒埴輪(3)
PL27 (1) 2号墳出土円筒埴輪外面の刷毛目 (2) 2号墳出土円筒埴輪基底部外面
PL28 1号墳出土須恵器甕・玉類

※ 遺物図版中の番号は挿図の番号に一致する。例えば19－2は第19図2の遺物を指す。

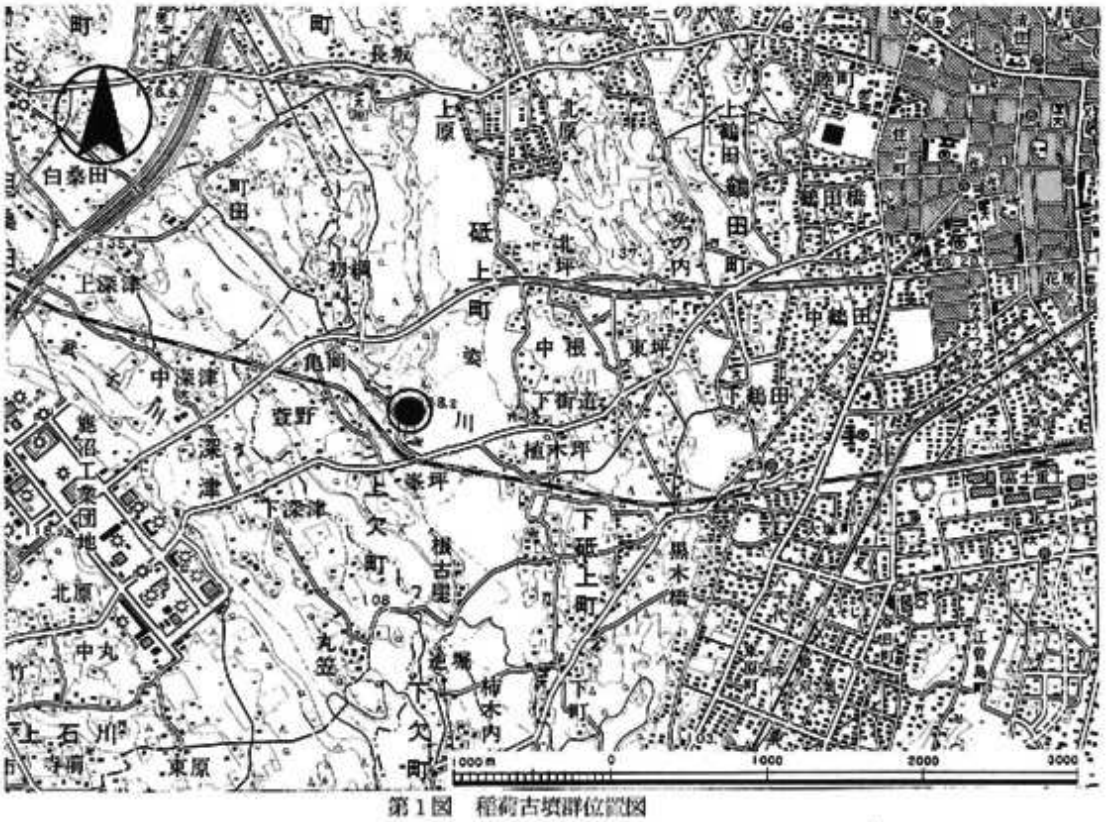
第1章　位置と環境

第1節　古墳群の位置

本古墳群は宇都宮市上欠町719番地外に所在する。宇都宮の市街地から西南西へ約4㎞の地点であり，さらに西方へ約1㎞で鹿沼市内となる。

宇都宮市の中心地から「楡木街道」（宇都宮と鹿沼市楡木町を結ぶ街道）を鹿沼方面に向うと，姿川を渡ってすぐに国鉄日光線との踏切がある。この踏切の手前を北に折れてまもなく，右手に大きな土取りの痕がみえてくる。土取り痕は南北に延びる舌状台地の約半分を切り取ったような形であり，現在，ゲートボール場として利用されている。本古墳群はこの土取り痕のすぐ北側に位置しており，土取り痕の崖沿いの山道を100ｍほど登ったところに見えてくる。

本古墳群の占地は，舌状台地の南端寄りで，しかも幅の狭い尾根上である。このため古墳群中に立つと，東方には宇都宮市街，西方には鹿沼連山，さらに南方には姿川沿岸の水田地帯が一望できる。



第1図　稲荷古墳群位置図

第2節　古墳群をとりまく環境

1　地理的環境

宇都宮市の地形は，大きく北部の山地及び丘陵と中南部の平地に分かれる。後者はさらに，南流するいくつかの河川によって数条の台地と低地とに分かれており，各台地は東から鬼怒川左岸の清原台地，鬼怒川と田川の間の宇都宮東部台地（岡本台地，田原台地），田川と姿川の間の宇都宮西部台地（宝木台地）そして姿川の右岸の鹿沼台地とそれぞれ呼称されている。

本古墳群が立地するのは，上記の台地中最も西に位置する鹿沼台地上である。鹿沼台地は，姿川の右岸より鹿沼市黒川の左岸に及ぶかなり広い台地であり，宝積寺ローム以降の火山灰をのせている。この台地の東端は，鹿沼市の最東端を南流する武子川で開折された中央部よりも一段低い段丘面となっており，本古墳群はこの面に位置している。

本古墳群の占地は舌状に延びる台地の南端にあたり，標高は135～136mを測る。東側は姿川低地と約30mの比高差をもつかなりの急斜面となっているが，西側はやや緩やかな斜面となって北東に細長く入り込む谷底面へと続いている。台地上平坦部は，わずか幅20～30m程であり，古墳群はこの尾根状の狭い部分を一杯に利用して占地している。

本古墳群の北方に行くに従って台地の幅は徐々に広がっている。しかし，古墳群の北への延びは認められず、意識的に台地上の狭い部分が選定された状況が窺える。また，東西両側及び南側が低地となっているという状況から，選定に際しては周辺からの眺望という点も十分に考慮されたものと思われる。

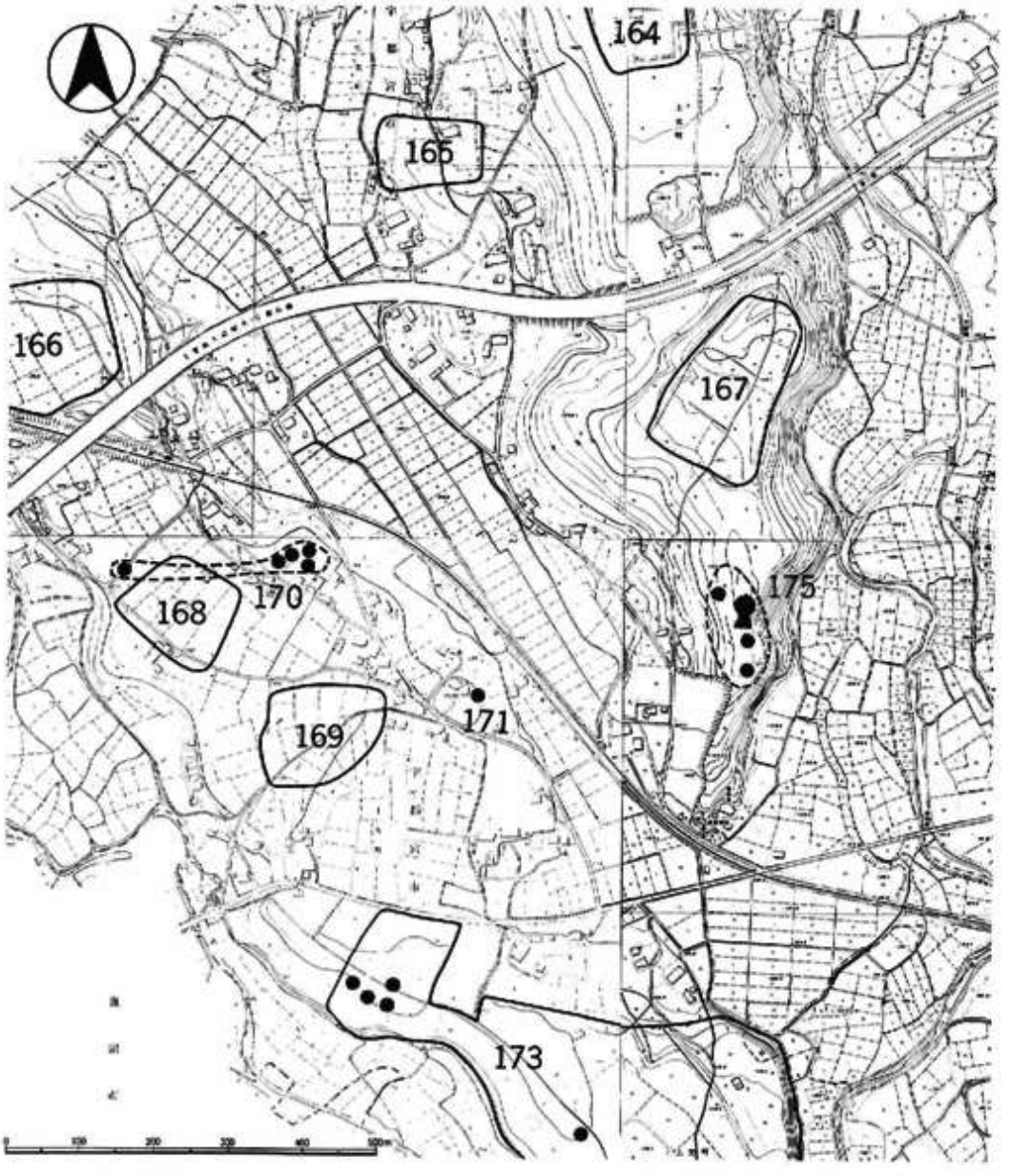
2　歴史的環境

本古墳群周辺には，縄文時代以降多数の遺跡が所在している。まず，周辺地域を本古墳群をその南側にのせる姿川右岸の台地と，間に谷底面を介してこれに対峙する武子川左岸の台地とに大きく分けて，周辺の遺跡分布を概観してみたい。（第2図参照）

本古墳群（第2図175）北方の台地上平坦面及び西緩斜面上には，集落跡を中心とした遺跡分布がみられる。初網遺跡（第2図165）と富士山台遺跡（第2図167）は，いずれも土師器の散布が認められる遺跡であるが，前者については五領期後半の特徴を有する土器群の出土が紹介されている。なお，上欠団地遺跡（第2図164）は縄時代中期を中心とした集落跡で，竪穴住居跡や多数の土坑が検出されている。

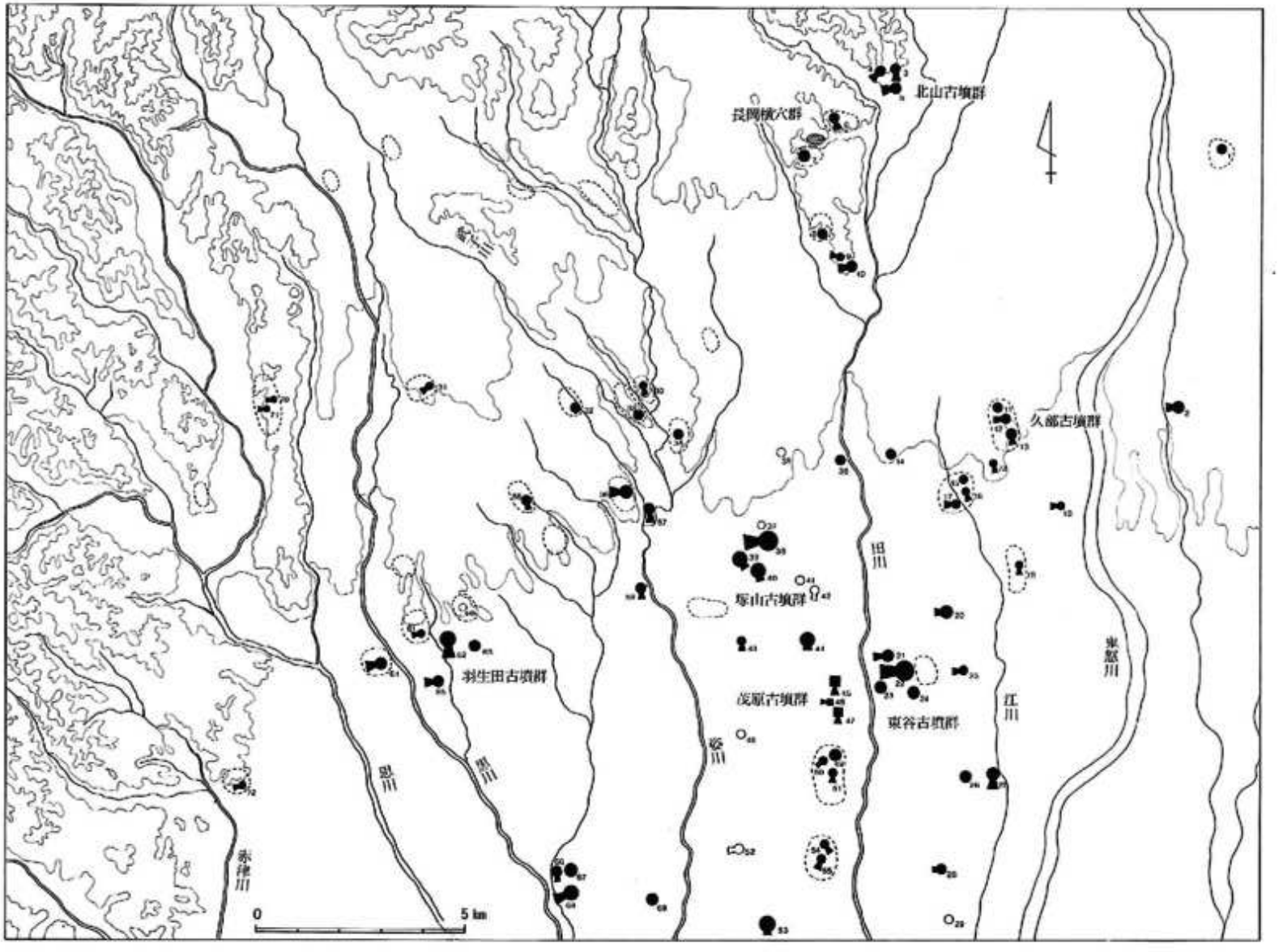
これに対して武子川左岸の台地上には，集落跡と小円墳群の複合した遺跡分布がみられる。亀岡坪遺跡（第2図168），沓掛遺跡（第2図169），聖山公園遺跡（第2図173）などはいずれも土師器の散布が認められる遺跡である。特に聖山公園遺跡については，発掘調査から鬼高期を中心とした集落であることが明らかとなっている。これらの集落跡に隣接あるいは重複する形で亀岡前古墳群（第2図172），定使古墳（第2図171）さらには聖山公園遺跡内

の古墳群などが認められる。いずれも直径10～20mの円墳であり，単独あるいは4～5基の群を成して分布している。聖山公園遺跡中で調査した4基の古墳は，出土した土器などからいずれも後期古墳であることが判明しており，隣接する集落跡との直接的な関係が予想されるものである。



164　上欠団地遺跡　165　初郷遺跡　166　宮尾神遺跡　167　富士山古遺跡　168　亀岡坪遺跡
169　香柳遺跡　170　亀岡前古墳群　171　定便古墳　173　聖山公園遺跡　175　稲荷古墳群

第2図　稲荷古墳群周辺の遺跡分布図　（※番号は、宇都宮市の遺跡番号を使用）



第3図　稲荷古墳群周辺の主要古墳分布図　　※点線のかこみは円墳を主とした古墳群

聖山公園遺跡においてみられる集落に隣接する小円墳あるいは円墳群という関係が，この武子川左岸台地上での一般的な形態であるとするならば，相対峙する台地上にしかも集落とはやや隔絶したと思える位置に占地するのが本古墳群である。このようにみると，周辺では唯一前方後円墳を含むという本古墳群の特質が，占地的なことからも意味付けされるように思われる。

さて次に，本古墳群周辺の古墳分布状況をやや広い範囲でみてみたい。第３図は鬼怒川右岸から黒川及び思川流域までにおける主要古墳分布を示したものである。地形的には宇都宮北西部及び鹿沼北部すなわち田川上流及び姿川，黒川上流の丘陵地帯から南西部に向かって平地が広がるという部分である。古墳の分布は丘陵地の奥部を除きほぼ全域に渡っているわけであるが，これらの中で特に注目される古墳あるいは古墳群を概観してみたい。

本古墳群の南東約９kmに所在する茂原古墳群は，愛宕塚古墳（47），大日塚古墳（46）権現山古墳（45）の３つの前方後方墳からなるものである。愛宕塚，大日塚とも発掘調査により古式古墳であることが確認されており，現時点では本地域における初現期の古墳とされている。この茂原古墳群の東方約1.5kmには田川を挟んで東谷古墳群がまた北西約3.5kmには塚山古墳群が所在し，それぞれ笹塚古墳（22）と塚山古墳（38）という全長100m級の前方後円墳が主墳となっている。なお，これらの古墳群のほぼ中間地点には画文帯神獣鏡の出土で知られる帆立貝式前方後円墳の雀宮牛塚古墳（44）が所在していた。さらに田川流域においては，前記した古墳を中心とする地域の上流丘陵部にも多数の古墳分布がみられる。最も北に位置する北山古墳群は３基の前方後円墳を含むものであるが，この中の権現山古墳（５）は本地域における初現的な横穴式石室を主体部とするものである。一方，本古墳群の南西約7.5kmの黒川左岸には羽生田古墳群が所在する。主墳の茶臼山古墳（62）は全長80mの前方後円墳であり，本地域では笹塚古墳，塚山古墳に続く規模である。

最後に，本古墳群を含む姿川上流域の古墳分布について概観してみたい。まず，本古墳群の南約2.5kmには亀塚古墳（57）と下台原古墳（56）の２基の前方後円墳が所在する。特に後者は墳丘全長約57mで，周囲に幅６m程の基壇状の平坦面を有するものであり，これを含めると全長70m近くになるものである。姿川上流域では最も大規模な古墳と思われる。この下台原古墳以北の姿川流域においては，将軍塚古墳（33），下砥上神社古墳（34），愛宕塚古墳（32）などの比較的大きな円墳を中心とした古墳群がみられ，さらに上流では小円墳のみの古墳群が散在するという状況である。姿川上流域における以上のような古墳分布の中で，本古墳群の主墳である稲荷２号墳（30）は，最北に位置する前方後円墳であり，地域的には極めて注目すべき古墳と言える。

番号	古墳名	墳形	規模 m	内部主体	埴輪
1	板戸愛宕塚	円墳	35		
2	竹下浅間山	前方後円墳	52.5	横穴式石室⑪	
3	雷神山	〃	41	横穴式石室㊲	
4	宮下	〃	55	横穴式石室	
5	権現山	〃	43	横穴式石室㊶	円筒、馬。
6	瓦塚	〃	45	横穴式石室	円筒、人物、鞆、靫、馬。
7	戸祭大塚	円墳	53.4	横穴式石室	
8	戸祭山兜塚	〃	40	横穴式石室	
9	天子塚	前方後円墳	40	横穴式石室	
10	御蔵山	〃	50	石棺	円筒。
11	三日月神社	円墳	38		
12	久部浅間山	前方後円墳	32.5		
13	久部愛宕塚	〃	46		円筒。
14	下栗大塚	円墳	30		
15	天王山	〃	35		
16	東原	前方後円墳	30	横穴式石室⑪	
17	本郷山	〃	47		円筒。
18	小原高尾神社	〃	27		
19	飯塚	〃	33	横穴式石室⑪	円筒。
20	琴平塚	〃	51		
21	双子塚	〃	60		
22	雉塚	〃	100		円筒。
23	鶴舞塚	円墳	43	木棺直葬？	
24	松の塚	〃	50		
25	権現山	〃	35		
26	愛宕神社	〃	42		
27	上郷瓢箪塚	前方後円墳	68		円筒。
28	八龍塚	帆立貝式前方後円墳	46		円筒。
29	兜塚			横穴式石室㊷	
30	稲荷2号墳	前方後円墳	32.4		円筒、人物、家、靫、盾、鞆、馬。
31	狼塚	〃	27.3	横穴式石室⑪	円筒、人物、鞍、太刀、馬。
32	愛宕塚	円墳	25	横穴式石室	円筒、人物、鳥、魚、馬。
33	将軍塚	〃	30		
34	下瓜上神社	〃	25	横穴式石室㊷	
35	雷電山				
36	大山祇神社	円墳	30		

表1　稲荷古墳群周辺の主要古墳（1）

番号	古墳名	墳形	規模 m	内部主体	埴輪
37	射撃塚内	円墳			円筒。
38	塚山	前方後円墳	95		円筒。
39	塚山西	帆立貝式前方後円墳	63		円筒、短甲、鳥。
40	塚山南	〃	60		円筒。
41	十里木			横穴式石室㉙	
42	綾女塚	前方後円墳			人物。
43	二子塚	〃	40		
44	雀宮牛塚	帆立貝式前方後円墳	56.7	木棺直葬？	円筒。
45	権現山	前方後円墳	64		
46	大日塚	〃	38		
47	愛宕塚	〃	48	割竹形木棺	
48	文珠山				
49	浅間神社	円墳	58		
50	狐塚	前方後円墳	41		円筒。
51	後志部	〃	46		
52	横塚	〃		横穴式石室	円筒。
53	下石橋愛宕塚	帆立貝式前方後円墳	62	横穴式石室㉚	
54	五神社	前方後円墳	45		
55	大山瓢箪塚	〃	43	横穴式石室	
56	下台原	〃	57		円筒。
57	亀塚	〃	55	竪穴式石室？	円筒。
58	和田塚	〃	35	横穴式石室	
59	亀塚	〃	55		
60	ゴルフ塚内	円墳	17	竪穴的箱式石室	
61	藤江1号墳	前方後円墳	24	横穴式石室⑪	
62	茶臼山	〃	80		円筒、家、人物。
63	富士山	円墳	50		円筒。
64	剣宮塚	前方後円墳	60.9	横穴式石室⑪	円筒。
65	長塚	〃	55		円筒。
66	牛塚	帆立貝式前方後円墳	52.6		
67	車塚	円墳	60	横穴式石室⑯	
68	愛宕塚	前方後円墳	76.5		円筒。
69	星の宮神社	円墳	50	横穴式石室⑱	円筒。
70	酒野谷28号墳	前方後円墳	18.6		
71	酒野谷40号墳	〃	21.5		
72	西方山6号墳	〃	32.5		円筒、太刀。
73	久保田	〃	32		

表2　稲荷古墳群周辺の主要古墳（2）

第２章　調査の契機と経過

第１節　調査の契機

古墳群周辺の土取り状況

本古墳群は前方後円墳１基と円墳３基からなる古墳群である。現在，宇都宮市内には20数ヶ所の大小古墳が確認されているが，いずれも南部から東部及び東北部の特に田川沿岸に集中している。このようななかで市内西部にあたる姿川上流域においては，良好な古墳群が少なく，特に前方後円墳を含んだものは本古墳以外にみあたらないという状況である。

このように本古墳群は宇都宮市内でも貴重な古墳群の一つであるが，数年前から本古墳群をのせる台地西南部の土取りが行われている。土地所有者である佐藤氏によると，今後も土取りを計画しているということであり，場合によっては本古墳群の一部が破壊されるという状況が予想された。そこで，宇都宮市教育委員会では，昭和58年11月より数回に渡って現況調査を行うとともに，その取り扱いについて文化財保護の立場から協議を進めた。翌59年１月，栃木県教育委員会文化課とも協議した結果，本古墳群の保存を目的とした確認調査を実施することと決定し，佐藤氏からも快諾を得ることができた。

以上のことにより，宇都宮市教育委員会では，昭和59年度国庫，県費補助事業として本古墳群全体の範囲確認調査及び各古墳群の墳形を確認するための周溝調査等を主眼とした発掘調査を行うこととした。なお，３基の円墳中１基（１号墳）については，石室の一部が露呈していたため，これも含めて調査することとした。

第２節　調査の経過

発掘調査は昭和59年10月１日からであったが，これに先だって９月下旬の１週間で調査地内の下草刈り及び墳丘測量を実施した。墳丘測量は調査地全体に10ｍの正方形グリッド杭を設定する形で行ったが，軸線は後の発掘調査において使用するため前方後円墳である２号墳の現状での主軸方向に合わせた。なお，各杭は，東西方向にアルファベット（ＡＢＣ…）南北方向に算用数字（１２３…）を設定し，この組合せで呼称する（たとえばＡ－１）こととした。

発掘調査の日程としては，前方後円墳である２号墳の調査を主眼と考えたため，まずこれに全力を投入し，これがある程度の見通しがついた段階で１号墳さらに３・４号墳の調

査へという順を定めた。

調査は天候にもめぐまれ，ほぼ予定の期間で終了することができた。詳細は次の発掘日誌抄で示すとおりである。

発掘日誌抄

2号墳

10月1日（月）トレンチ設定。周溝確認ということから後円部に5本，前方部に5本そしてくびれ部両側に1本づつの2本の計12本を測量杭を基準に設定。トレンチは幅1.5mで，長さは現状から判断した周溝幅を十分含むと思われる長さとした。トレンチ名は，後円部北側中央部から時計回りで決定（T_1～T_{12}）。T_1，T_{12}，T_{11}，T_9から発掘を開始。先ず西側の墳形を確認しようということであったが，くびれ部（T_{10}）は後回しとした。

10月2日（火）T_1，T_{12}，T_{11}で周溝を確認。いずれも表土40cm前後下げた段階で，現墳丘裾部より2～3m外を走る幅3.5m前後のプランを検出。周溝内の覆土を掘り下げ墳端と溝底を検出。確認面からの深さは約1m。墳端部にかかったトレンチ内よりは，葺石の一部かが検出され，そのすぐ外側に円筒埴輪列を確認。円筒埴輪は上半がほとんど倒壊しており，その破片の多くが周溝内へ流入。なお，T_1の周溝内よりは，溝底より30cm浮いた位置で土師器坏1点を検出。

10月3日（水）T_2，T_9，T_{11}内で周溝を確認。検出状況は，いずれも他のトレンチと同様。T_9とT_{11}の状況からくびれ部が当初に設定したトレンチ（T_{10}）内にかかることを確認し発掘を開始。また全長を確かめるために，T_7（前方部前面中央）の調査を急ぐ。

10月4日（木）T_7，T_3内で周溝を確認。T_7の周溝内よりは，溝底より30cm浮いた位置でT_1と同様な土師器坏1点を検出。ほぼ主軸上で前方部と後円部の両側から土器が検出されたことで興味が湧く。このT_7，T_3の調査により全長及び後円部径が判明し，古墳の規模を把握。T_3とT_7の状況から前方部の広がりが現状墳丘での予想より大きくなると思われたため，T_8を延長して発掘を開始。

10月5日（金）T_8内で周溝を確認。T_3とT_5及びT_{10}の状況から東側くびれ部に設定したT_4を検討。この結果，当初の位置より1m南へ設定し直し，調査を開始。なお，T_{10}内でもほぼ周溝を確認。周溝外側は直線とはならず内側と同様な曲線でくびれることが判明。

2号墳トレンチ調査風景

10月6日（土）T_{10}の周溝を確認。他のトレンチと同様に墳端部より葺石の一部と円筒

埴輪を検出。円筒埴輪は約1mの間隔で2本が樹立。円筒埴輪列の並び方を確認するため，列上でトレンチを南に延長し，さらに1本を検出。この結果，3本の円筒埴輪がくびれ部の曲線に沿って並ぶことが判明。T_5とT_7の状況から，当初の設定をやや南にずらすとともに長さを延長したT_5の発掘を開始。

10月8日（月）T_6，T_8内の周溝を確認。両トレンチ内での前方部コーナーの検出によりその幅が後円部径とほぼ一致することが判明。また，墳丘裾部にかかった部分より葺石も検出され，葺石が墳丘全体を取り巻くことを確認。なお，T_5の中心がコーナーから南寄りにずれていたため北に1m幅を拡張。

10月9日（火）T_4内の周溝を確認。溝底より上で拳大の石の密集した面を検出。位置的に横穴式石室の前庭に付随したものと判断。T_5内の墳端部で葺石の検出が不十分であったため墳丘側へ1m延長。土器片，埴輪片が多数検出されたが，土の様子から盗掘による攪乱の込っていることが判明。

10月10日（水）墳丘上での葺石の状況を確認するために，T_1，T_3，T_7，T_9を墳丘まで延長。前方部，後円部とも墳丘斜面を中心に検出され，墳丘上の平坦部には認められないことを確認。石の北側にT_{13}を設定し，円筒埴輪列の延びを検出。T_{12}と同様の間隔で墳丘を取り巻くように並ぶことを確認。T_7内において円筒埴輪が検出されなかったため，すぐに西側にT_{14}を設定。墳丘沿いに並ぶ2本の円筒埴輪を検出。T_7内すなわち前方部中央で円筒埴輪列が一端途切れる可能性を確認。

10月11日（木）各トレンチの清掃を行い写真撮影。

10月13日（土）写真撮影の残りを行い，終了とともに周溝及び葺石の測量のための準備を開始。

10月15日（月）～18日（木）各トレンチの周溝，埴輪及び葺石の平面測量を行う。

10月19日（金）円筒埴輪の取り上げ。T_{10}及びT_{12}，T_{13}においてはサブトレンチを掘り，円筒埴輪の樹立する様子を断面で観察。円筒埴輪列に沿った断面により，樹立のための掘方は溝状のものではなく，一本毎にほぼ円形の浅い土坑が掘られていることを確認。

2号墳葺石検出状況

また，円筒埴輪列に直交した断面により，葺石及び周溝落ち口からの距離を把握。なお，盛土は円筒埴輪列のやや外側から行われており，各円筒埴輪はこの盛土を掘る形で樹立されたことを確認。

10月20日（土）残る円筒埴輪の取り上げ。透孔の方向を検討するため，基底部だけのものも取り上げの際に方向をチェック。T_{10}北壁で円筒埴輪の断面を観察した際，葺石端部

の状況も一部断面で確認。さらにこの葺石全体の状況を断面で観察するためにT₁の西壁に沿ってサブトレンチを設定。この結果，葺石の底部では大きめの石を3～4段に積み，墳丘斜面上へ上るに従って2段から1段へと積み方が薄くなっている状況を確認。

10月22日（月）各断面の写真撮影及び残った測量を完了。

1号墳

10月8日（月）トレンチの設定。西南斜面上に立地する円墳であるため，横穴式石室もこの斜面方向へ開口するものと判断し，十文字のトレンチを設定。

10月9日（火），10日（水）各トレンチの表土を掘り下げ，周溝のプランと横穴式石室の上面を検出。検出された横穴式石室の上面の石材の並び方から，当初南西へ開口すると考えたのは誤りであり，ほぼ南に開口することを確認。この結果，トレンチは横穴式石室の主軸に対して45°ほどずれることとなった。

10月11日（木）各トレンチ内にかかった周溝の掘り下げを開始。横穴式石室上面の石材を精査し，この範囲を確認。

10月12日（金）周溝調査を続行。横穴式石室南東部トレンチの溝底近くより土師器坏片を検出。横穴式石室の主軸を想定し，トレンチを拡張。

10月13日（土）横穴式石室の拡張部を掘り下げ，そのプランをほぼ確認。横穴式石室の北側を中心に表土中から須恵器甕片を多数検出。横穴式石室の天井部はすべて石室内へ落ちていることを確認。

10月15日（月）横穴式石室の拡張部の調査を続行。須恵器甕片は横穴式石室周辺のほぼ全域にわたって散布しており，破砕され墳頂部にまかれたとみられる状況。また，一部に土師器甕片も確認。

10月16日（火）横穴式石室の入口部から前庭部及びそれらに続く周溝部を確認するために，十文字に設定したトレンチの南側¼を全掘することを決定。掘り下げを開始。

10月23日（火）横穴式石室南部の周溝の確認。北西及び北東部トレンチ内で確認した周溝に対して南部から南西部にかけての周溝が狭くなっていることを確認。なお，周溝内の覆土中より弥生式土器片を多数検出。

10月24日（水）横穴式石室南部の周溝及び北東部トレンチ内周溝より長方形土坑3基を検出。いずれも，周溝がある程度埋没した段階で掘られたものであることが判明。出土遺物は皆無。横穴式石室内への流入土の掘り下げを開始。

1号墳横穴式石室検出状況

1号墳横穴式石室天井石除去風景

10月25日（木）横穴式石室の確認状況を写真撮影後，落下した天井石をチェーンブロックで除去。その後，石室の精査。側壁上部から落下したと思われる河原石を除去しながら除々に掘り下げを続行。一部須恵器甕片の落下したものも検出。

10月26日（金）横穴式石室の精査を続行。玄室の平面プランをほぼ確認。羨道部及び前庭部の確認。短い羨道部を多数の河原石で閉塞した状況を確認。

10月27日（土）横穴式石室の床面検出。小河原石を前面に敷いた玄室床面確認。奥壁寄りで，この床面上より直刀を検出。

10月29日（月）横穴式石室羨道部の精査。閉塞として使用された河原石を写真，図面を取りながら除去。大きな河原石を使用した玄門部を検出。また，羨道部及び玄室部側壁の接合状況も確認。

10月30日（火）前庭部の精査。前庭部には敷石のようなものはみられず，プランの確認状況は不明瞭。羨門部から八の字状に広がり周溝に至るようなものと判断。

10月31日（水），11月1日（木）全体及び部分写真の撮影。

11月2日（金），3日（土），5日（月），6日（火）周溝及び横穴式石室の測量。

3・4号墳

10月23日（火）両墳に十文字のトレンチを設定。

10月24日（水），25日（木）周溝確認調査。いずれも，円形の周溝を確認。

10月26日（金），27日（土）全体及び部分写真撮影後，測量。

第3章　調　査　内　容

第1節　発掘前の古墳群の概要

発掘調査に入る前の本古墳群周辺は，全体に雑木と低木が繁茂しており，各古墳の墳形や規模を確認するのにも困難な状態であった。規模の最も大きい2号墳に関しては，残存状態が良好であったこともあり，墳形の大略は把握できたが，それでも全体に生い茂る雑木，低木のために墳丘の写真撮影等は無理な状況であった。また，1，3，4号墳の円墳については，僅かな地膨れが確認できる程度のものであり，よほど注意深く探さなければ見過しかねないものであった。さらに，各古墳間の見通しがほとんどつかないため，各古墳の位置関係についても十分に把握できないという状況であった。以上のようなことから発掘調査を開始するに際しては，各古墳の現状での規模と墳形，さらには各古墳間の位置関係を正確に確かめるため，まず雑木，低木の伐採に努めた。

第4図は，雑木，低木の伐採後に作成した全体測量図である。古墳群の範囲は，南北約100m，東西約50mであり，南北に延びる狭長な台地上に占地した状況がよく窺える。台地は2号墳の北側から4号墳のある南方へゆるやかに下がり，約2mの比高差を示している。4号墳から南方は徐々に斜面となり，約200mで台地の端部に至っている。また台地上の平坦部は全体に狭く，2号墳北側と3号墳と4号墳の間の広い部分で約35m，2号墳と3号墳の間の最も狭い部分では20m弱である。台地両側の斜面は，東側が斜度約45°の急傾斜となっているのに対し，西側はやや緩やかで，斜度約25°を測る。斜面上に立地しているのは1号墳だけであるが，やはり緩やかな西斜面を利用している。

各古墳の位置関係は，主墳である2号墳を中心にみると，まず3号墳と4号墳が同じ台地平坦面上で南北に連なっている状況が窺える。3号墳は2号墳の前方部南東コーナーの約10m南，4号墳はさらにその南約50mにそれぞれ位置し，3号墳と4号墳の間は約35mの空間地となっている。1号墳は2号墳の後円部から西北西に約25mの位置であり，本古墳群中では唯一斜面上に立地しているものである。なお，標高的には2号墳の立地する部分が136m前後と最も高く，3号墳が135.5m，1号墳と4号墳が135mと徐々に低くなっている状況が把握できる。

発掘調査は，2号墳の周溝及び墳丘確認調査，1号墳の周溝確認及び主体部横穴式石室調査，3・4号墳の周溝確認調査の順で進めた。以下，この調査順に沿って，各古墳の調査報告を行うこととしたい。

第2節　2号墳の調査

1　発掘前の墳丘

2号墳は，本古墳群中唯一の前方後円墳である。前述したように狭長な台地の中央部に占地したものであり，後円部及び前方部の幅が台地上平坦部の横幅（東西幅）を最大限に利用したものと思われる状況である。占地面は北から南へと僅かな斜面となっており，後円部側で標高136m前後，前方部側で標高135.5m前後を測る。

墳形の残存状態は非常に良好であり，後円部の曲線，前方部のコーナー及び稜線等が明瞭に観察できた。また，後円部の北東及び北西側，前方部の前面には，周溝の痕跡とみられる浅い溝が走っており，その状況は第5図のコンタにも現われている。

墳丘面には，特に斜面部を中心に河原石の露呈がみられ，葺石が良好な状態で残っているとみられた。また，墳丘裾部及び前方部の墳頂付近には，数ケ所の攪乱痕が認められ，周辺に河原石や埴輪片の散乱がみられた。これらは，恐らく埴輪を採集するための盗掘坑とみられるが，葺石があったためかいずれもそれほど深い攪乱には至っていないものであった。

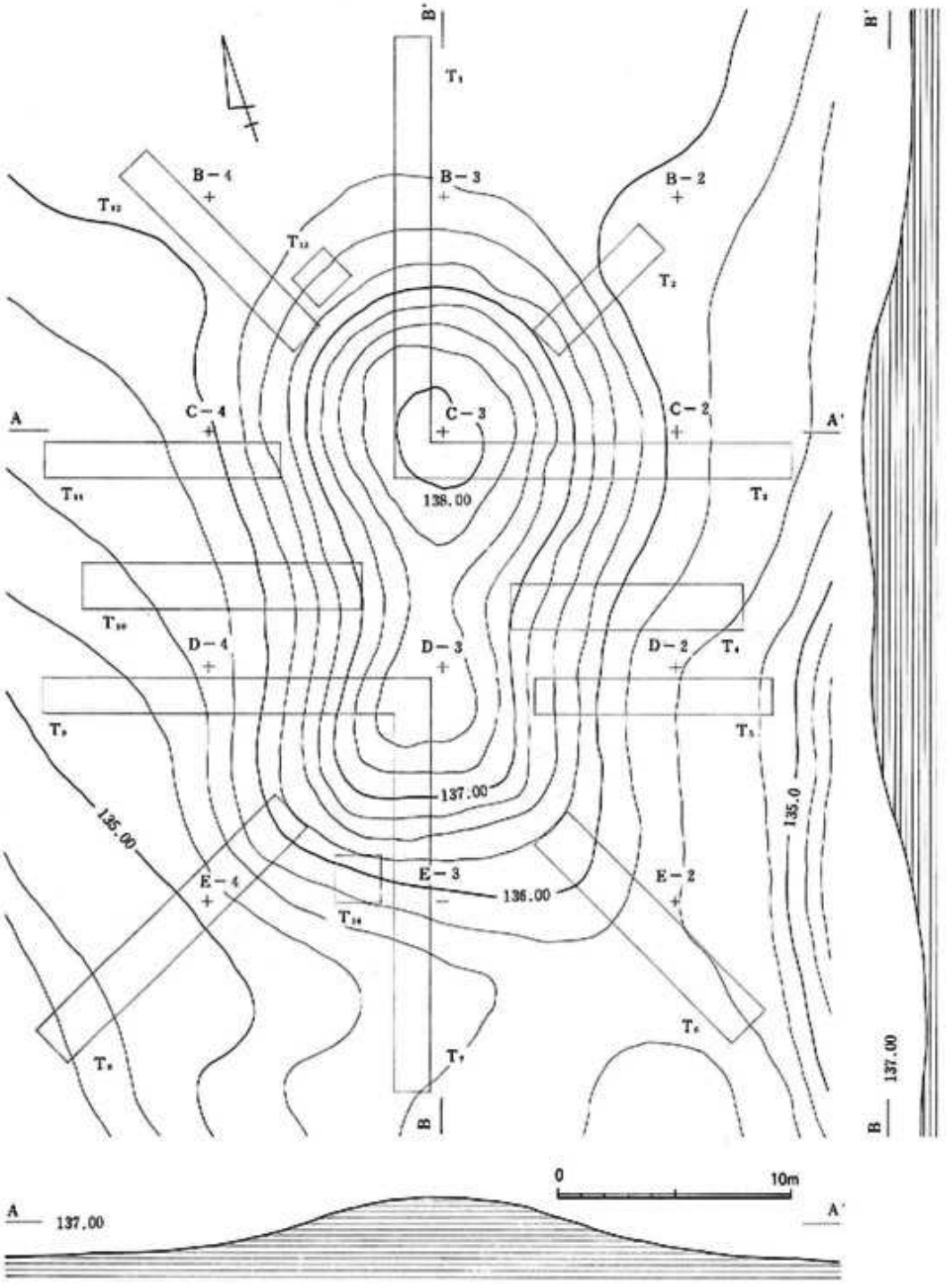
なお，後円部墳丘の残存は極めて良好であり，主体部への攪乱はまったく認められないという状況であった。

ここで発掘前の本墳の墳丘規模をまとめると次のとおりである。全長，32.5m。後円部径，20.5m。前方部前端部幅，20.5m。くびれ部幅，16.0m。後円部高，2.25m。前方部高，2.15m。なお，後円部高と前方部高はいずれも周辺墳裾部から高さを測ったものであるが。本墳自体がゆるやかな南斜面に立地していることから，それぞれの標高でみると後円部の方が前方部に対して約50cm高くなっている。

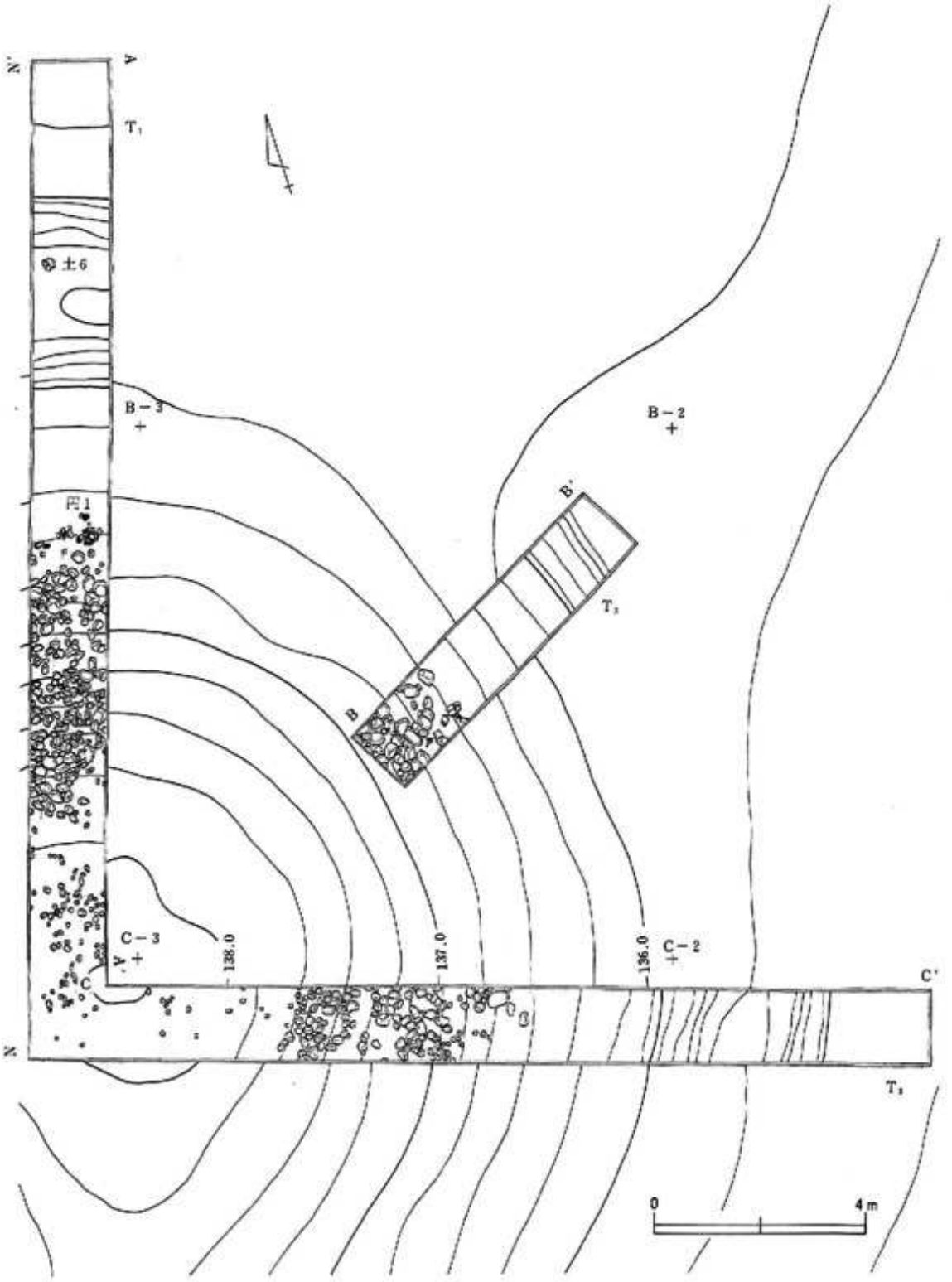
2　トレンチの設定

後円部墳丘頂部のほぼ中心に三角点が置かれていたため，これと前方部前端部の現状での中心点とを結び，仮の主軸線とした。さらに後円部の中心と考えた三角点から主軸に直交する線を決定し，この直交する2本の線を基準に組んだ10mのグリットを基本としてトレンチの設定を行った。なお，平面図ではC－3の点が，この三角点にあたる。

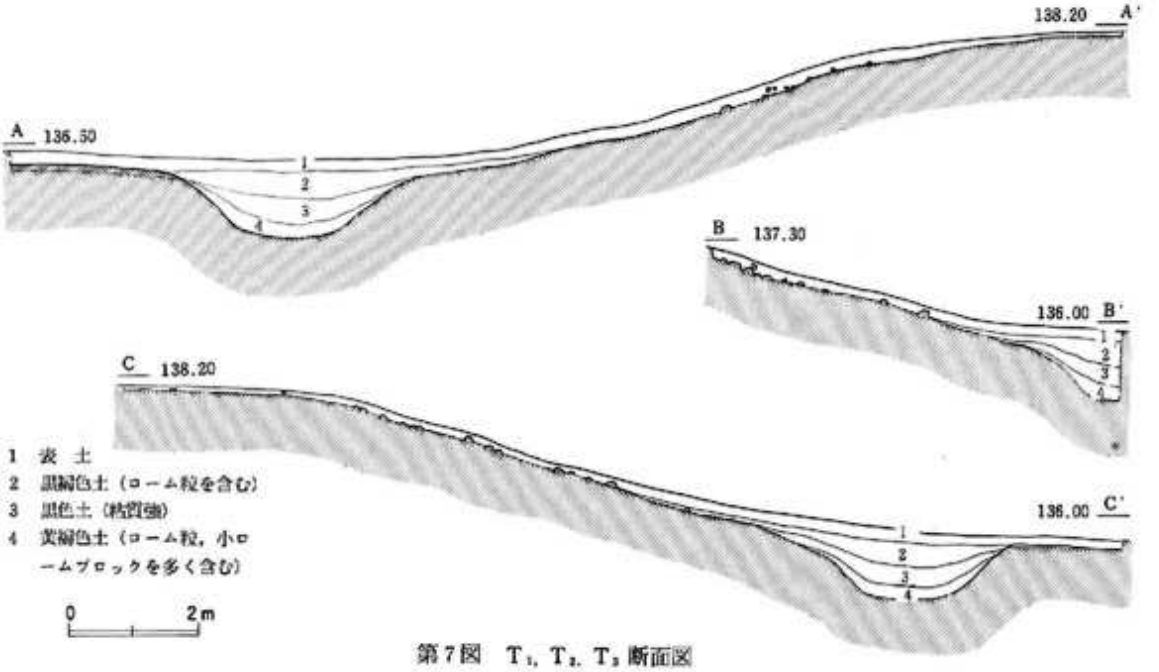
トレンチは第5図で示すように，後円部北西及び北東の2本は墳丘に対して直交するような形で，前方部両コーナーの2本は稜線に沿った形で設定し，他はすべてグリット線に合わせるものとした。トレンチの長さは，調査の状況に応じて変更をするものであるが，周溝と葺石端部を最低確認することを基準とした。また，その幅については1.5mを基準としたが，両くびれ部及び前方部両コーナーの4本は2mとした。なお，前方部西コーナーのトレンチは，屈曲部を明確に出すため3mとした。



第5図　稲荷2号墳トレンチ配置図



第6図　稲荷2号墳後円部東側平面図



第7図　T_1, T_2, T_3 断面図

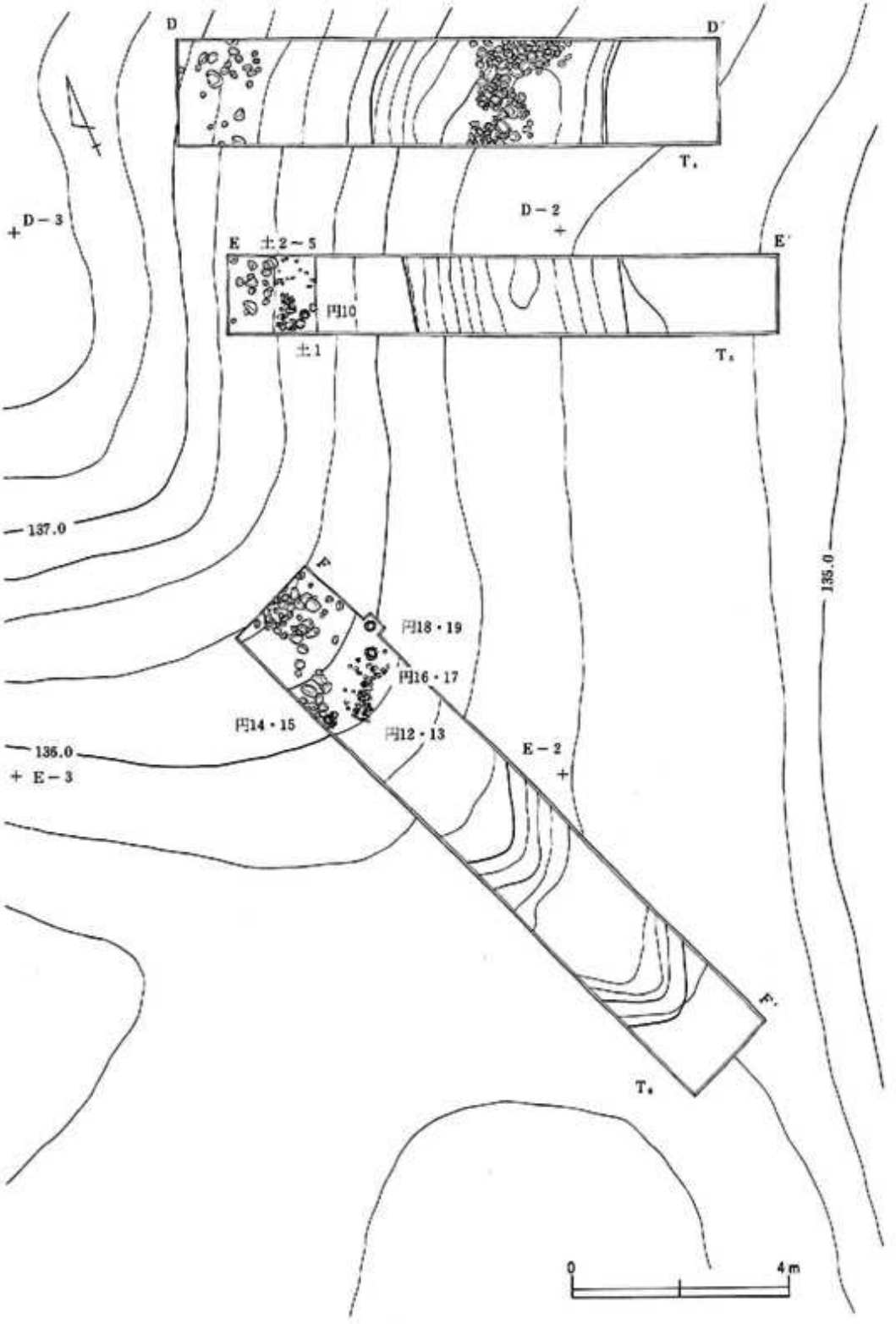
3　各トレンチの調査

ここでは，本墳を後円部東側（T_1～T_3），前方部東側（T_4～T_6），前方部西側（T_7，T_{14}，T_8，T_9），後円部西側（T_{10}～T_{13}）の4部位に分けて，各トレンチの調査内容を説明する。

(1)　後円部東側（第6図）

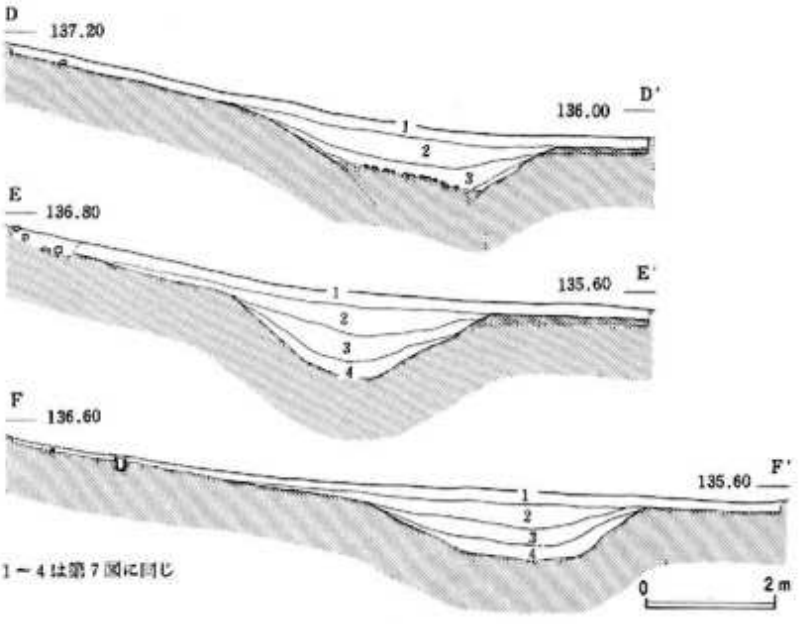
T_1～T_3は後円部東側の状況を確認するために設定したトレンチであり，T_1，T_3については墳丘面の状態も含めて調査したものである。なお，T_2は調査地区外に接するため，十分な長さをとれなかったものである。

周溝は各トレンチとも表土を20～30cm掘り下げた段階で確認されており，位置的にはいずれも現墳丘裾部のすぐ外側にあたっている。周溝の埋土の状況はT_1～T_3とも総て同様で周溝底面から黄褐色土（第4層），黒色土（第3層），黒褐色土（第2層）と分かれ，典型的な自然堆積を示している。周溝の形状は，緩やかな鍋底状の底面から約45°の傾きをもって内外が立ち上がるものであり，底面と立ち上がりの屈曲点はあまり明瞭とならない。T_2については周溝の外側立ち上がりが検出されていないが，いずれもほぼ同様な形状と思われる。各トレンチ内における周溝の規模は次のとおりである。T_1内が，幅3.5～3.6m，深さ1.25m。T_2内が，幅不明，深さ1.15m。T_3内が，幅3.2～3.3m，深さ1.1m。なお，周溝幅については，内外立ち上がりの上面での距離を計測したものであるが，全体に内側立ち上がりから墳丘面への屈曲点が不明瞭であり，埋土の状況等を考慮して判断したものである。また，深さは，中央部での現表土面から計測したものである。



第8図　稲荷2号墳前方部東側平面図

葺石は各トレンチとも周溝内側立ち上がり上端より約3mの部分から確認され，T_1，T_3で明らかなように墳丘斜面全体に至っている。石材は総て河原石であり，上面で確認できる範囲では斜面下方に30cmを越える大形のもの，斜面上方に10～20cmの小さなものが使用されている。墳頂の平坦部は，盛土の上面に5～10cm程の小石がまばらにみられるという状況であり，斜面部のような葺石はなされてないようである。



第9図　T_4，T_5，T_6断面図

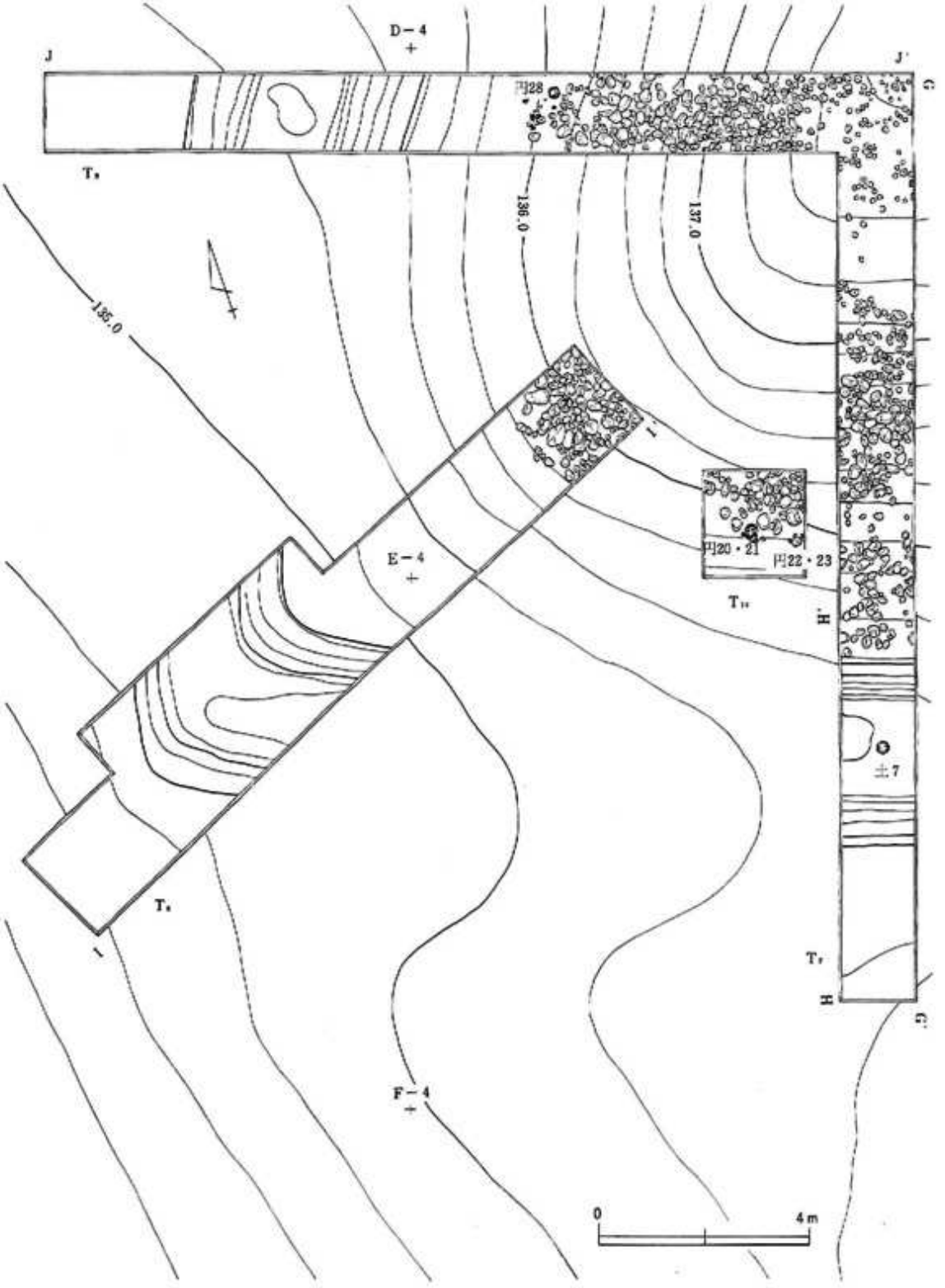
円筒埴輪の樹立はT_1内で1本確認されたのみである。この位置は葺石部の外側にあたり，周溝内側立ち上がり上端より約2.8mの距離である。

(2)　前方部東側（第8図）

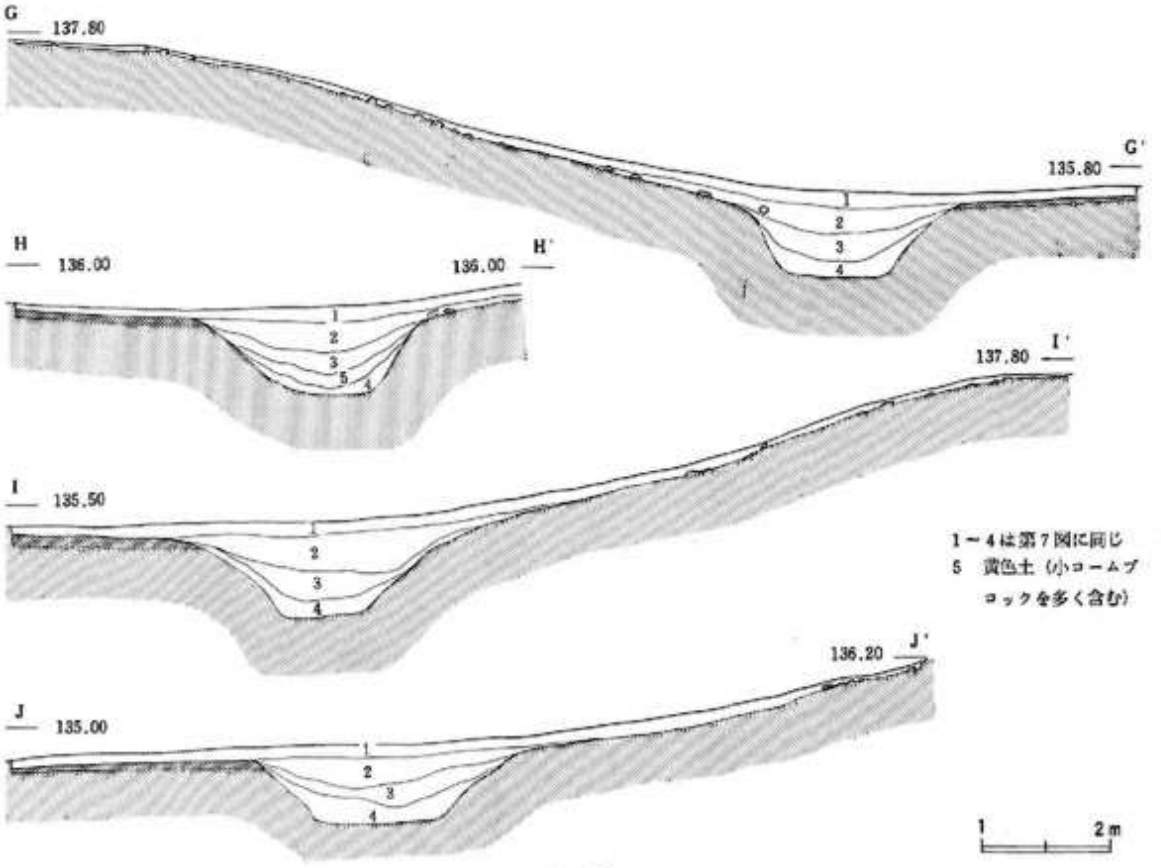
T_4～T_6は，東側くびれ部から前方部東コーナーにかけての状況を確認するために設定したトレンチである。

周溝の確認状況及び周溝内の埋土については，T_1～T_3の状況と同様である。周溝の形状は部分的にやや異なっている。T_5内においては，内外の立ち上がりが長く緩やかであり，底面幅をほとんどもたないという形であるのに対し，T_6はある程度の底面幅を有する形でる。なお，T_4内の周溝では，第3層の中程で5～15cmの小さめな川原石の集中した部分が検出されている。この石群は幅1～1.5mで周溝のほぼ中央部に位置し，南北はさらにトレンチ外に延びている。また，石群の上面は水平とはならず，墳丘側が僅かに高くなっている。このT_4内の周溝については，石群の上面が確認された段階で終了し，そのまま埋め戻した。

各トレンチ内における周溝の規模は次のとおりである。T_4内が，幅4.1～4.3m，深さ0.75m（石群上面まで）。T_5内が，幅3.8～3.9m，深さ1.33m。T_6内が，幅4.4m（内外のコーナー間で）。深さ1.1m。



第10図　稲荷2号墳前方部西側平面図



第11図　T_7, T_8, T_9 断面図

葺石はT_6内で端部が確認されている。端部から周溝内側立ち上がり上端までの距離は，稜線上で5.4mを測る。T_4，T_5内においては，崩れた石が確認されただけで葺石の端部までは至っていない。

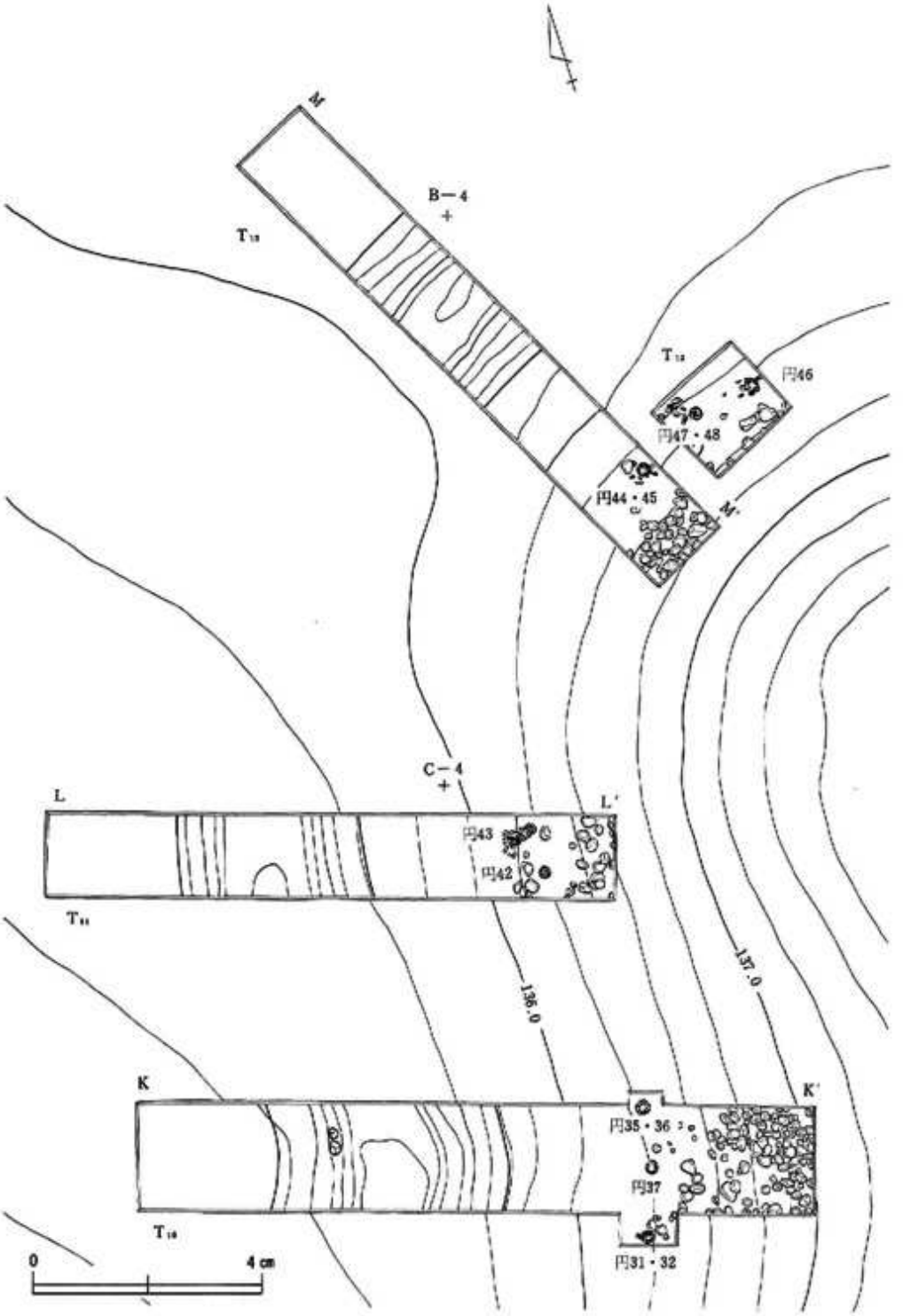
円筒埴輪の樹立は，T_5内で1本，T_6内で4本を確認している。T_6内の円筒埴輪列は周溝同様コーナー部にあたっており，屈曲点である円12，13の円筒埴輪が丁度稜線上に位置していたようである。

(3)　前方部西側（第10図）

T_7～T_9，T_{14}は前方部西側の状況を確認するために設定したトレンチである。

周溝の確認状況はT_1～T_3とほぼ同様である。T_7～T_9内における周溝の形状は，底面がほぼ平坦となるものであり，後円部東側や前方部東側でのそれとは明らかに異なっている。特にT_7内の周溝は，断面逆台形を呈する良く整った形状である。各トレンチ内における周溝の規模は次のとおりである。T_7が，幅3.4m，深さ1.35m。T_8が，幅3.95m（両コーナー間で），深さ1.23m。T 9が，幅4.1～4.2m，深さ1.45m。

葺石は各トレンチとも確認されており，端部はT_8で周溝内側立ち上がり上端より約3m，同様にT_8で約5.5m（稜線上で）の距離を有する。ただし，T_7内では周溝近くまで石の崩れがみられ，端部が不明瞭であるが，T_{14}の状況からやはりT_8と同様3m前後の位

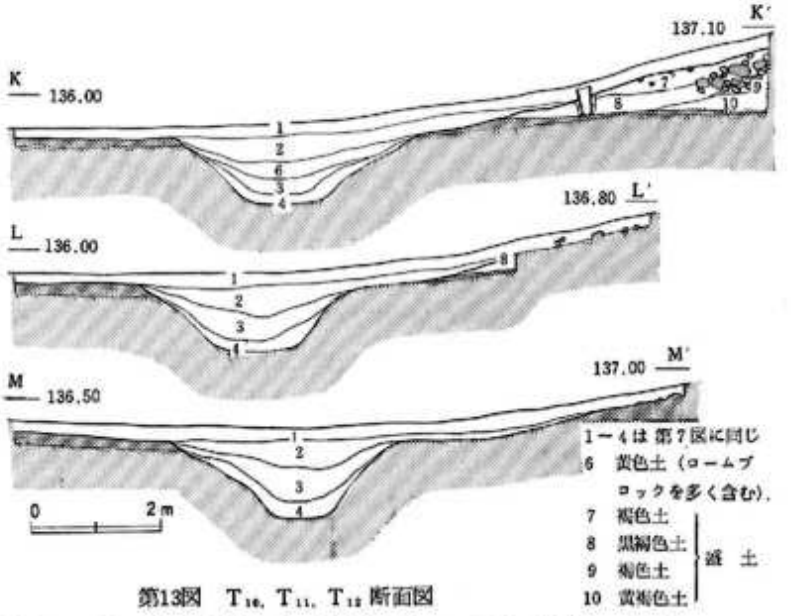


第12図　稲荷2号墳後円部西側平面図

置にくるものとみられる。なお，T_7内では円筒埴輪の樹立が確認されておらず，これが葺石の大きな崩れと関係しているものと考えられる。

前方部墳頂は後円部墳頂同様葺石がみられず，5～10cm程度の小石がまばらに認められる。

円筒埴輪の樹立は，T_{14}で2本，T_9で1本が確認されている。樹立位置はいずれも葺石端部のすぐ外側であり，周溝内側立ち上がり上端より2.4m前後の距離である。



第13図 T_{10}, T_{11}, T_{12} 断面図

(4) 後円部西側（第12図）

T_{10}～T_{13}は，西側くびれ部から後円部西側の状況を確認するために設定したトレンチである。周溝の検出状況はT_1～T_3とほぼ同様であるが，T_{10}だけは埋土の様相が異っており，ロームブロックを多く含んだ黄褐色土（第6層）が第3層の上に堆積している。内側立ち上がりの上半が他とは逆の曲線を示していることから，この段階でなんらかの掘削があったものと考えられる。

周溝の形状は，T_{10}とT_{11}が平坦な底面を有するものであり，前方部西側のT_7～T_9で確認されたものに近似している。これに対し，T_{12}内のものは底面がかなり狭くなっているのが特徴である。なお，T_{10}の周溝外側立ち上がり面の中程に径15cmと20cmの2個のピットが並んで検出されている。深さは，いずれも25cmである。

各トレンチ内の周溝の規模は次のとおりである。T_{10}が，幅3.9～4m，深さ1.25m。T_{11}が，幅3.2～3.3m，深さ1.23m。T_{12}が，幅3.4m，深さ1.37m。

葺石は各トレンチにおいて確認されており，その端部から周溝内側立ち上がり上端までの距離は，T_{10}で3.7m前後，T_{11}とT_{10}で3.5m前後を測る。

円筒埴輪の樹立は，T_{10}で3本，T_{11}で2本，T_{12}で1本，T_{13}で2本確認されている。樹立位置は他と同じく葺石端部の外側であり，ほぼ同様な間隔で列状に並んでいる。周溝内側立ち上がり上端から樹立位置までの距離は，T_{10}で約2.5m，T_{11}で約3m，T_{12}で約2.8mを測る。

4　円筒埴輪列

円筒埴輪の樹立はT_1で1本，T_5で1本，T_6で4本（内1本は横倒），T_{14}で2本，T_9で1本，T_{10}で3本，T_{11}で2本（内1本は横倒），T_{12}で1本，T_{13}で2本の計17本が確認されている。これらのほとんどは上半部が倒壊し，第1突帯以下の基底部のみを残すものであり，口縁部までを残して樹立していたものは1本もみられなかった。倒壊した破片の多くは樹立位置の周辺に散布していたが，周溝内まで流れ込んだものも少なくなかったようである。また，樹立位置の周辺には埴輪片とともに崩れ落ちた葺石が混在するという例が多くみられ，葺石の崩れが埴輪倒壊の1つの原因になっていたものと思われる。

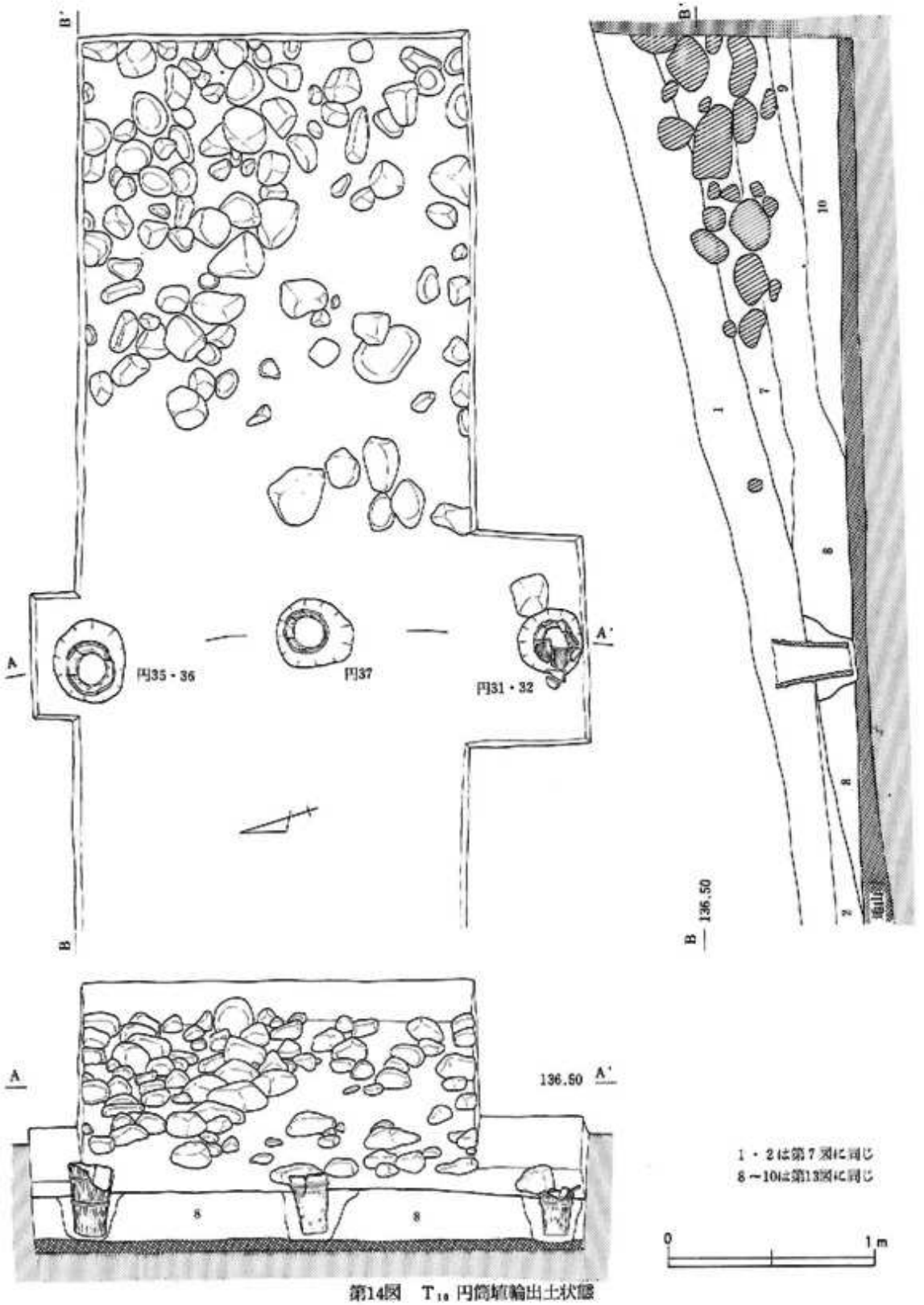
各トレンチの調査においても触れたように，円筒埴輪の樹立位置は葺石端部のすぐ外側で，周溝内側立ち上がり上端から2ないし2.5m前後内側である。また，この円筒埴輪の形状は，検出されたものから判断するかぎり，墳形とほぼ相似形であると考えてよいようである。なお，T_1，T_3，T_7，T_9の4本のトレンチは墳丘上へも延ばしたものであるが，他に円筒埴輪の樹立は確かめられず，円筒埴輪列は上記した位置の1段のみが回っていたものと考えてよいようである。

ここでは，検出状況の良好であったT_{10}及びT_{12}・T_{13}での円筒埴輪列を例にとって，樹立状態や位置について詳述してみることにしたい。

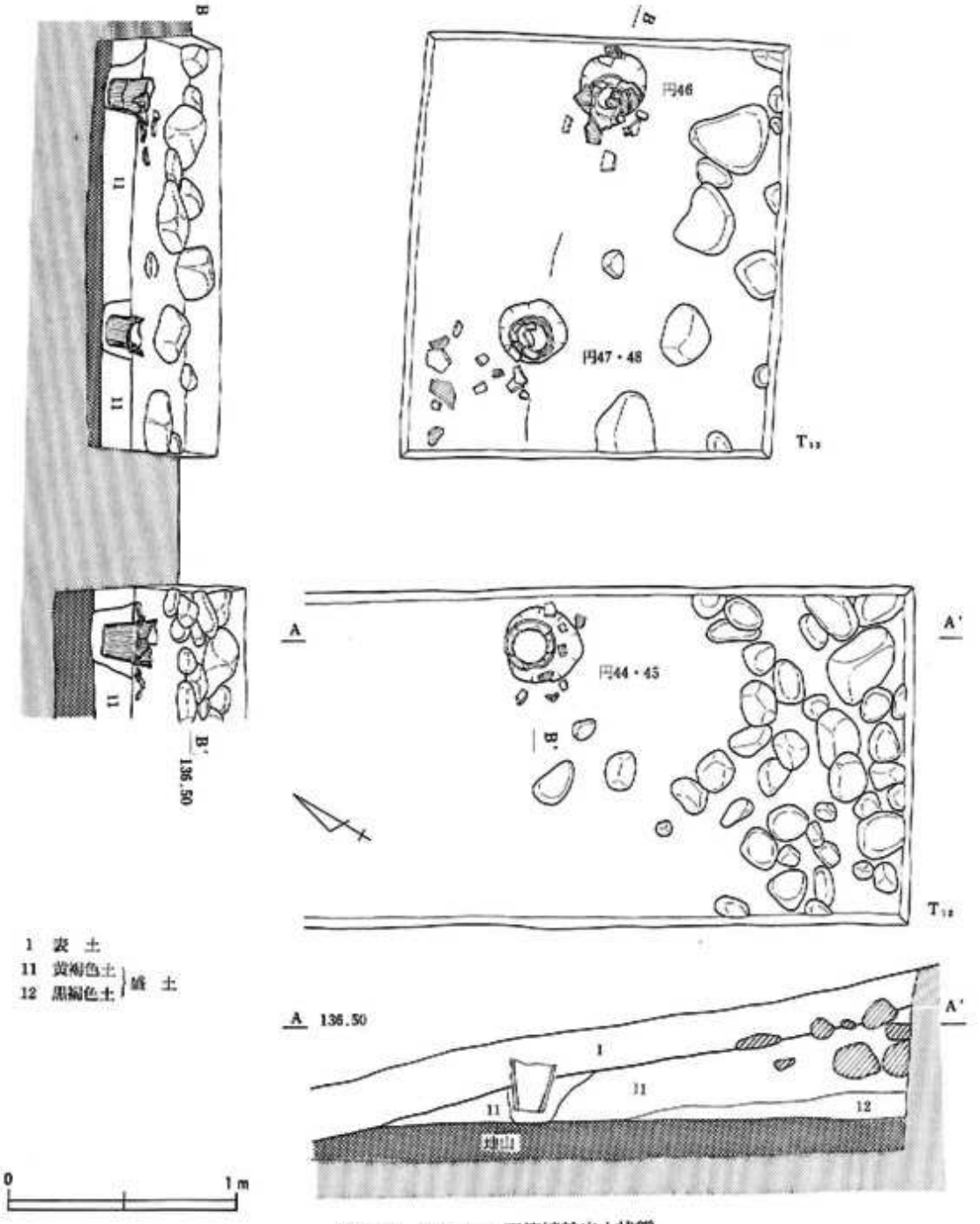
(1)　T_{10}円筒埴輪出土状態（第14図）

T_{10}は丁度西側くびれ部にあたるトレンチであり，3本の円筒埴輪樹立状態を検出したものである。3本の円筒埴輪は心もち「く」の字に曲るような列を成しており，丁度くびれ部にあたっていることを示している。各円筒埴輪とも上半部の倒壊したものであるが，残存した部分も直立はせず左右あるいは外側（周溝外）へ傾いているものが多い。各埴輪間の距離を各々の基底部中心間で計ると円35・36と円37の間が1.06m，円37と円31・32の間が1.18mである。また，葺石端部からの距離は，多くの場合葺石の崩れのために正確な数値を押さえることが困難となっているが，本トレンチ北壁の断面部において円35・36の円筒埴輪と葺石端部の関係を観察することができる。これによると葺石端部から基底部中心までの距離は，1.51mである。

各円筒埴輪は，埴輪の直径より一回り大きい不整円形ピットの中に樹立されている。ピットの大きさは径30～40cmで，深さは22～23cmである。ピットの掘られた面は，断面図に示したとおり，墳丘盛土面の裾部であり，本トレンチではローム粒を多量に含む黒褐色盛土（第8層）の上面である。また，ピットの底面は盛土下の地山面（整地面）に一致している。なお，このピットの中心間での間隔を計ると，円35・36と円37の間が1.09m，円37と円31・32の間が1.13mとなり，等間隔に近くなっていることがわかる。



第14図　T_{18} 円筒埴輪出土状態



第15図　T12, T13 円筒埴輪出土状態

(2) T_{12}・T_{13}円筒埴輪出土状態（第15図）

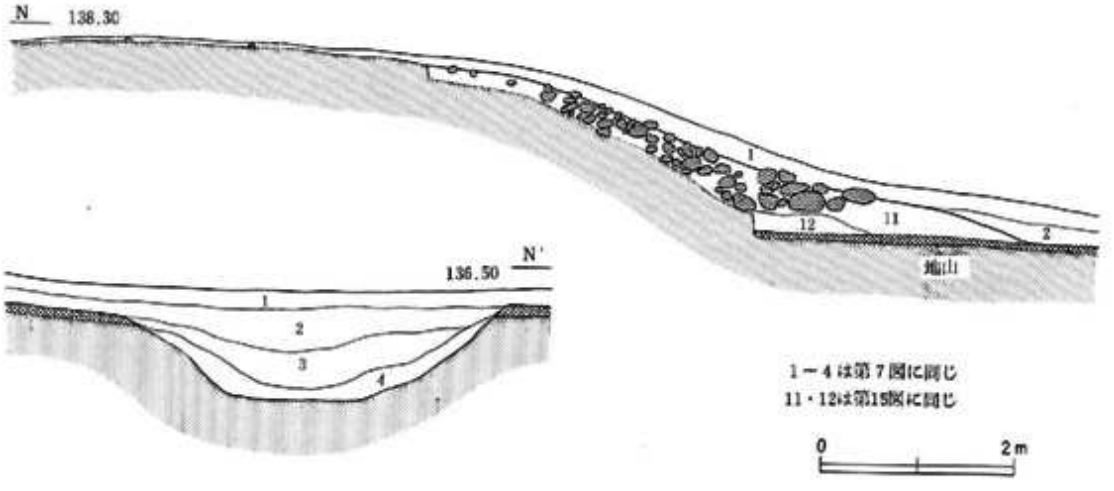
T_{12}・T_{13}は後円部北西部にあたるトレンチであり，合せて３本の円筒埴輪樹立状態を検出したものである。３本の円筒埴輪は後円部を取り巻くように弧状に並んでいる。各埴輪間の距離を各々の基底部の中心間で計ると円46と円47・48の間が1.10m，円47・48と円44・45の間が1.36mである。また，断面より観察した円44・45の基底部中心と葺石端部間の距離は1.35mである。

各円筒埴輪の樹立はT_{10}での状況と同様に，墳丘盛土の裾部に不整円形ピットを掘ったものである。ピットの大きさは径30～35cmで，深さは底面が地山面（整地面）まで達したものであり，円46が15cm，円47・48が12cm，円44・45が18cmである。なお，ピットの中心間での間隔は，円46と円47・48の間が1.14m，円47・48と円44・45の間が1.37mである。

5　葺　　石

各トレンチの調査でも述べたとおり，葺石は墳丘斜面部にみられ，墳頂平坦部と円筒埴輪列を含めた墳丘裾部から周溝までの間には認められない。全面調査ではないが，墳丘斜面部は総て葺石で覆われていたものと思われる。

第16図はT_1の西壁断面であり，葺石の構築状況を断面で観察したものである。石材は総て河原石であり，低位には30～40cmの大きなものを含め，中～高位に上るに従って10～15cmの小さめのものが多くなっている。積み方としては，基本的に小口積であり，墳丘斜面に沿って少しずつずらしていったものである。また，断面で明らかなように２～３段が控えとして積まれている。なお，本トレンチにおける葺石端部から周溝内側立ち上がり上端までの距離が3.55m，葺石部の水平距離が3.45mであり，非常に近似した数値を示している。



第16図　T_1西壁断面図

6 土　器

本墳から出土した土器は，土師器坏と須恵器甕の２種類である。

(1) 土師器坏（第19図１～８）

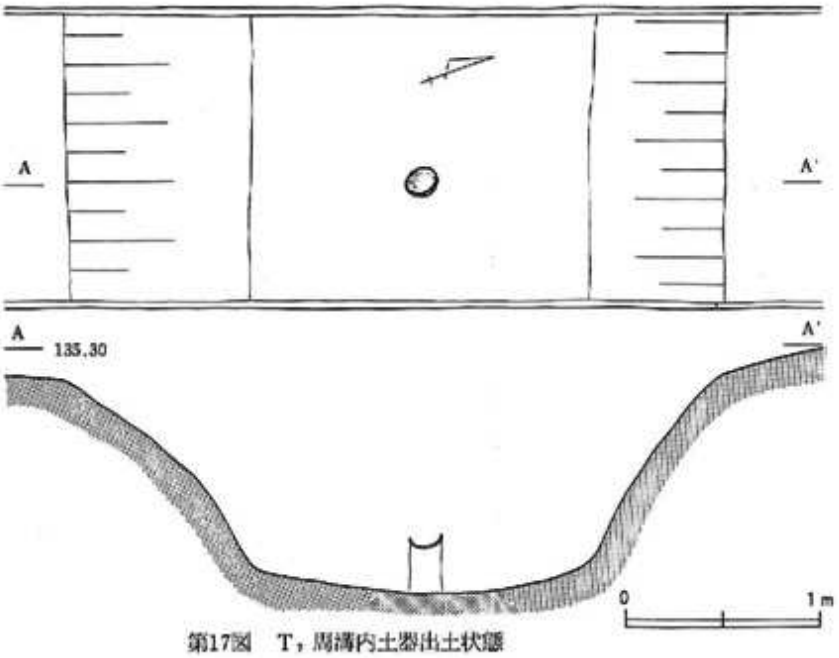
１～５は前方部東側に設定したT_8の墳丘裾部から出土したものである。このうち２～５は盗掘跡と思われる攪乱坑から埴輪片とともに細片で検出されたものであるが，１については基底部を残して樹立していた円筒埴輪（円10）のすぐ脇に口縁部を下にして検出されたものであり，原位置を止めていたものと考えられる。

７は前方部中央に設定したT_7の周溝内から出土したものである。位置は第17図のとおり周溝の中央で，本墳のほぼ主軸線上にあたっている。出土層位は底面より25cm上で，第１次埋没土層（第11図第４層）の上面にあたるが，本トレンチ内西側ではこの上に他では認められない黄褐色土層（第11図第５層）が堆積している。このことから，周溝がある程度埋没した段階で部分的な掘り返しが行なわれ，その際に本土器が置かれたものと考えられる。本土器は完形で，やや傾いていたものの，ほぼ口縁部を上にした状態で検出されたものである。

６は後円部中央に設定したT_1の周溝内から出土したものである。位置は第18図のとおり周溝外面立ち上がり寄りであり，本墳の主軸線の約１m西側にあたっている。出土層位は第１次埋没土層（第７図第４層）の上面で，底面より30cm上である。なお，本土器は焼成後に底部が穿孔されたものであり，７と同様に口縁部を上にした状態で検出されている。

８は西側くびれ部に設定したT_{10}の周溝埋土中から破片で検出されたものである。周溝内に流れ込んだと思われる数破片を接合して復元したものであり，完形品ではない。

以上８点の土師器坏は形状から，外面に稜を有して口縁部が内傾して立ち上がるもの（１～４）と半球形状の底部から口縁部がそのまま立ち上がるもの（５～８）の２つに分かれ



第17図　T_7周溝内土器出土状態

る。製作手法的な面では，両者とも底部外面をヘラケズリ，口縁部を横撫でで仕上げるという点では一致しているが，内面の調整については，前者が総て放射状のヘラ磨きを施しているというのに対し，後者の場合はこれを省き全面を横撫でで仕上げているもの（6と8）がみられ，2つの手法に分かれている。なお，各土器の法量及び胎土，焼成，色調等については表3のとおりである。

(2) 須恵器甕（第19図9～16）

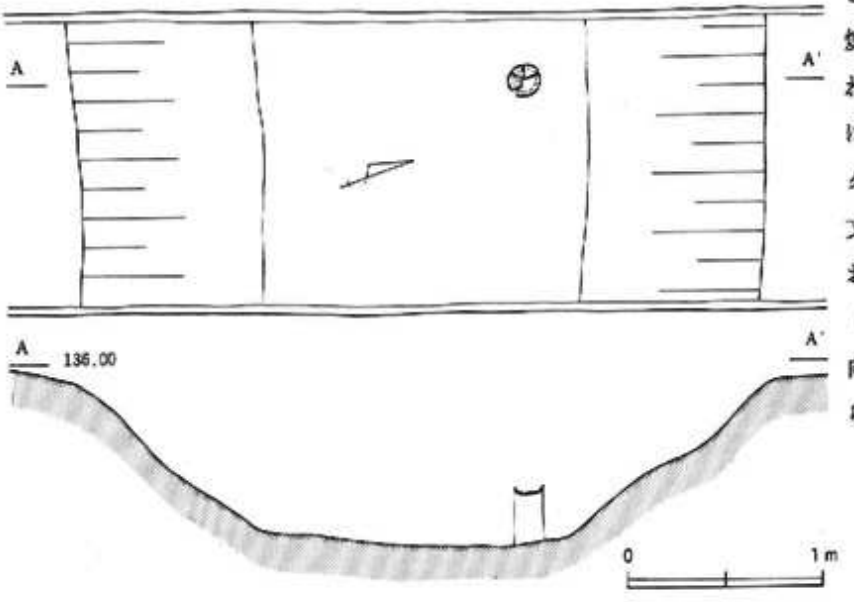
9，10及び13～16は後円部西側に設定したT_{11}の墳丘裾部から周溝にかけて出土したものであり，いずれも表土除去の段階で検出されたものである。

11は前方部西側に設定したT_8の墳丘斜面部から出土したものであり，表土除去の段階で葺石の上面から検出されたものである。

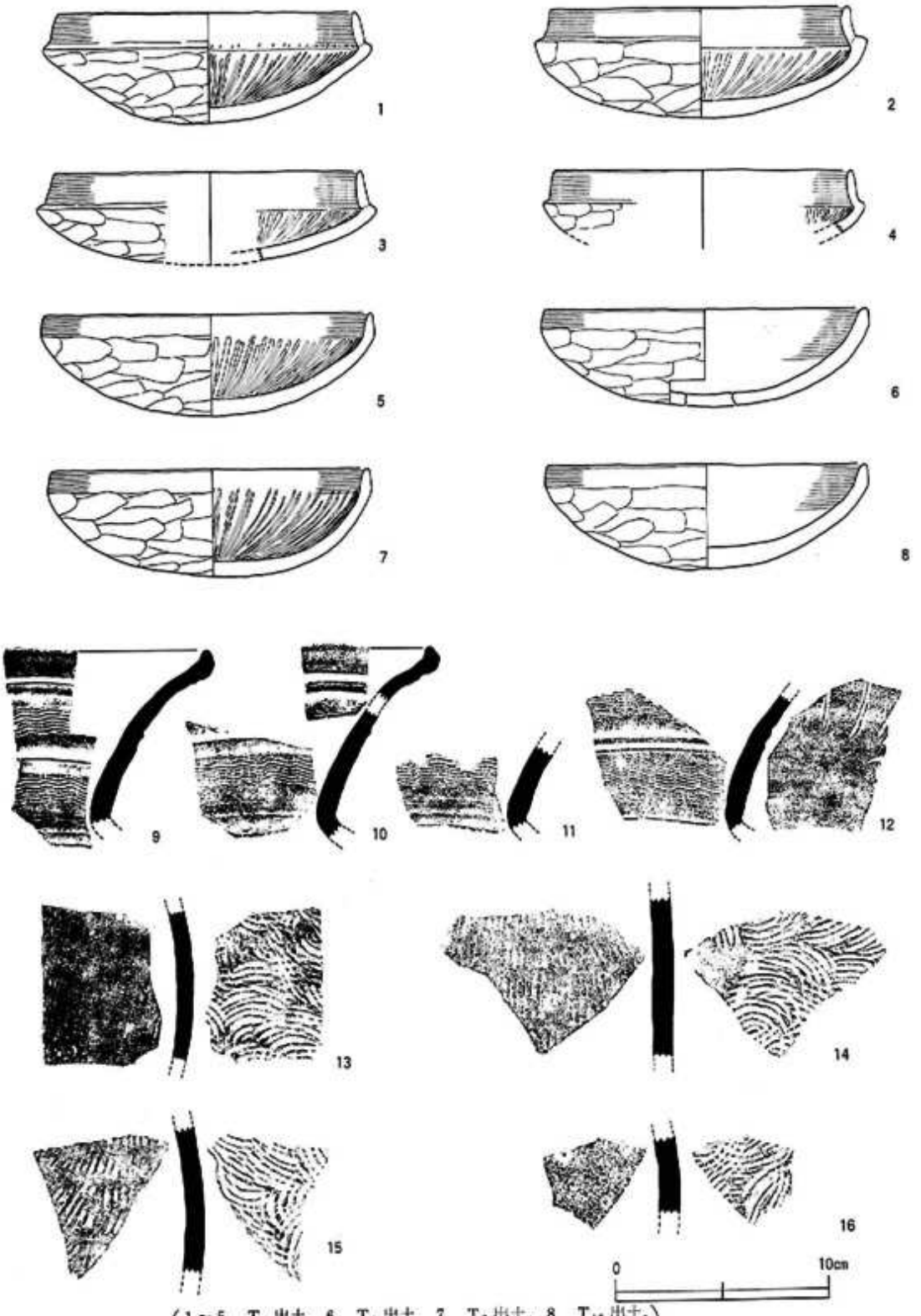
12は後円部北東側に設定したT_2の墳丘裾部から出土したものであり，やはり表土除去の段階で検出されたものである。

検出された須恵器甕は，いずれも小破片であり，上記したように出土位置にもちらばりがみられる。このようなことから，須恵器甕は破砕されて墳丘上にばらまかれたものと考えてよいようである。

検出された須恵器甕片は胎土，焼成，色調等から9～11・13・16と12・14・15の2種類に分かれており，2個体が存在したことを示している。前者（9～11・13・16）は，胎土焼成とも良好で黒灰色を呈するもので，口縁部には一条の凸線を挟んで波状文（7本）が二段に回る。後者（12・14・15）も口縁部に一条の凸線を挟んで2段の波状文（11～12本）が回るものであるが，胎土に砂粒を含み青灰色を呈するものであり，前者と比較すると一見して焼成のあまさが感じられるものである。胴部はいずれも外面に平行タタキ，内面に同心円文を残している。なお，後者の甕の口縁部（12）内面には，縦方向に3条のヘラ刻がみられる。



第18図　T_1周溝内土器出土状態



（1～5　T_5 出土，6　T_1 出土，7　T_7 出土，8　T_{14} 出土，）
（9・10・13～16　T_{11} 出土，11　T_9 出土，12　T_7 出土　）

第19図　稲荷2号墳出土土器

番号	器種（残存量）	法量	器形の特徴	調整の特徴 内面	調整の特徴 外面	胎土・焼成・色調その他
1	土師器 坏（完形）	13.7 5.2 ・	体部外面の稜は、丸みがある。底部が突出気味。	底面は放射状のヘラ磨き。	底部はヘラ削り。	胎土、焼成良好。橙褐色。
2	土師器 坏（1／3）	13.8 5.1 ・	体部外面の稜は、大きく張り出す。	底面は放射状のヘラ磨き。	底部はヘラ削り。	胎土、焼成良好。茶褐色。
3	土師器 坏（1／3）	(14.2) (4.4)	口縁部が直線的に内傾。	底面は放射状のヘラ磨き。	底部はヘラ削り。	胎土、焼成良好。明褐色。
4	土師器 坏（1／6）	(13.9) —— ——	体部外面の稜は、大きく張り出す。	底面は放射状のヘラ磨き。	底部はヘラ削り。	胎土、焼成良好。暗褐色。
5	土師器 坏（1／2）	15.1 4.8 ・	口縁部は直立。底部が突出気味。	底面は放射状のヘラ磨き。	底部はヘラ削り。	胎土に3mm前後の砂粒を少し含む。内面黒色処理。
6	土師器 坏（5／6）	15.1 4.6 ・	口縁部が厚手。	全面横撫で。	底部はヘラ削り。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含む。茶褐色。
7	土師器 坏（完形）	14.6 5.0 ・	口縁部は直立。底部が深め。	底面は放射状のヘラ磨き。	底部はヘラ削り。	胎土、焼成とも1に類似。
8	土師器 坏（1／2）	14.8 4.9 ・	口縁部は直立。	全面横撫で。	底部はヘラ削り。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含む。赤褐色。

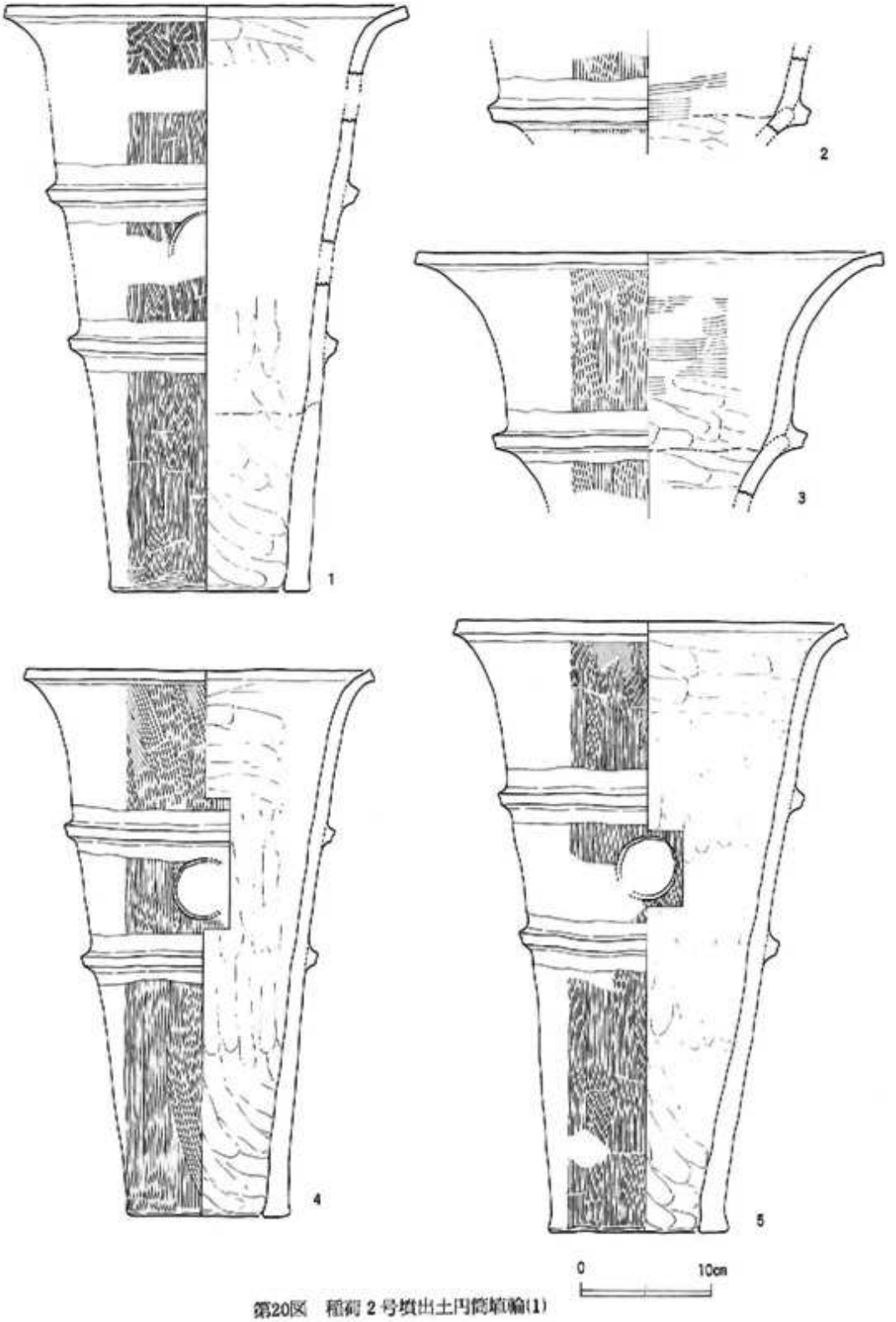
表3　2号墳出土土器観察表

7　埴　輪

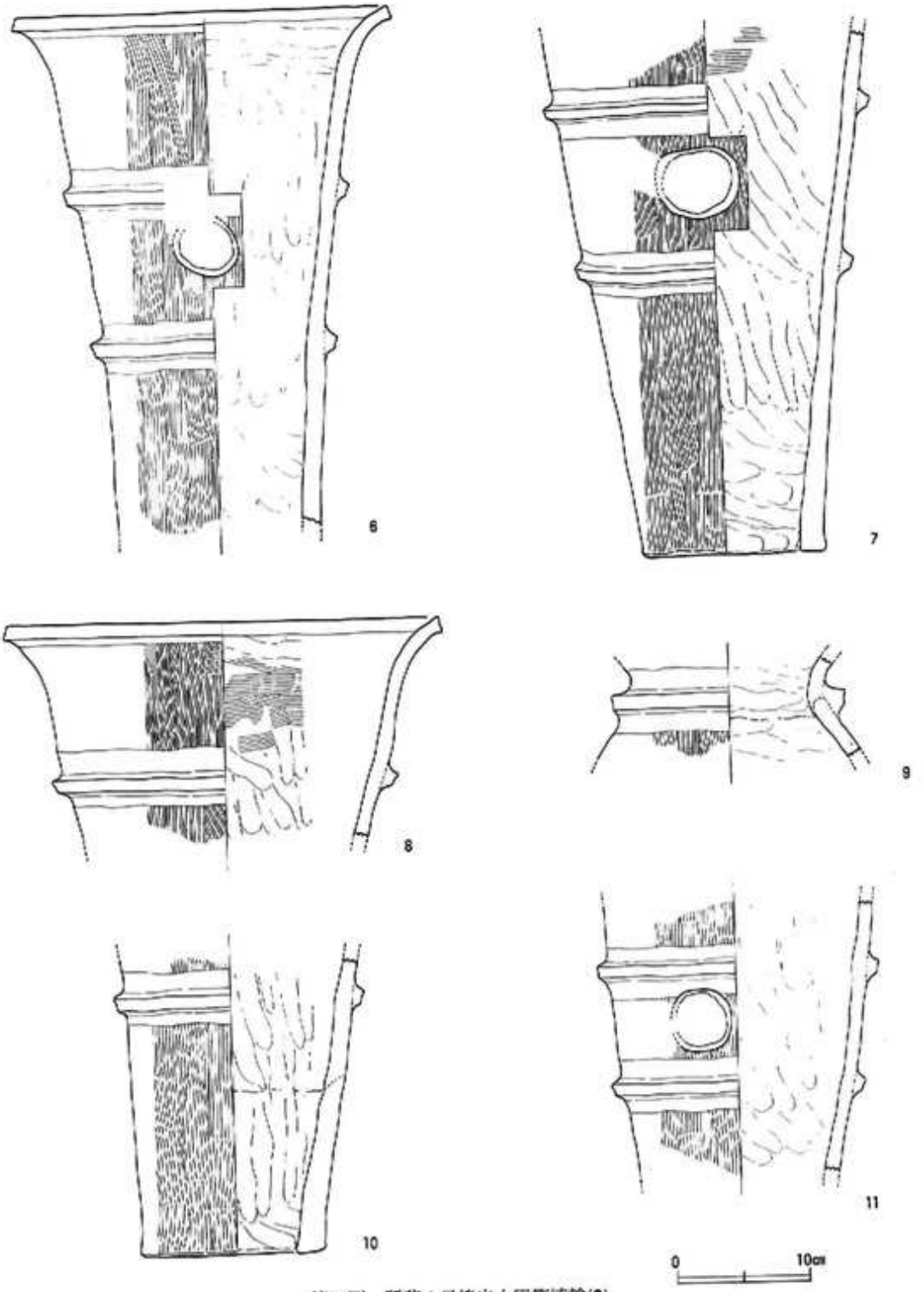
本墳から出土した埴輪は，円筒埴輪と形象埴輪の2種に大別される。

(1)　円筒埴輪

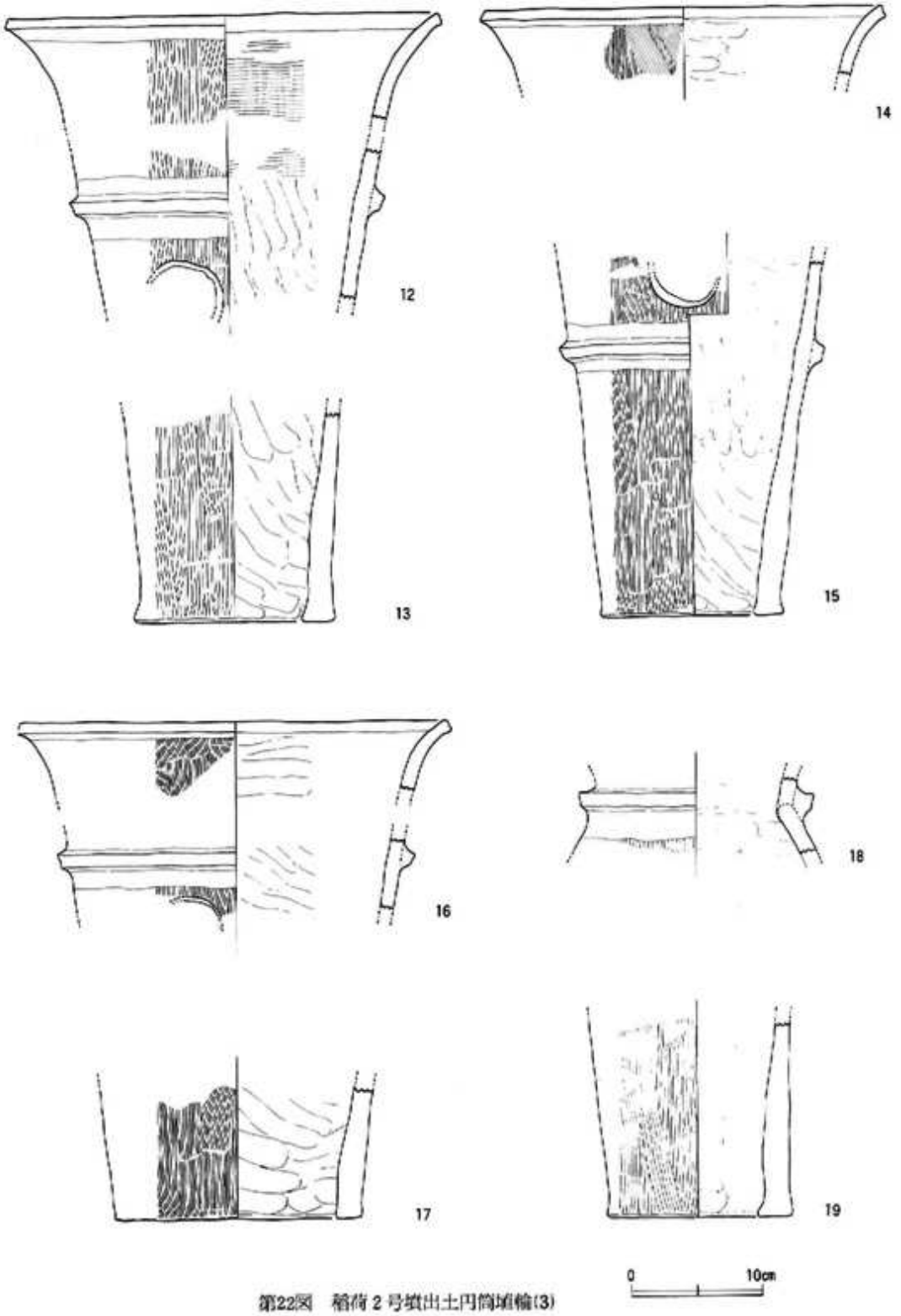
円筒埴輪は前述したように，埴輪列中に樹立または横倒しになった状態で17本が検出されているが，他に倒壊して墳丘裾部から周溝に流れ込んでいた破片がかなり認められる。これらの破片の大半は原位置に樹立していたものに接合するかあるいは同一個体と認められるものであるが，胎土，焼成，調整などから明らかに別個体とみられるものも相当数含まれている。実測に際しては，これら別個体と思われるものをできる限り図面化したため，総個体数は36本となっている。また，完形品が少ないこともあり，同一個体と思われるものは接合ができない場合でも図面化の段階で復元したものも多い。各トレンチの出土個体数はT_1が2本，T_2が1本，T_5が8本，T_6が4本，T_{14}が2本，T_8が2本，T_9が4本，T_{10}が5本，T_{11}が5本，T_{12}が1本，T_{13}が2本であり，T_3・T_4・T_7では円筒埴輪が出土していない。



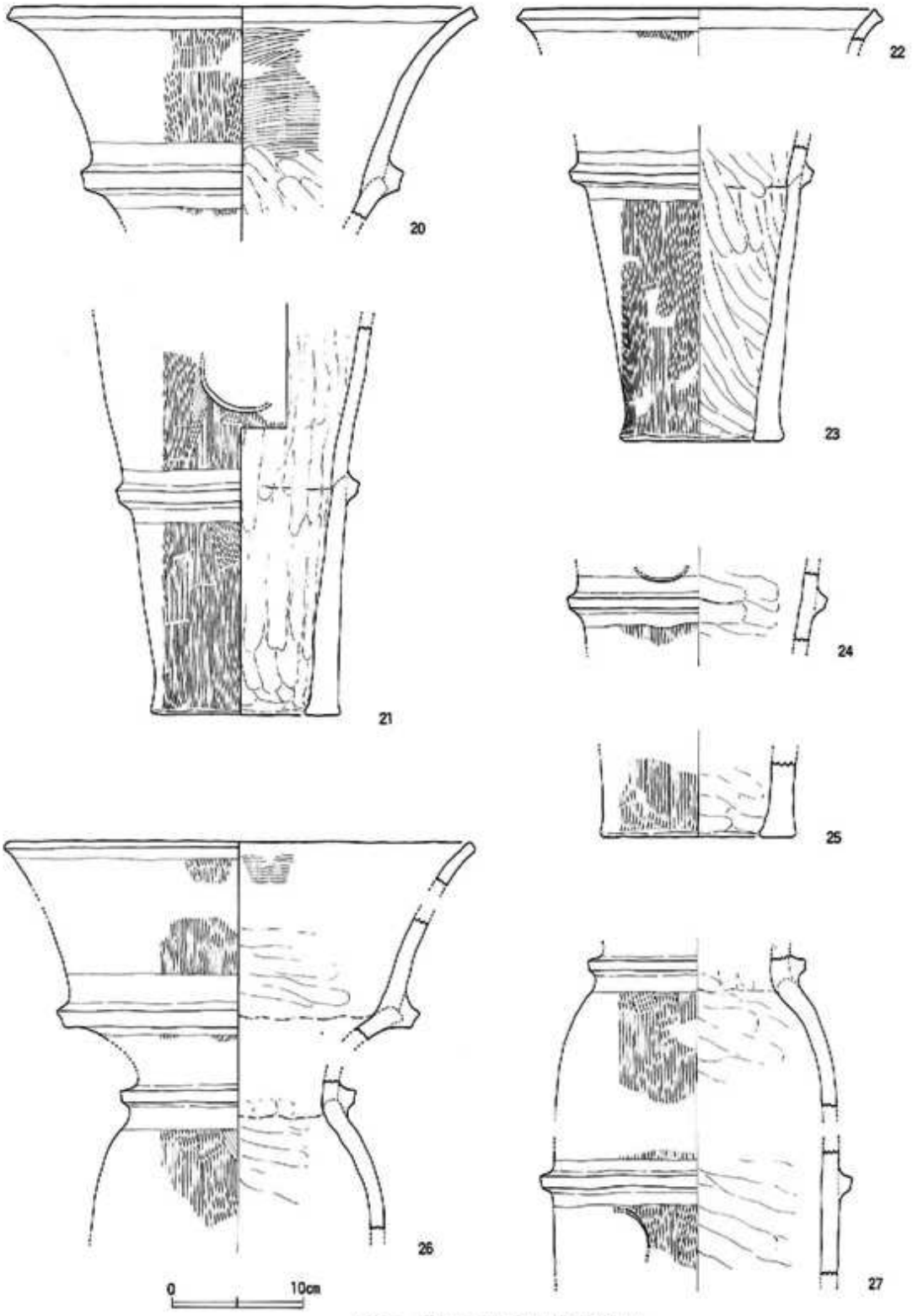
第20図　稲荷２号墳出土円筒埴輪(1)



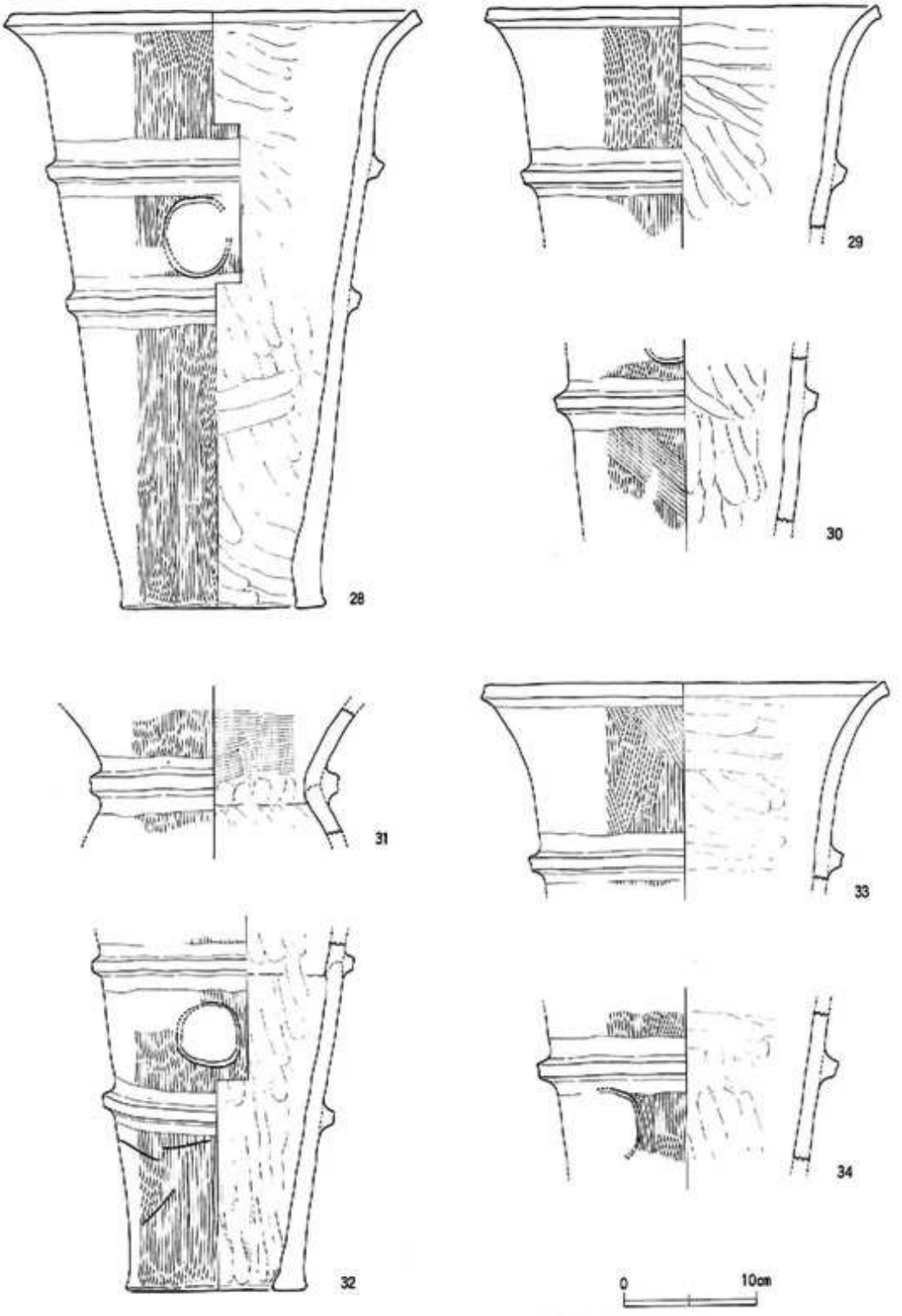
第21図　稲荷２号墳出土円筒埴輪(2)



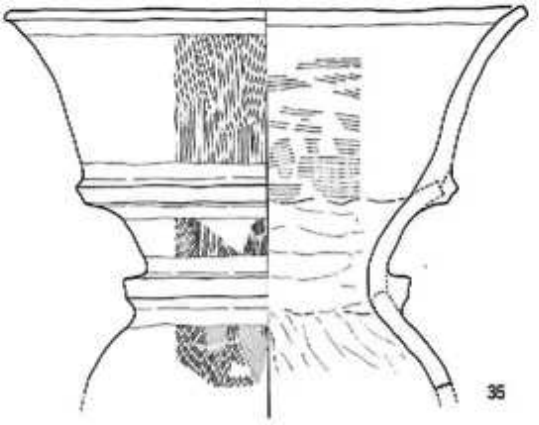
第22図　稲荷2号墳出土円筒埴輪(3)

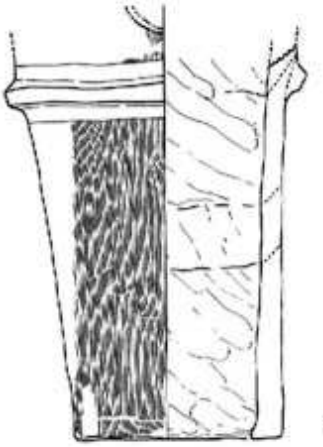


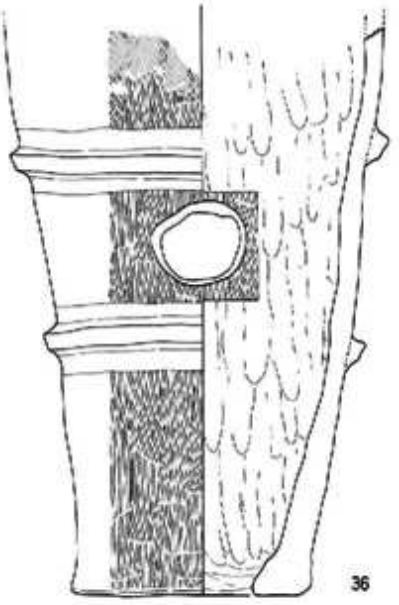
第23図　稲荷２号墳出土円筒埴輪(4)

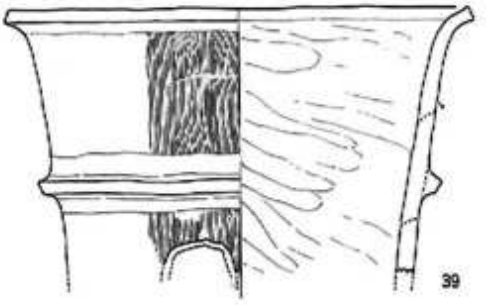


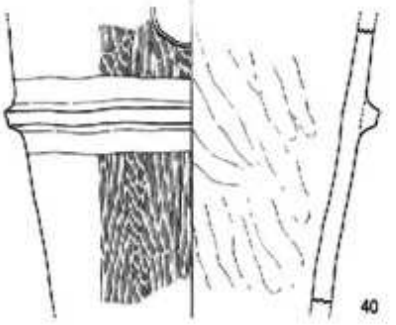
第24図　稲荷２号墳出土円筒埴輪(5)

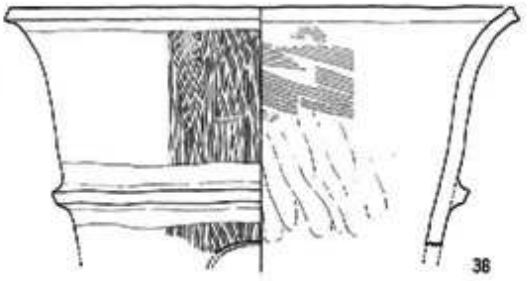


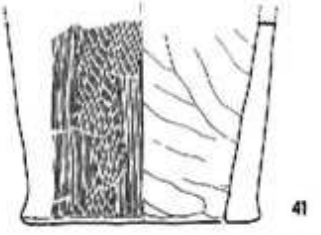






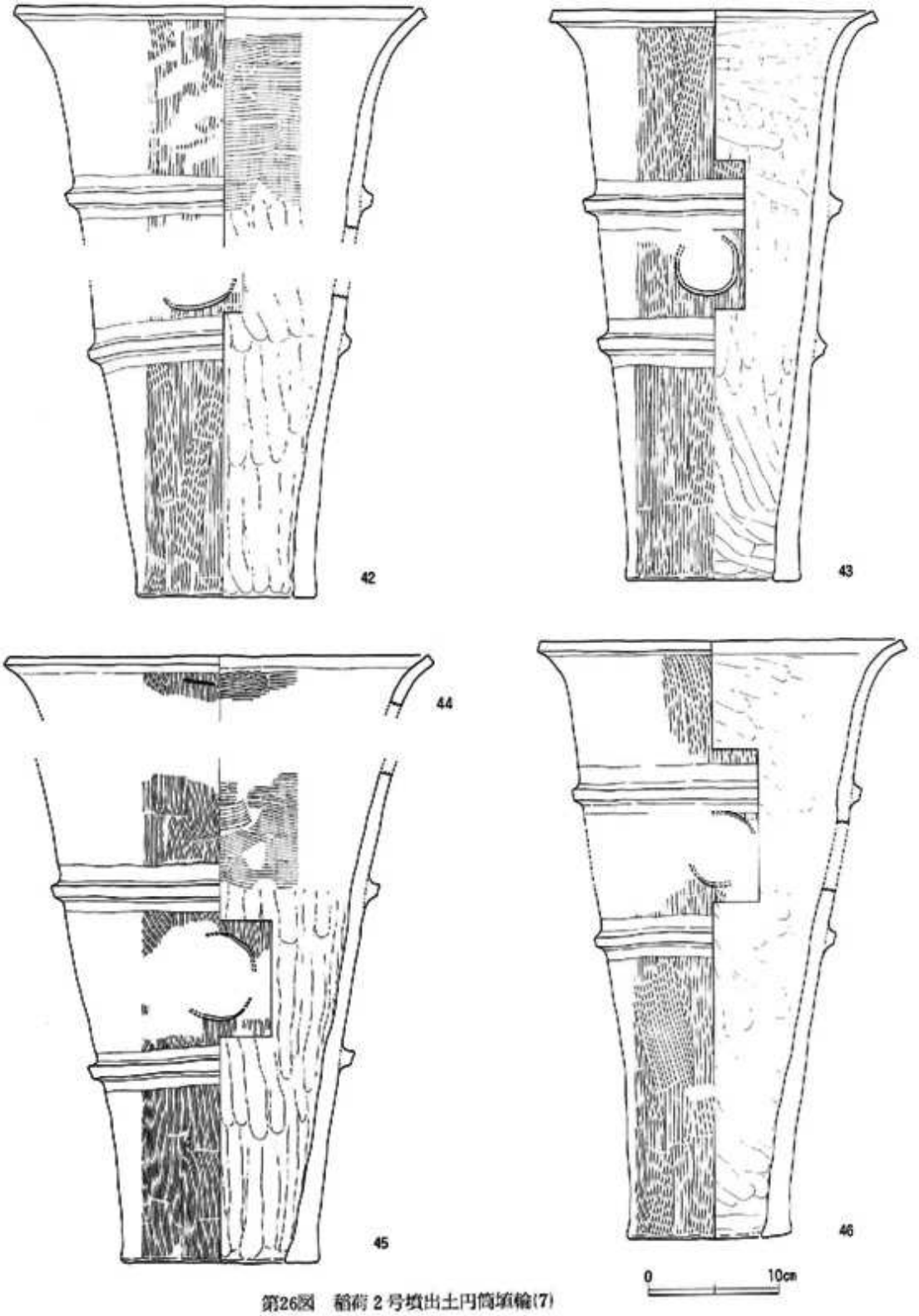




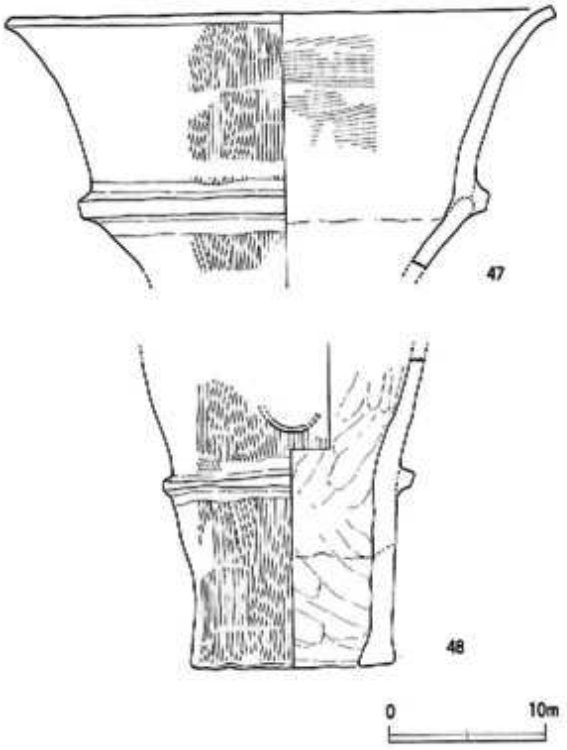


0 10cm

第25図　稲荷２号墳出土円筒埴輪(6)



第26図　稲荷２号墳出土円筒埴輪(7)



第27図　稲荷２号墳出土円筒埴輪(8)

実測した円筒埴輪36本中，10本は朝顔形のものであるが，成形及び調整はほぼ同一である。

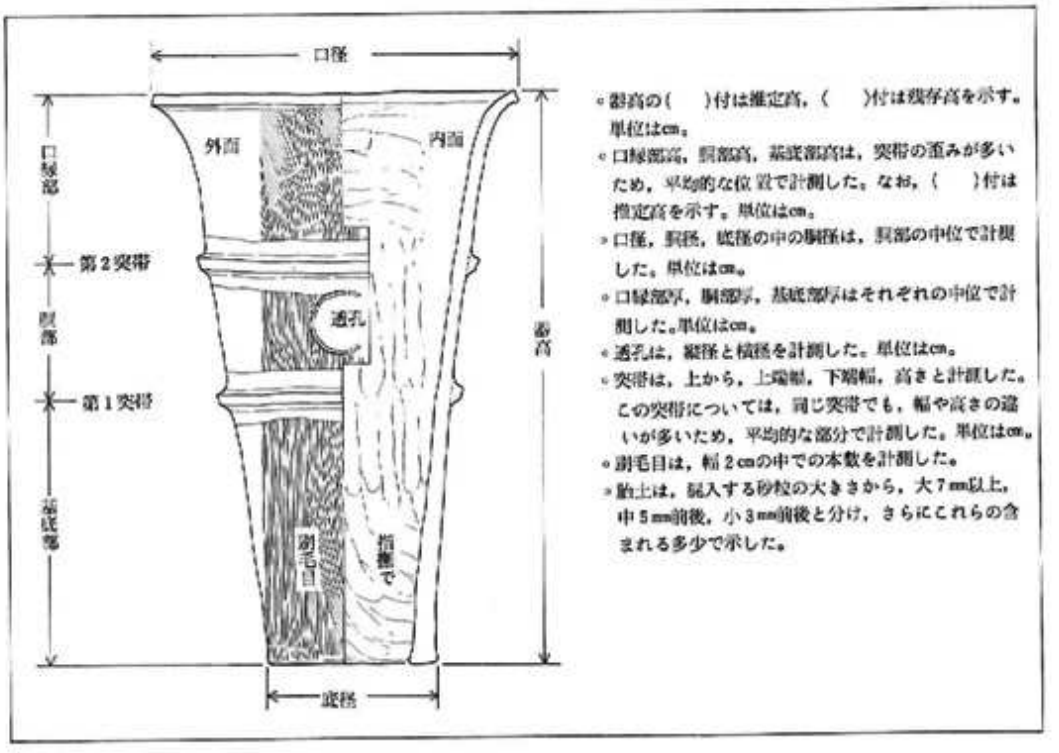
成形は基底部を幅10～12.3cmの粘土板で円筒を造り，それから上は粘土紐の巻上げと考えられる。全体に接合痕は調整で消されているが，調整の施されない基部外面にはこれが残るものが多い。（ＰＬ27参照）

外面の調整は総て縦刷毛であるが，内面は全面指撫でのものと口縁部のみに横刷毛を施すものとの２種類がみられる。また口縁部は総て横撫でされている。

凸帯の貼付及び透孔の穿孔は，総て外面の刷毛調整後に行なわれている。

なお，製作終了後の底部調整は認められない。

各円筒埴輪については，以下の凡例に従って表４～６に観察事項を示すこととする。



番号	器高	口縁部高 胴部高 基底部高	口径 胴径 底径	口縁部厚 胴部厚 基底部厚	透孔 横×縦		突帯 第1	突帯 第2	刷毛目	色調	胎土	焼成	調整の特徴	備考
1	(45.0)	(14.6) (11.8) 18.6	(30.0) (20.0) 15.3	1.0 1.1 1.9			0.9 2.6 1.0	1.0 2.7 1.0	11	橙色	中多	普通	外面 縦刷毛後突帯貼付基部外面には調整 内面 指撫で（斜位→縦位→横位）	基部外面には調整時の横刷毛を1部残す。
2	〈5.7〉	— — —	— — —	11.1 — —			1.2 3.2 1.2		7 ~ 8	橙色	中少	普通	外面 縦刷毛後突帯貼付 内面 横刷毛	朝顔形円筒。
3	〈18.8〉	— — —	(36.0) — —	1.2 — —			1.3 3.0 1.2		7 ~ 8	橙色	中少	普通	外面 縦刷毛後突帯貼付 内面 口縁部横刷毛，他は横指撫で。	朝顔形円筒。
4	41.7	12.7 9.5 19.5	26.9 17.6 12.6	1.0 1.0 1.7	(4.3)		0.8 2.4 0.8	0.8 1.8 0.9	8	黄橙色	中多	不良	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 指撫で（斜位→縦位→横位）	
5	46.6	13.7 11.0 21.9	30.3 19.8 13.8	1.1 1.1 1.8	5.2 × 5.3		1.1 2.5 1.0	1.0 2.3 0.9	10	橙色	中少	普通	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 指撫で（斜位→縦位→横位）	
6	〈38.5〉	13.7 11.4 —	28.7 17.9 —	1.2 1.1 1.6	4.6 × 5.0	4.8 × 4.5	1.0 2.4 0.9	0.8 2.1 1.0	7 ~ 8	赤褐色	大少	良好	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 指撫で（斜位→縦位→横位）	
7	〈39.0〉	— 12.4 21.1	— 21.2 14.0	1.0 1.1 1.8	6.5 × 5.6		1.0 2.6 0.9	0.9 2.2 0.7	10 ~ 11	橙色	中少	普通	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 指撫で（横位→斜位→縦位→斜位）口縁部のみ横刷毛。	
8	〈16.7〉	12.2 — —	(33.0) (21.0) —	1.0 1.1 —				1.0 2.3 1.0	11	橙色	中少	普通	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 口縁部横刷毛，他は縦指撫で。	
9	〈7.6〉	— — —	— — —	— 1.1 —			1.2 2.9 1.1		10	橙色	中少	普通	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 横指撫で。	朝顔形円筒。
10	〈22.1〉	— — 19.1	— — 14.0	— 1.1 1.9			0.8 2.3 1.0		7 ~ 8	橙色	中少	普通	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 指撫で（横位→縦位）	
11	〈20.1〉	— 9.1 —	— 18.6 —	1.0 1.0 —	4.5 × 4.2		0.8 2.2 0.9	0.9 2.5 0.9	7 ~ 8	明橙色	大多	不良	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 指撫で（斜位→縦位）	
12	〈21.5〉	(14.5) — —	33.1 19.2 —	1.1 1.2 —				0.9 2.5 1.0	7	橙色	小多	普通	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 口縁部横刷毛，他は縦指撫で。	13と同一個体。
13	〈16.0〉	— — —	— — 15.2	— — 1.9					〃	橙色	〃	〃	外面 縦刷毛 内面 指撫で（斜位→縦位）	12と同一個体。
14	〈5.2〉	— — —	(31.0) — —	1.0 — —					10 ~ 11	橙色	中少	普通	外面 縦刷毛。 内面 横指撫で。	15と同一個体。
15	〈27.3〉	— — 20.3	— 20.5 13.9	— 1.0 2.0			1.0 2.9 1.0		〃	橙色	〃	〃	外面 縦刷毛。 内面 指撫で（斜位→縦位）	14と同一個体。
16	〈15.0〉	(10.5) — —	(33.0) (23.0) —	1.0 1.0 —				1.0 2.2 1.0	11 ~ 12	明橙色	小多	不良	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 指撫で（斜位→横位）	17と同一個体。

表4　2号墳出土円筒埴輪観察表(1)

番号	器高	口縁部高 胴部高 基底部高	口径 胴径 底径	口縁部厚 胴部厚 基底部厚	透孔 横×縦		突帯 第1	突帯 第2	刷毛目	色調	胎土	焼成	調整の特徴	備考
17	〈10.0〉	— — —	— — 18.6	— — 2.0					11 1 12	明橙色	小多	不良	外面 縦刷毛。 内面 指撫で（横位→斜位）	16と同一個体
18	〈 6.0〉	— — —	— — —	— 1.2 —			1.4 3.0 1.1		7 1 8	橙色	〃	普通	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 横指撫で。	朝顔形円筒。 19と同一個体か？。
19	〈15.1〉	— — —	— — 14.2	— — 2.1					〃	〃	〃	〃	外面 縦刷毛。 内面 指撫で（斜位→縦位）	18と同一個体か？。
20	〈16.3〉	13.4 — —	36.0 — —	1.2 — —			1.3 2.9 1.4		〃	〃	小少	〃	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 口縁部横刷毛，他は斜指撫で。	朝顔形円筒。 21と同一個体か？。
21	〈29.8〉	— — 16.6	— 19.8 14.4	— 1.1 2.0	(5.6) × (4.8)	(5.7) × (4.7)	0.9 2.3 0.8		10 1 11	〃	〃	〃	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 指撫で（横位・縦位）	20と同一個体か？。
22	〈 2.5〉	— — —	(28.2) — —	1.0 — —					10	明橙色	中少	〃	外面 縦刷毛。 内面	23と同一個体。
23	〈22.5〉	— — 20.1	— — 12.6	— 1.1 1.7			0.9 2.2 0.8		〃	〃	〃	〃	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 斜指撫で。	22と同一個体。
24	〈 5.5〉	— — —	— (19.5) —	— 1.1 —			0.9 2.5 0.8		7 1 8	橙色	〃	〃	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 横指撫で。	25と同一個体。
25	〈 6.0〉	— — —	— — (18.0)	— — 1.9					7	〃	〃	〃	外面 縦刷毛。 内面 指撫で（横位→斜位）	24と同一個体。
26	〈29.5〉	(13.5) — —	(36.0) (22.5) —	1.2 1.1 —			1.2 2.6 0.9	1.5 2.9 1.2	〃	〃	〃	〃	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 口縁部上半横刷毛，他は横指撫で。	朝顔形円筒。
27	〈24.5〉	— — —	— (21.0) —	— 1.1 —			1.0 2.4 1.0	1.2 2.5 0.7	〃	〃	〃	〃	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 横指撫で。	朝顔形円筒。
28	〈45.0〉	12.1 (10.0) 22.9	31.4 22.2 15.4	1.0 1.1 2.1	4.6 × 4.4		0.9 2.5 1.0	1.0 2.4 1.0	〃	〃	小多	〃	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 指撫で（横位→斜位→横位）	
29	〈16.7〉	12.8 — —	(30.0) (21.0) —	1.0 1.1				0.9 2.4 1.0	〃	明橙色	中少	〃	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 指撫で（斜位→横位）	
30	〈12.6〉	— — —	— (19.0) —	— 1.1 —			1.0 2.5 1.0		8	〃	小多	〃	外面 縦及び斜位刷毛後突帯貼付。 内面 縦指撫で。	
31	〈 9.2〉	— — —	— — —	— 1.1 —			1.2 2.8 1.2		7 1 8	橙色	中少	〃	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 横刷毛と指おさえ。	朝顔形円筒。 32と同一個体か？。
32	〈26.3〉	— 10.8 13.7	— 17.1 13.5	— 1.2 1.5	(6.0) × (4.6)	5.4 × 4.8	1.0 2.2 0.8	0.9 2.0 0.8	〃	〃	〃	〃	外面 縦刷毛後突帯貼付。 内面 縦指撫で，一部に斜位刷毛を残す。	31と同一個体か？。 基底部外面にヘラ刻。

表5　2号墳出土円筒埴輪観察表(2)

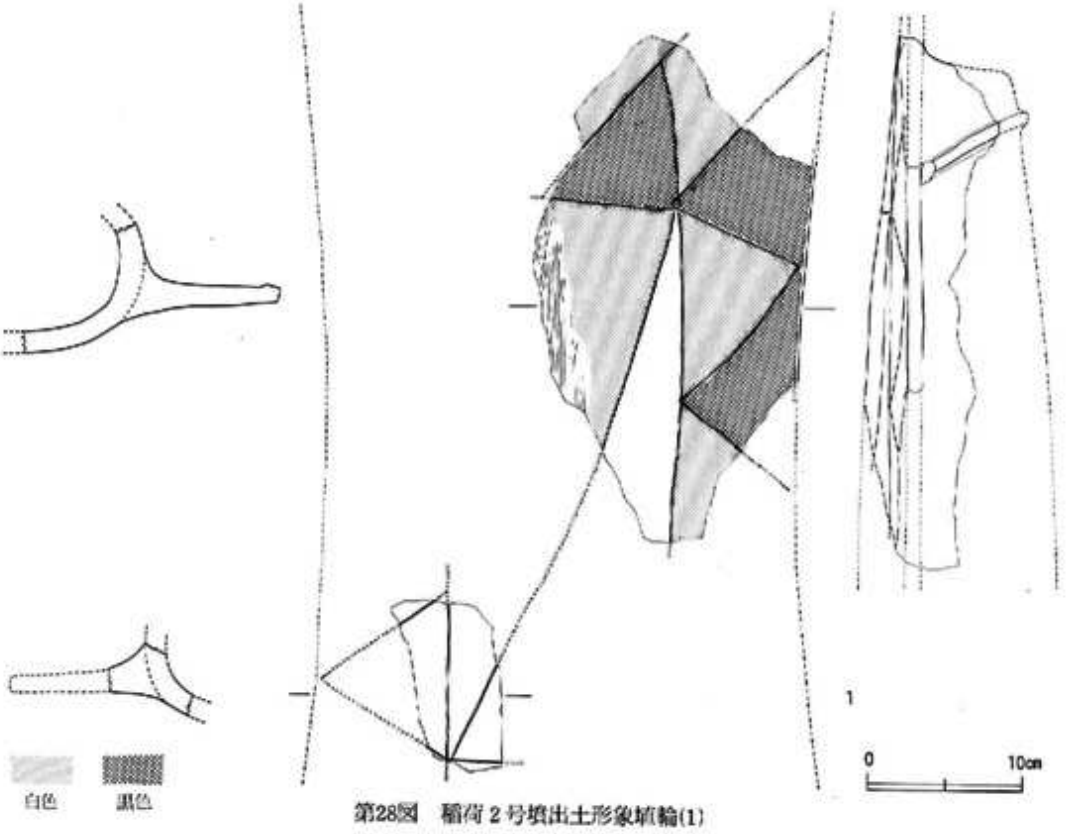
番号	器高	口縁部高 胴部高 基底部高	口径 胴径 底径	口縁部厚 胴部厚 基底部厚	透孔 縦 × 横		突帯 第1	突帯 第2	刷毛目	色調	胎土	焼成	調製の特徴	備考
33	(15.2)	13.5 — —	30.8 — —	1.0 — —	(5.0)			1.0 2.5 0.9	7	橙色	中少	普通	外面　縦刷毛後突帯貼付。 内面　横指撫で。	
34	(11.3)	— — —	— 18.5 —	1.1 1.2 —	(5.0) × (4.8)			1.2 2.7 1.0	8	〃	大少	〃	外面　縦刷毛後突帯貼付。 内面　指撫で（縦位→横位）	
35	(24.5)	11.9 — —	33.6 — —	1.2 1.1 —			1.4 3.0 1.3	1.0 3.2 1.1	10 7と1 11	〃	中少	〃	外面　縦刷毛後突帯貼付，口縁部とくびれ部以下の刷毛目が異なる。 内面　口縁部横刷毛，他は指撫で。	朝顔形円筒。 36と同一個体。
36	(36.7)	— 11.4 16.5	— 20.4 15.3	1.1 1.2 2.1			1.0 2.5 1.0	1.0 2.7 1.2	10 1 11	〃	〃	〃	外面　縦刷毛後突帯貼付。 内面　指撫で（横位→縦位）	35と同一個体。
37	(27.0)	— — 22.3	— (19.5) 15.4	— — 1.7			0.9 2.7 0.8	2.5	11 1 12	橙黄色	大少	不良	外面　縦刷毛後突帯貼付。 内面　斜指撫で。	
38	(15.3)	12.1 — —	(33.0) (22.0) —	1.0 1.0 —				0.9 2.5 0.8	12	橙色	小多	普通	外面　縦刷毛後突帯貼付。 内面　口縁部横刷毛，他は斜指撫で。	
39	(17.0)	11.7 — —	30.5 22.0 —	1.0 1.1 —				1.0 2.3 0.9	11	〃	〃	〃	外面　縦刷毛後突帯貼付。 内面　斜指撫で。	
40	(17.8)	— — —	— (24.0) —	— 1.1 —			1.0 2.5 1.0		11 1 12	〃	〃	〃	外面　縦刷毛後突帯貼付。 内面　斜指撫で。	41と同一個体。
41	(13.0)	— — —	— — 15.3	— — 1.7					〃	〃	〃	〃	外面　縦刷毛。 内面　指撫で（横位→斜位）	40と同一個体。
42	(45.5)	14.6 11.5 19.4	31.7 (20.7) 13.9	1.0 1.1 1.6			0.8 2.3 0.7	0.9 2.4 0.8	7 1 8	明橙色	〃	不良	外面　縦刷毛後突帯貼付。 内面　口縁部横刷毛，他は縦指撫で。	
43	44.0	15.0 10.8 18.2	25.9 17.2 13.6	1.0 1.1 1.9	4.8 × 4.3		0.9 2.3 0.8	1.0 2.3 0.9	〃	赤褐色	中多	良好	外面　縦刷毛後突帯貼付。 内面　指撫で（横位→縦位→横位）	
44	(4.0)	— — — —	(33.0) — —	— — —					11 1 12	橙色	中少	普通	外面　縦刷毛。 内面　横刷毛。	45と同一個体。
55	(38.0)	— 13.4 15.1	— 21.2 15.2	1.0 1.0 1.6	— × 6.2		1.1 2.2 1.0	1.0 2.2 0.9	〃	〃	〃	〃	外面　縦刷毛後突帯貼付。 内面　口縁部横刷毛，他は縦指撫で。	44と同一個体。
46	(46.2)	11.9 11.2 23.1	28.6 (19.6) 12.8	0.9 1.0 1.8	— × 5.3		0.7 2.3 0.8	0.8 2.2 0.8	7 1 8	明橙色	大少	不良	外面　縦刷毛後突帯貼付。 内面　指撫で（横位→斜位）	
47	(16.7)	(12.5) — —	(35.2) — —	1.1 — —			1.1 2.7 1.0		〃	〃	中少	〃	外面　縦刷毛後突帯貼付。 内面　口縁部横刷毛。	朝顔形円筒。 48と同一個体。
48	(20.0)	— — 12.0	— 17.8 13.1	— 0.9 1.5			1.0 1.8 0.8		〃	〃	〃	〃	外面　縦刷毛後突帯貼付。 内面　斜指撫で。	47と同一個体。

表6　2号墳出土円筒埴輪観察表(3)

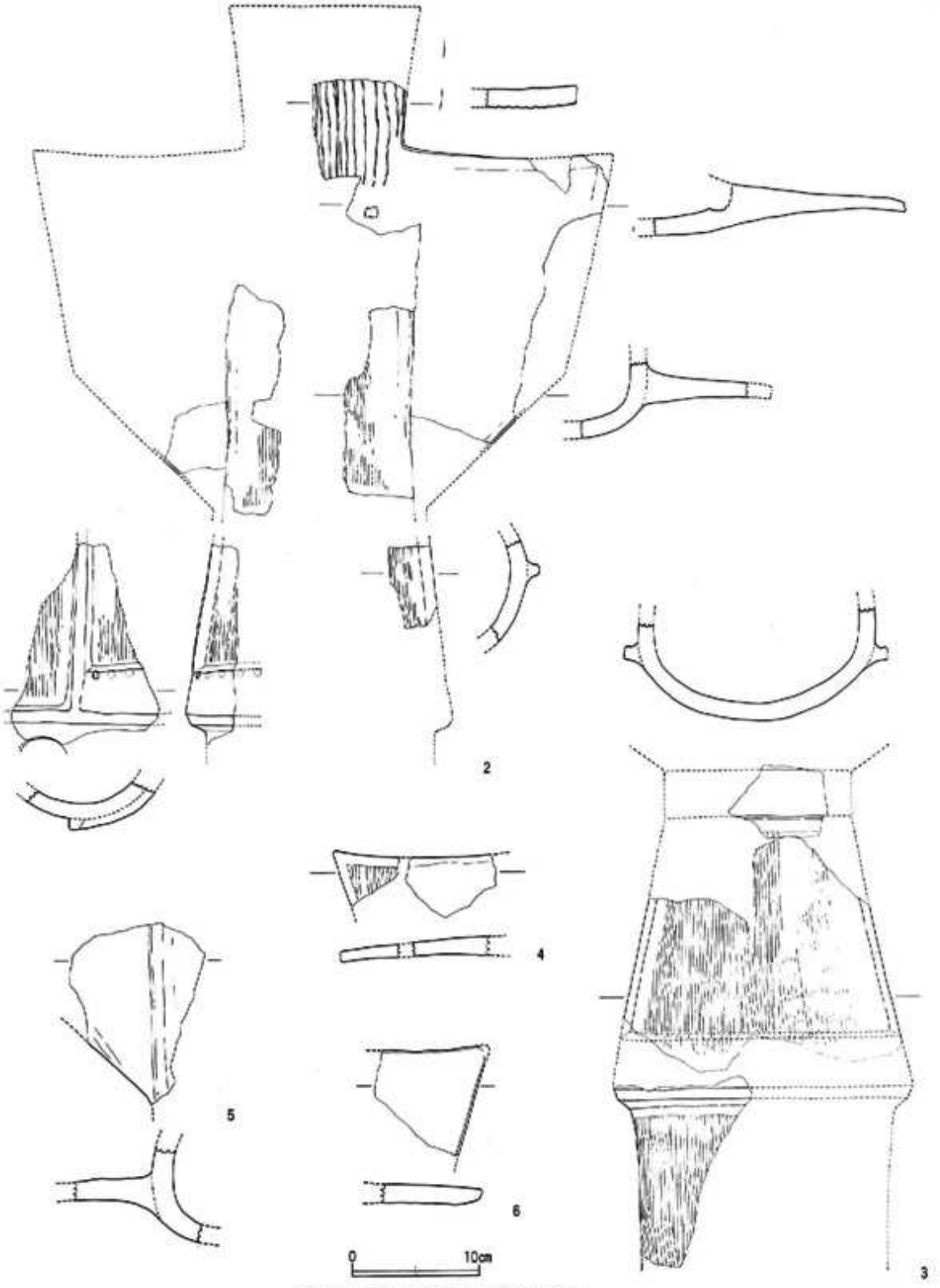
(2) 形象埴輪

今回の調査で検出された形象埴輪は，ほとんどが断片的な資料であり，全体の器形を残すものは一点もみられなかった。これらの資料の中には器種の判断に苦しむものもいくつかみられたが，ある程度の推定も含めて，盾，靭，鞆，家，人物，動物（馬）の6種類の存在を確認することができた。

盾　（第28図1）　西側くびれ部の墳端部（T$_{10}$内）から出土したものである。図で示したとおり2つの破片に分かれており，大きい方で残存高32.5cm，幅17.5cmである。盾は粘土板を円筒の正面寄りに接合し，翼状にしたものである。円筒は⅓程度の残存であるが翼の接合する方向に長い楕円形を呈するものとみられる。盾の正面，背面とも撫でて仕上げられているが，正面の中央近くには一部刷毛目を残している。盾は上下両辺が不明であるが，残存する側辺から中央部でやや幅の狭くなる長方形とみられる。この中央部での推定幅は30cmである。盾正面には三角形を基調とした文様が篦により描かれている。中央部に長方形で区画した大きい三角形（長方形の両対角線を結んでいたともみられる）を配し，左右そして恐らく上下を小さい三角形による鋸歯文帯で囲んだものとみられる。さらに各区画には白色と黒色が交互に塗彩されたものである。



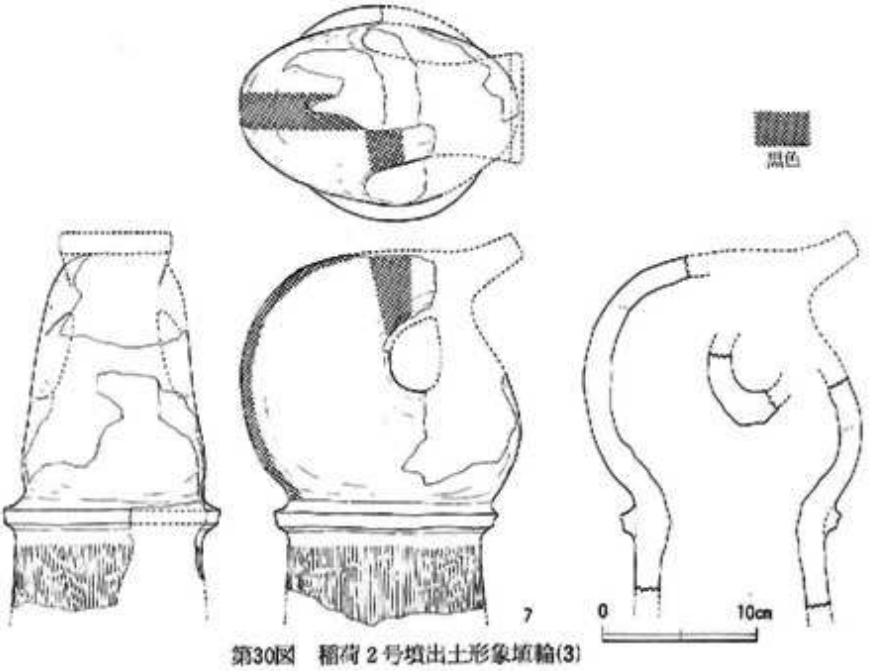
第28図　稲荷2号墳出土形象埴輪(1)



第29図　稲荷２号墳出土形象埴輪(2)

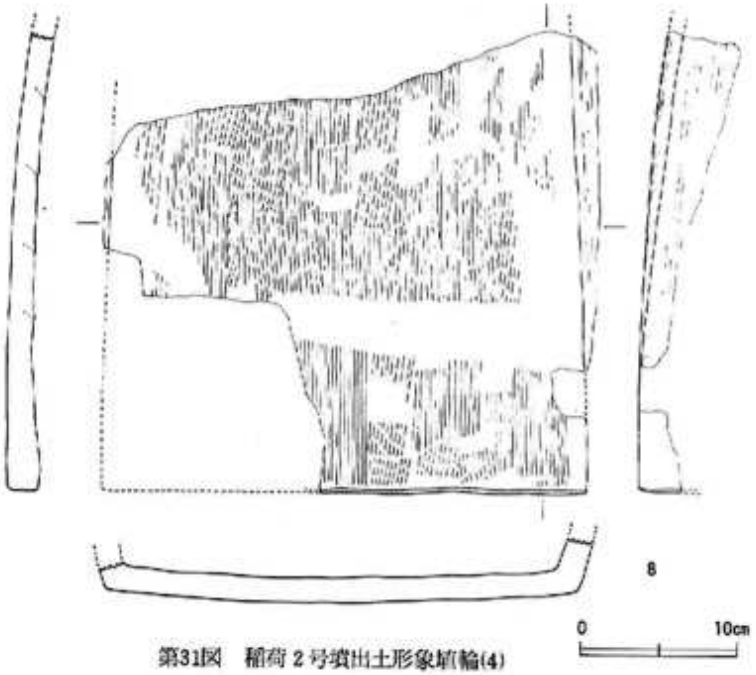
靭　（第29図２～６）　２は後円部西側墳端部から周溝内部（T_{11}）にかけて散乱していたものである。残存していたものは，両翼の一部とそれに続く鏃の表現部，そして裾部の断片である。矢筒の上半部は奴凧風に２つ大きな翼を，そして下半部には短かい鰭をつけた形のものである。両翼上端部での推定幅は45.5cmである。鏃の表現部は，厚さ1.4cmの方形板状のもので表面に幅１～1.5mmの篦による矢柄が表現されるが，鏃身部は欠損する。また，矢筒の上縁部は鋲留めを表現したとみられるボタン状の粘土粒が一個浅る。両翼は両耳を切り落とした形となり，中央部の横帯に向っているが，横帯は欠損している。下半部の裾には隆帯がめぐり，その上縁に鋲留めを表現した粘土粒が付されている。粘土粒は１個を残し総て欠損しているが，その間隔は約１cmである。矢筒表面及び下半部に刷毛目を残す以外は撫でて仕上げられ，胎土には砂粒を含みにぶい橙色を呈している。３は西側くびれ部（T_{10}）の円筒埴輪列寄りから出土したもので，靭の下半部から基部にかけての破片である。表面は全体に縦刷毛が残るが，一部残る横帯は撫でて仕上げられている。胎土には砂粒を含み明るい橙色を呈する。４は同じトレンチの周溝から出土したものであるが，胎土などから３の翼部上端隅の破片とみられる。５・６は後円部北側の墳丘斜面葺石上（T_1）から出土したもので，５が矢筒と翼の接合部，６が翼部上端隅の破片である。同一個体とみられ，胎土に砂粒を多く含み，淡い橙色を呈する。

鞆　（第30図７）　後円部北東（T_2）の葺石端部周辺に破片で散乱していたものである。鞆は上部を欠損するが，形状はほぼ想定できる。鞆の残存高は16.4cmで最大径は17.9cm。鞆の下部は一条の突帯を挟んで円筒形の基部へ続く。鞆の表面は，総て撫でて仕上げられ基部には縦刷毛が残る。鞆の上面及び側面に幅１～1.5cmの帯状の文様が黒色で塗彩されている。胎土には砂粒を含むが，焼成は良好で，明るい橙色を呈する。



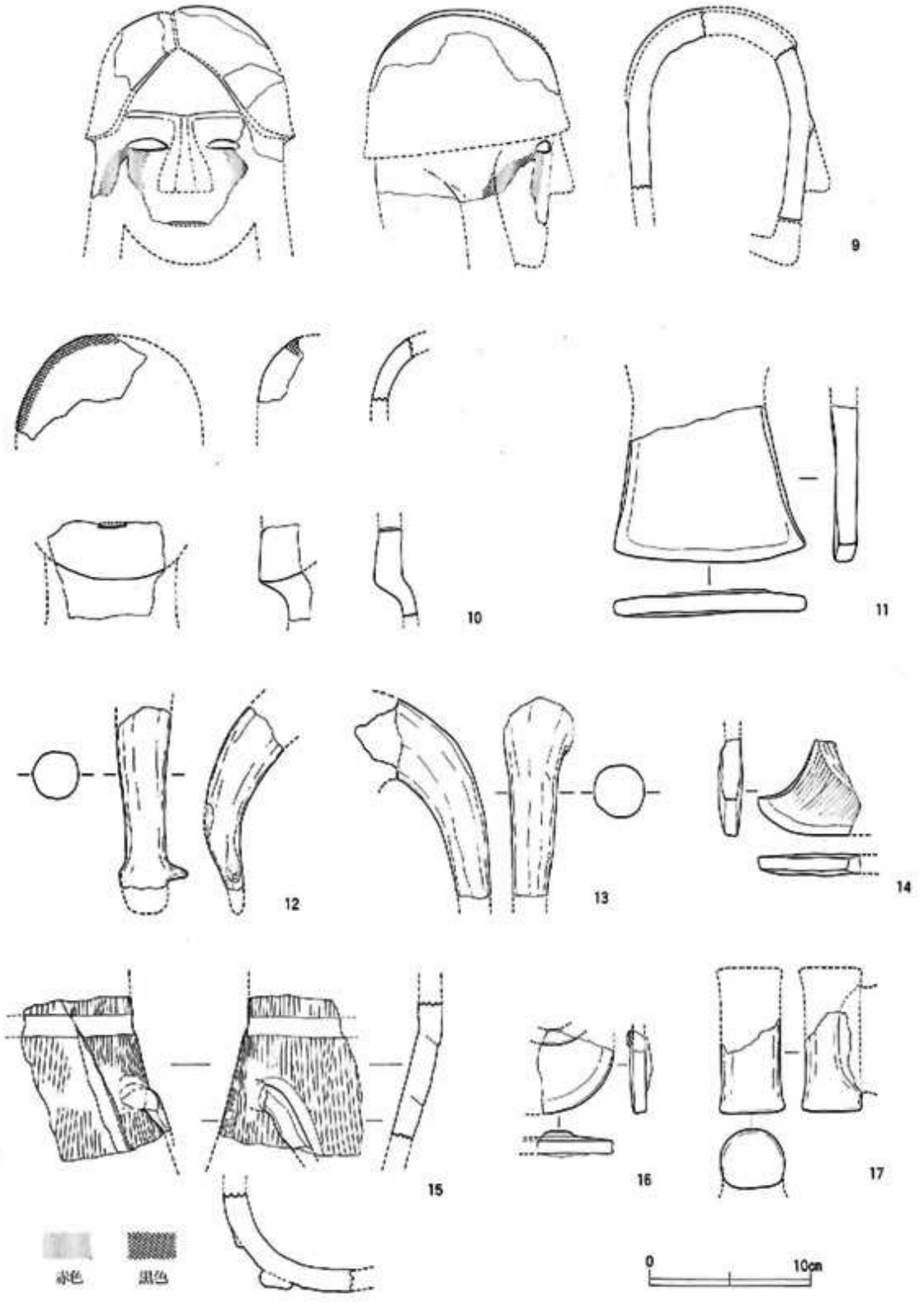
第30図　稲荷２号墳出土形象埴輪(3)

家　（第31図８）　後円部北東（T_2）の葺石端部のすぐ外側から出土したものである。壁の部分の破片であるが下端の幅は推定で31.5cmで，残存高は29.5cm。壁の厚さは1.5cm前後で，粘土紐積みで成形したものである。表面は，縦刷毛目で，内面は撫でて仕上げられている。胎土には砂粒を多く含み，橙色を呈する。なお，後円部北側の墳端部（T_1）から出土した第36図１は，堅魚木の一つとみられる。径４cmの円柱状で背面に接合痕が残るものである。

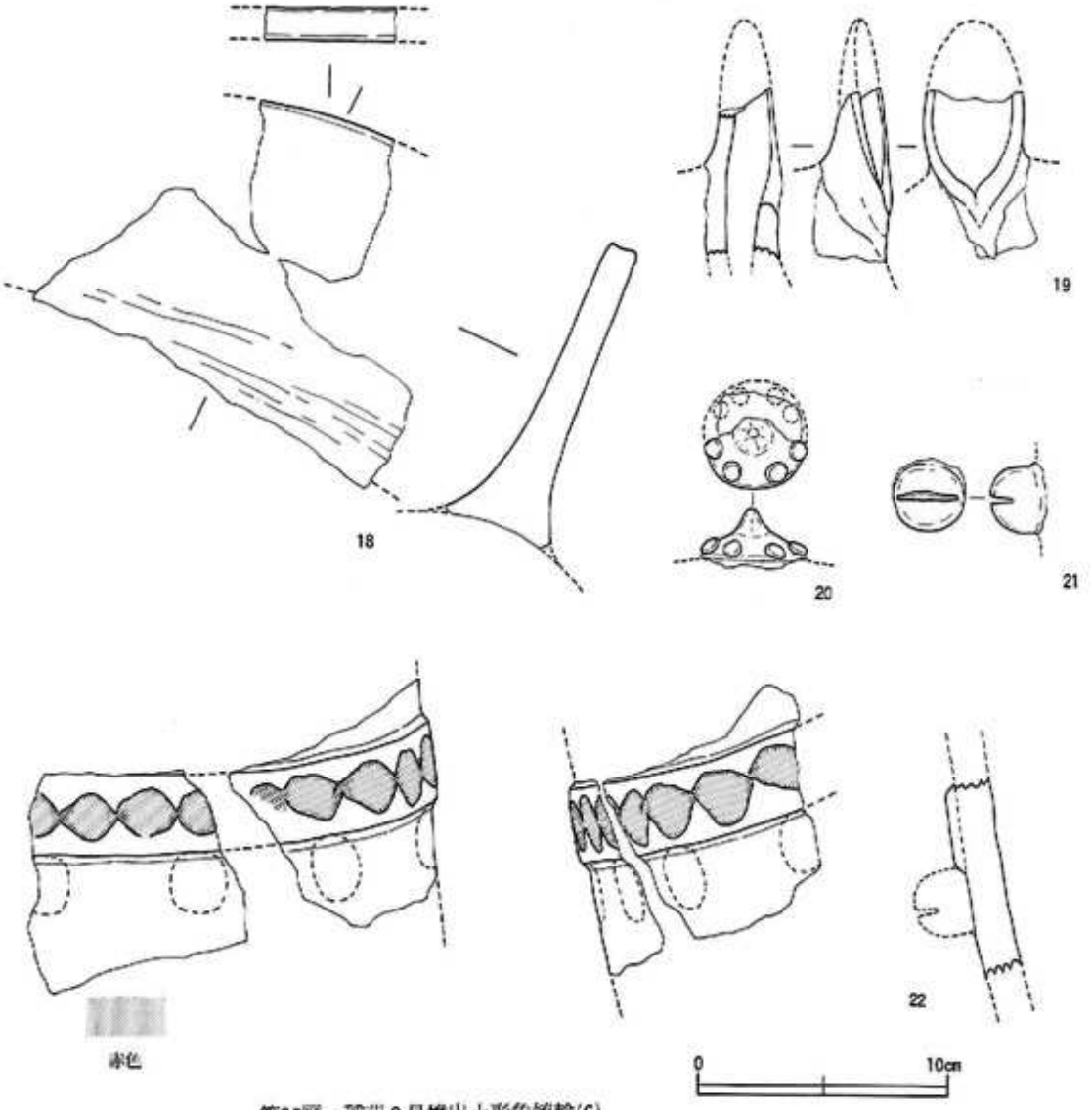


第31図　稲荷２号墳出土形象埴輪(4)

人物　（第32図９～15）　９は前方部西コーナー墳端部（T_8）から出土した，頭部の破片である。頭髪は，頭頂部に一部残る痕跡から推定して，中央部から左右に振り分け，両身に束ねて美豆良としたものとみられる。美豆良は付け根以下を欠損している。顔面は眉をつまみ出し，目を篦で木の葉状にくり抜き，口を横一文字に切ったもので，貼り付けられた鼻は欠損している。下瞼から頬を通り美豆良の付け根あたりまで赤く彩色されている。残存高は，口から頭頂部までで13.6cmである。胎土は砂粒を少量含むものであるが，焼成はやや不良で軟質である。色調は灰白色を呈する。10は前方部墳頂の西寄り（T_9）から出土した頭部と顎から首にかけての破片である。篦により一文字に切ったとみられる口が残る。胎土は砂粒を少し含み，焼成良好で，橙色を呈する。12は前方部墳頂部（T_7）から出土した右腕の破片である。残存高11.5cmで開いた親指を残し，他の４指は欠損する。13は前方部西側（T_9）の墳端部から出土した左腕の破片である。手首から先を欠損するが，肩部への接合部が残る。12，13とも丁寧な撫でで仕上げられている。14は前方部西側（T_9）の円筒埴輪列付近から出土したものであり，鬘の破片とみられる。上面に髪毛を表現したとみられる刷毛目が残る。15は前方部西側（T_9）の葺石端部付近から出土した腰部の破片である。上衣は左前で，衽が断面三角形の薄い粘土紐で表現され，腰紐は幅1.3cm程の浅い凹線となっている。腰紐の下方には上下端を欠損するが，刀子と思われるものが貼付されている。表面は全体に縦刷毛が残っている。11は後円部墳頂の東寄り（T_3）から出土した鬘の破片である。全面を撫でで仕上げ



第32図　稲荷2号墳出土形象埴輪(5)



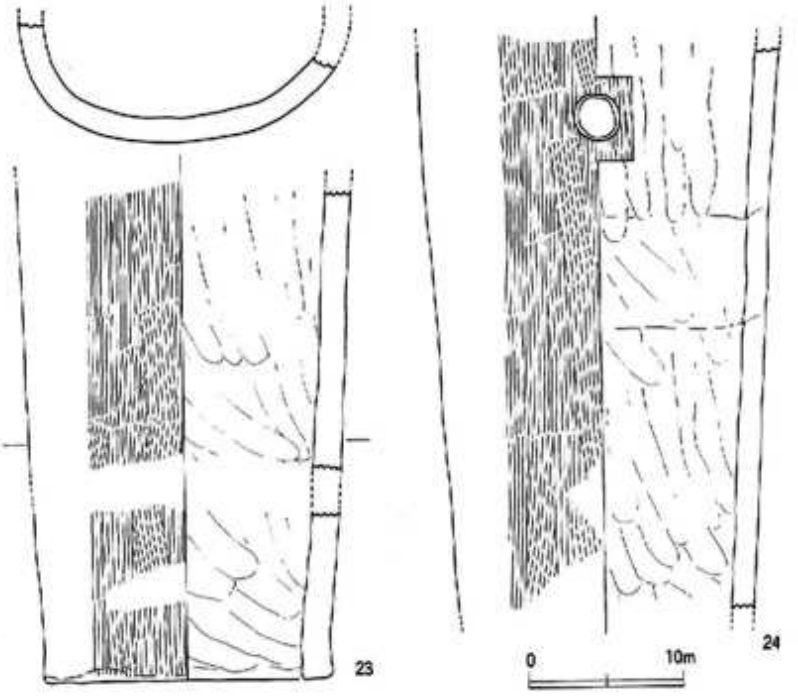
第33図　稲荷２号墳出土形象埴輪(6)

たものであり，胎土には砂粒を少量含み，橙色を呈する。なお，16は14の近くから出土したものであるが，器種は不明である。

動物（馬）　（第33図18～22）　18～22はいずれも前方部前面中央（T_1）の墳端から周溝にかけて出土した馬の破片である。総て同一個体とみられ，胎土は砂粒を少量含み，焼成良好で，明るい橙色を呈する。18はたて髪の破片で，高さは10～12cm。19は左耳で先端が欠損する。20は雲珠で，周縁に４個の鋲を表現したとみられる粘土粒が付く。径４cm，高さ２cmである。21は鈴で横に一線篦による切り込みがはいる。背面には接合痕が残る。22は胸繋の部分であり，幅は約３cmで，表面には篦により連続菱形文が描かれ，その内側が赤で彩色されている。また，胸繋の下辺には４～５cmの間隔で鈴を付け

たと思われる痕跡が残る。21は恐らく，この一つとみられるが接合はできなかった。

その他　（第34図23・24）　23は西側くびれ部（T_{10}）の葺石端部付近から出土したもので楕円形の円筒である。外面は縦刷毛，内面は指撫でで仕上げたものである。胎土は砂粒を含み，明るい橙色を呈する。24は同じく西側くびれ部（T_{10}）の円筒埴輪列付近から出土した円筒である。外面は縦刷毛，内面は指撫でで仕上げたもので，径3㎝の円形透しがあけられている。胎土は砂粒を含むが焼成良好で，橙褐色を呈する。いずれも，形象埴輪の基部と考えられる。



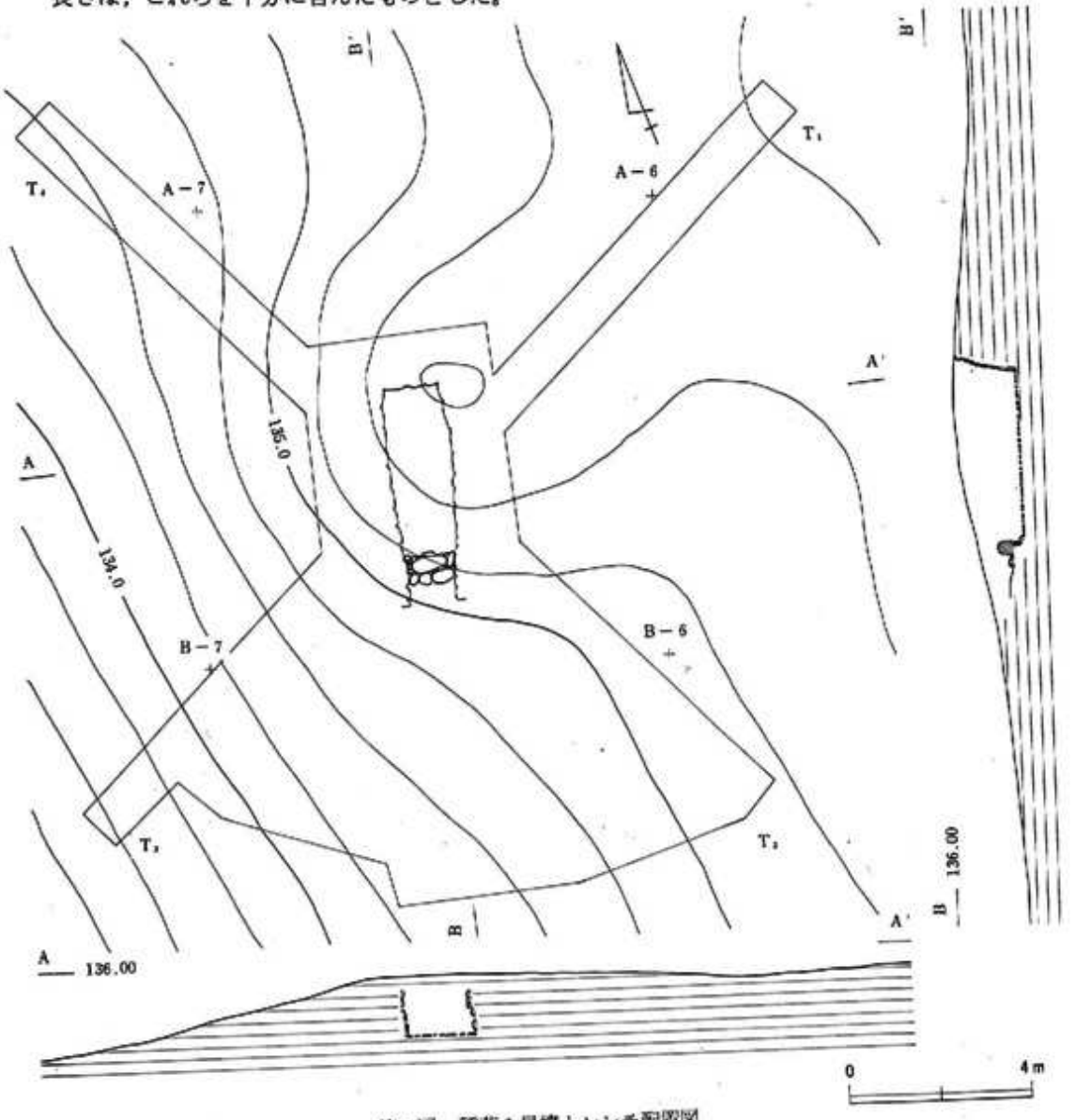
第34図　稲荷2号墳出土形象埴輪(7)

以上の形象埴輪を出土位置ごとに整理すると（第47図参照），後円部北側中央（T_1）では墳端部より堅魚木（17），葺石部中段より靫（5・6），後円部北東側（T_2）では葺石の外縁部より鞆（7）と家（8），後円部東側（T_3）では墳頂部近くより鵠（11），前方部前面中央（T_7）では墳端から周溝にかけてより馬（18～22），墳頂部近くより人物右腕（12），前方部南西コーナー（T_8）の墳端部より人物頭部（9），前方部西側（T_9）では墳頂部近くより人物頭部（10），葺石下端近くより人物腰部（15），円筒埴輪列近くより鵠（14），墳端部より人物左腕（13），西側くびれ部（T_{10}）では円筒埴輪列近くより靫（3），墳端部より盾（1），後円部西側（T_{11}）の墳端部より靫が，それぞれ出土している。なお，人物の10及び12～15は同一個体とみられ，前方部墳頂近くにあったものが転落したものと考えられる。また，家の8と堅魚木の17とを同一個体とみれば，やはり後円部墳頂近くにあったものが転落したものと考えられる。これらのことから今回検出された形象埴輪のうち，器種の判断できるものの個体数を整理すると，盾1，靫3，鞆1，家1，人物3（男子1，女子2），馬1ということになる。

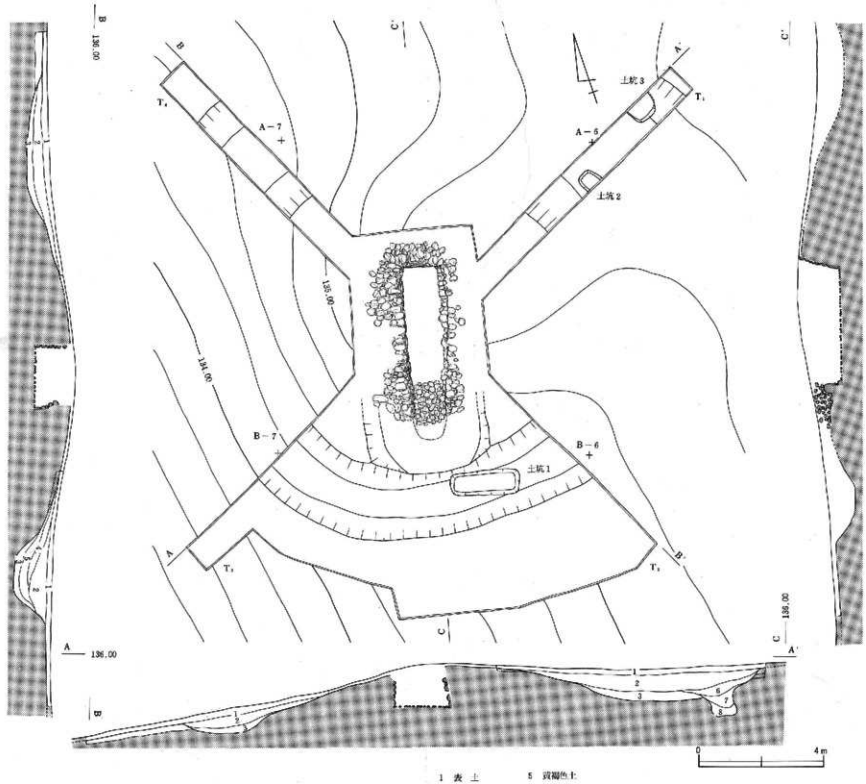
第3節　1号墳の調査

1　発掘前の墳丘

本墳は台地西側の緩やかな斜面状に占地した円墳である。現状での規模は直径約13mで，高さは1mにも満たない小さなものである。墳丘の中心部には比較的大きな自然石の一部が露出しており，主体部が横穴式石室であることが予想された。トレンチの設定に際しては横穴式石室の開口方向を斜面側西方と想定し，それに直交するような形のものとした。また，周溝は北側と東側に溝状の窪みとなって残っている様子がみられ，トレンチの長さは，これらを十分に含んだものとした。



第35図　稲荷1号墳トレンチ配置図



第36図　稲荷1号墳全体図

1　表　土
2　黒色土
3　黄褐色土
4　褐色土
5　黄褐色土
6　褐色土
7　黄褐色土（ローム・ブロックを多く含む）
8　褐色土（柔らかでローム粒を多く含む）

2　周　溝（第36図）

周溝を検出したのは，横穴式石室南の約¼と北西及び北東のトレンチにかかった部分である。各部分での周溝の幅をみると横穴式石室南では2から2.5mであるのに対し，北西トレンチ内では4.2mと広くなり，さらに北東トレンチ内では6.2mとさらに広くなっている。つまり周溝の幅は斜面の谷寄りに対して山寄りが倍以上に広くなっているということであり，これは断面図にもよく示されている。周溝の形状は，北西及び北東部で緩やかな鍋底状となっているのに対し，幅の狭い南側では底面がある程度平坦なものとなっている。周溝を含めた本墳の直径は，北西トレンチ延長上で17.05m北東トレンチ延長上で18.2mであり，整円とはならないが，墳端部間の直径は11.9m前後のほぼ整円となっている。

周溝内には3基の土坑が検出されている。横穴式石室南から検出された土坑1は，2.2×0.8mの長方形土坑で深さは20cmである。北東トレンチから検出された土坑2は，土坑1とほぼ同じ大きさのものと思われる。また，土坑3は周溝外側立ち上がりに沿って斜めに掘られたものであり，70～80cmの深さがある。この土坑3は周溝が30cm程埋没した段階で掘られたものである。

3　横穴式石室（第37・38図）

本墳の主体部はN－19.8°－Eでほぼ南に開口する横穴式石室である。墳丘の直径11.9mに対して，本石室は周溝から奥壁まで7m近くあり，墳丘の中心に奥壁があたるという形にならないものである。なお，本石室の主軸方向は，2号墳のそれにほぼ一致している。

(1)　天井石

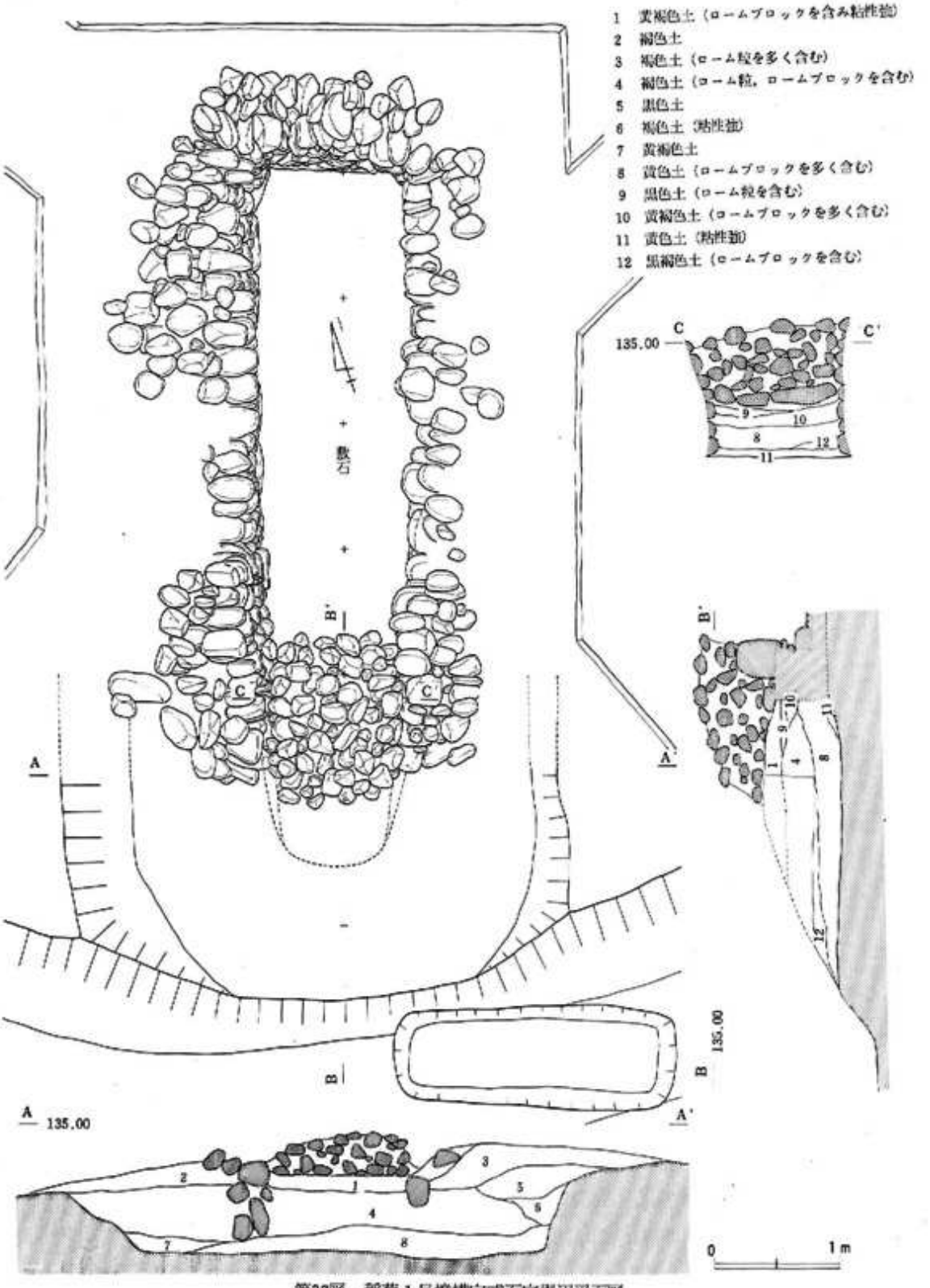
総て石室内に落下した状態で検出されたものである。（PL17参照）統文岩系の山石が使用されており，大きさは奥壁寄りに落下していたものが長さ125cm，幅48cm，玄門寄りに落下していたものが長さ98cm，幅41cmでやや小さくなっている。検出された天井石は5枚であるが，石室長からみると2～3枚分足りなくなっているようである。

(2)　閉塞石

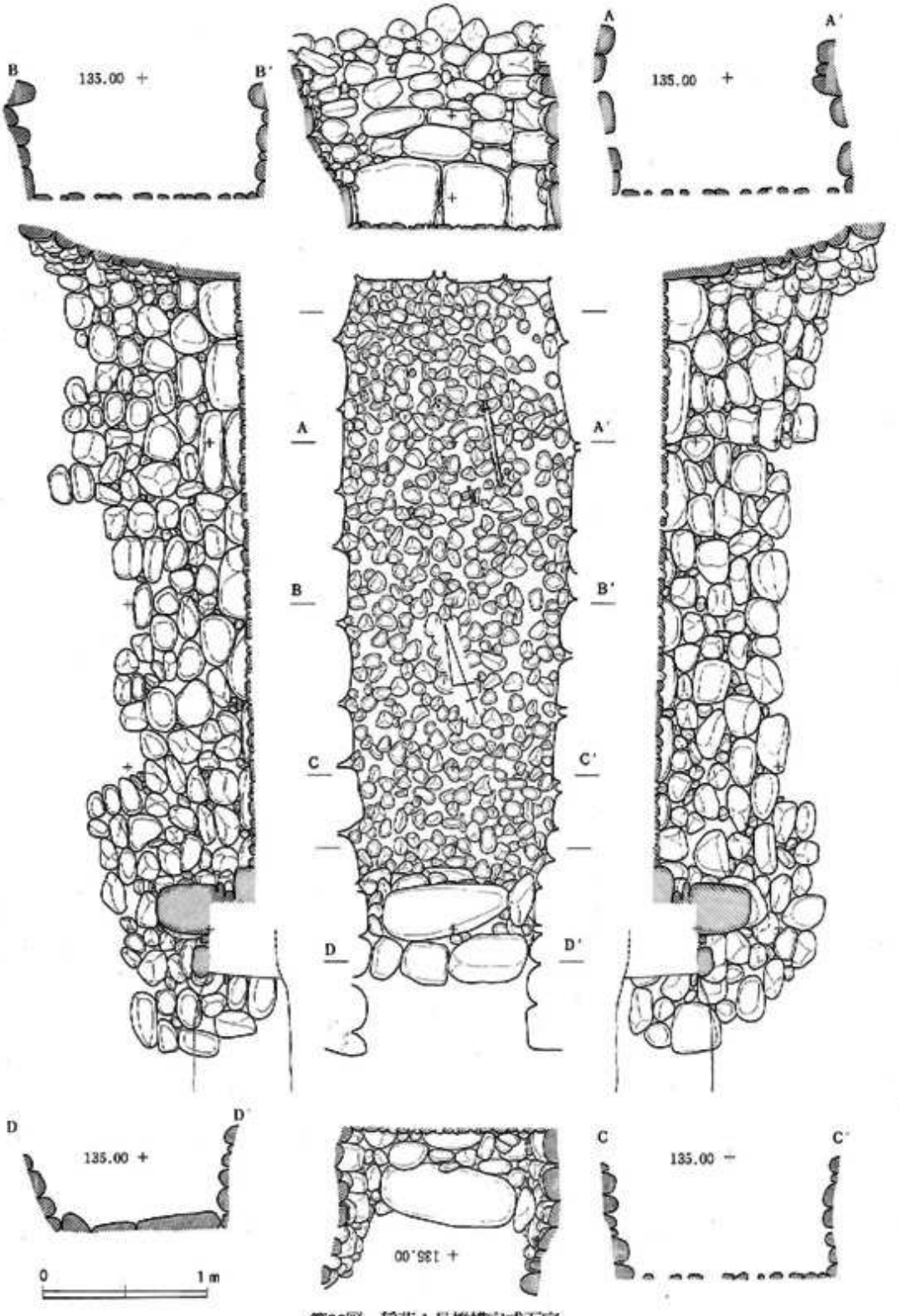
閉塞は玄門部から南に約1.3mほどの範囲にみられる。10～20cm大の河原石を多量に使用し，乱雑につめ込んだものである。閉塞の厚みは玄門すぐ南で約1.3mである。閉塞は短い羨道部全体を埋め込むような形になっている。なお，天井石は玄室部のみに検出されており，閉塞された羨道部には天井石が高架されなかったものとみられる。

(3)　玄室

平面図は僅かな胴張りを有する長方形で，規模は全長3.61m（主軸線上），幅は，奥壁部で1.18m玄門部で1.09m最大幅1.42m（奥壁より1.2m南）である。両側壁及び奥壁は上半部がかなり崩れ，さらに西側壁については西斜面側に，奥壁については北側に倒れかかっている。壁高は残りの良い奥壁付近で1.2m前後を測る。また，側壁の持ち送りは東側壁で僅かにみられるが，検出された天井石の長さから考えるとすでに崩れ落ちた上



第37図　稲荷1号墳横穴式石室周辺平面図



第38図　稲荷1号墳横穴式石室

半部はかなり強かったものと考えられる。

石材は奥壁，両側壁とも総て河原石を使用し，基本的には小口積みにしている。各壁とも最下段には大きめの石を使用しているが，特に奥壁では大形正方形に近い石を３つ使用しているまた，床面は10cm前後の扁平に近い河原石を敷きつめたものである。

(4) 玄門・羨道

羨道は長さ1.13mで，入口部の幅が0.98mである。羨道部の側壁は玄室同様河原石の小口積みであるが，この側壁は玄門近くで僅かに幅を増して玄室側壁へとつながるものであり，石室構築に際しては玄室・羨道とも一気に側壁を積んだものと考えられる。玄門は長さ82cm，幅34cmの細長い河原石を横に渡し，床面や側壁との間に小さな河原石をつめ込んだものである。玄門の施設はこの間仕切石とみられるものだけであるが，この石の高さが玄室床面より55cm前後高くなっているのが特徴である。この玄門石のすぐ南には，約20cm高さを減じて３枚の扁平な河原石が並んでおり，これが羨道部の床面となっている。羨道の床面はこの３枚の石以外に敷石のようなものはみられず，ロームブロックなどを含んだ土を埋め込んだものである。なお，この羨道床面は，玄室床面より30～35cm高くなっている。また，羨道側壁は玄門付近から南下がりの積み方となっており，羨道床面まで斜めに入り込んで行くような形になっていたものと考えられる。

(5) 掘り形

掘り形は羨道部入口から周溝にかけての調査で，その一部を確認したものである。これと石室の規模を考え合せると，掘り形の規模は南北８m前後，東西４m前後と推定される。掘り形は斜面地山を南部が開口するような形で掘ったものと思われるが，この南開口部は石室あるいは墳丘構築の段階で埋めたてられたようである。

4 出土遺物

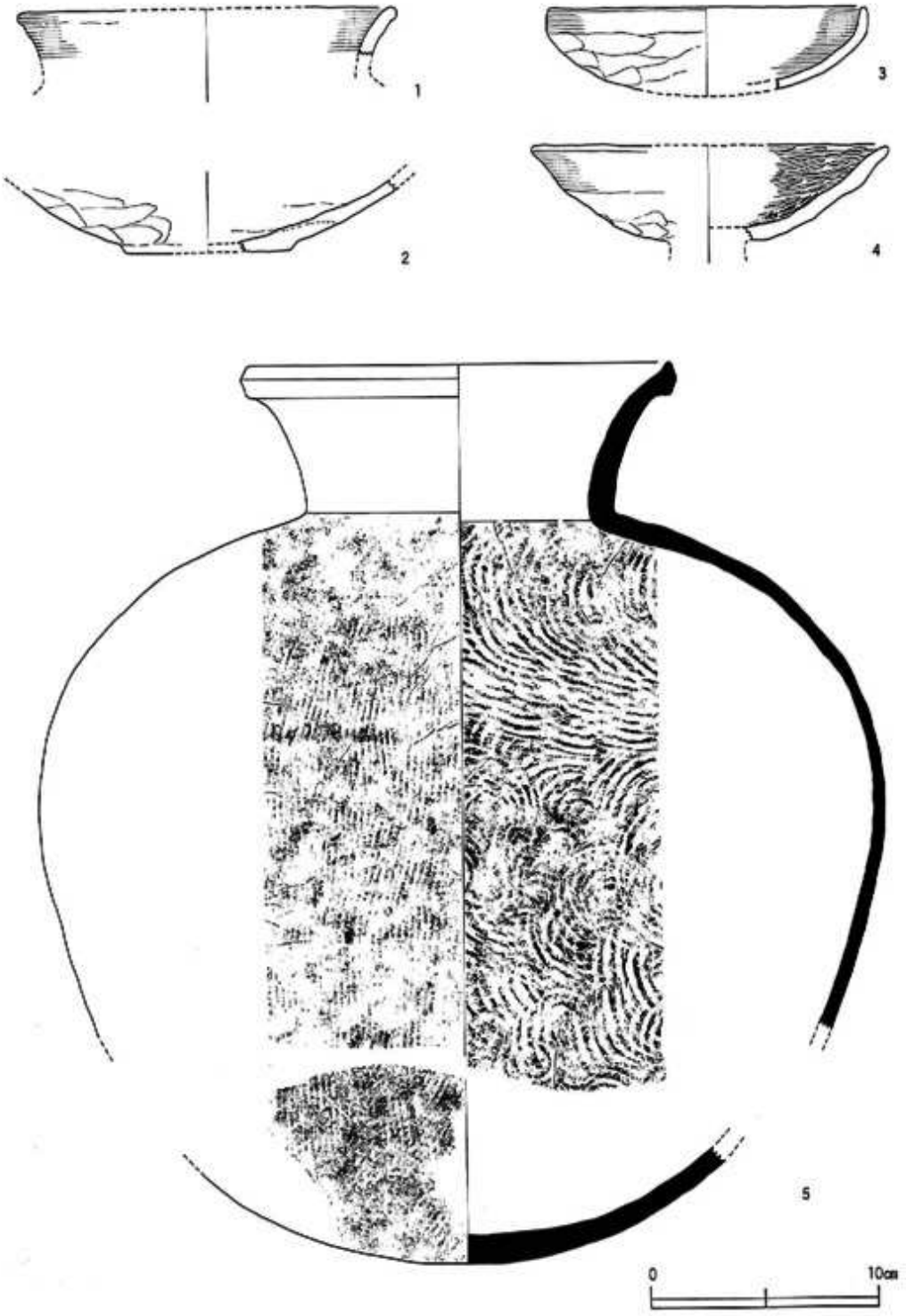
(1) 土器（第38図）

１・２は土器甕の口縁部と底部で同一個体である。他に同一個体とみられる胴部片が10数片あるが，これらは横穴式石室周辺の墳丘上に散布していたものである。

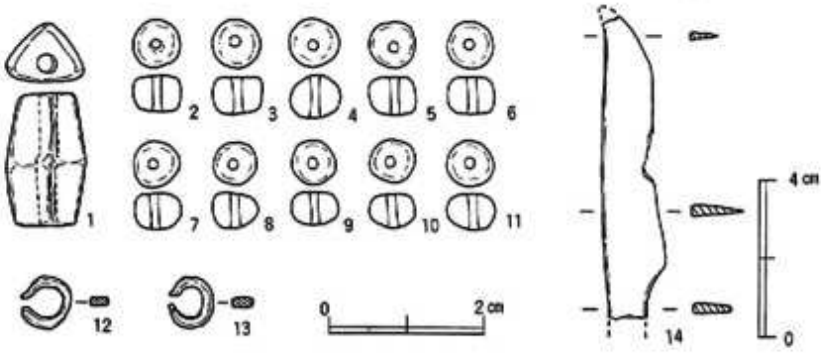
３は土師器坏で，横穴式石室南東の周溝内最下層中より出土したものである。10数片の細片で検出されたものであり，完形ではない。口径13.7cm，残存高3.6cmの半球形状の坏で，底部外面がヘラ削りされる以外は総て横撫でで仕上げられている。淡褐色で，内面は部分的に暗褐色を呈する。

４は土師器高坏と思われる破片であるが，１・２の土師器甕片に混じって出土したものである。内面はヘラ磨き，黒色処理が施されている。

５は須恵器甕で，１・２の土師器甕片同様，横穴式石室周辺の墳丘上に細片となって散布していたものである。胴部外面は平行タタキの後肩部から上位をロクロ撫でし，内面は同心円文をそのまま残している。また，口縁部外面はロクロ撫でのままで，無文で



第39図　稲荷1号墳出土土器



第40図　稲荷1号墳・穴式石室出土遺物

ある。胎土，焼成とも良く，黒灰色を呈し，肩部外面と中心に自然釉をかぶる。

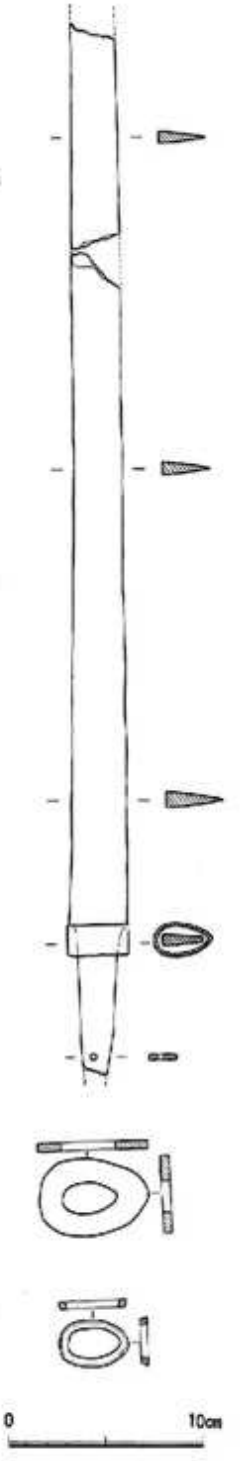
(2)　副葬品（第44・45図）

玉類　いずれも玄室内から出土したものである。1は琥珀製の棗玉で，径1.1cm，長さ1.7cm。両側から径2.5mmの穿孔がなされている。2～11は漆塗りの土玉で，大きさはほぼ均一であり，径6mm前後，長さ4.5mm前後である。孔径は1～1.5mm。いずれも漆黒色を呈する。

銅製品（12・13）　玄室内床上面から出土したものである。両者ともほぼ同形同大で，幅2.5mm，厚さ1mmの板を径6.5mm程の環状に折り曲げたものである。

刀子（14）　玄室内床面上で直刀のすぐ脇から出土したものである。残存長7.5cm。切先の一部と茎を欠損する。

直刀　玄室内床面上から出土したものである。切先と茎の先端を欠損する。残存長は53.5cm。鎺は長さ1.6cm，径1.8×2.9cmで装着したままである。鍔は径4.0×5.6cmで，透しを有さない。柄縁金具は径2.4×3.6cmで，断面平行四辺形。目釘孔は1つで，径3mm。



第41図　稲荷1号墳横穴式石室出土直刀

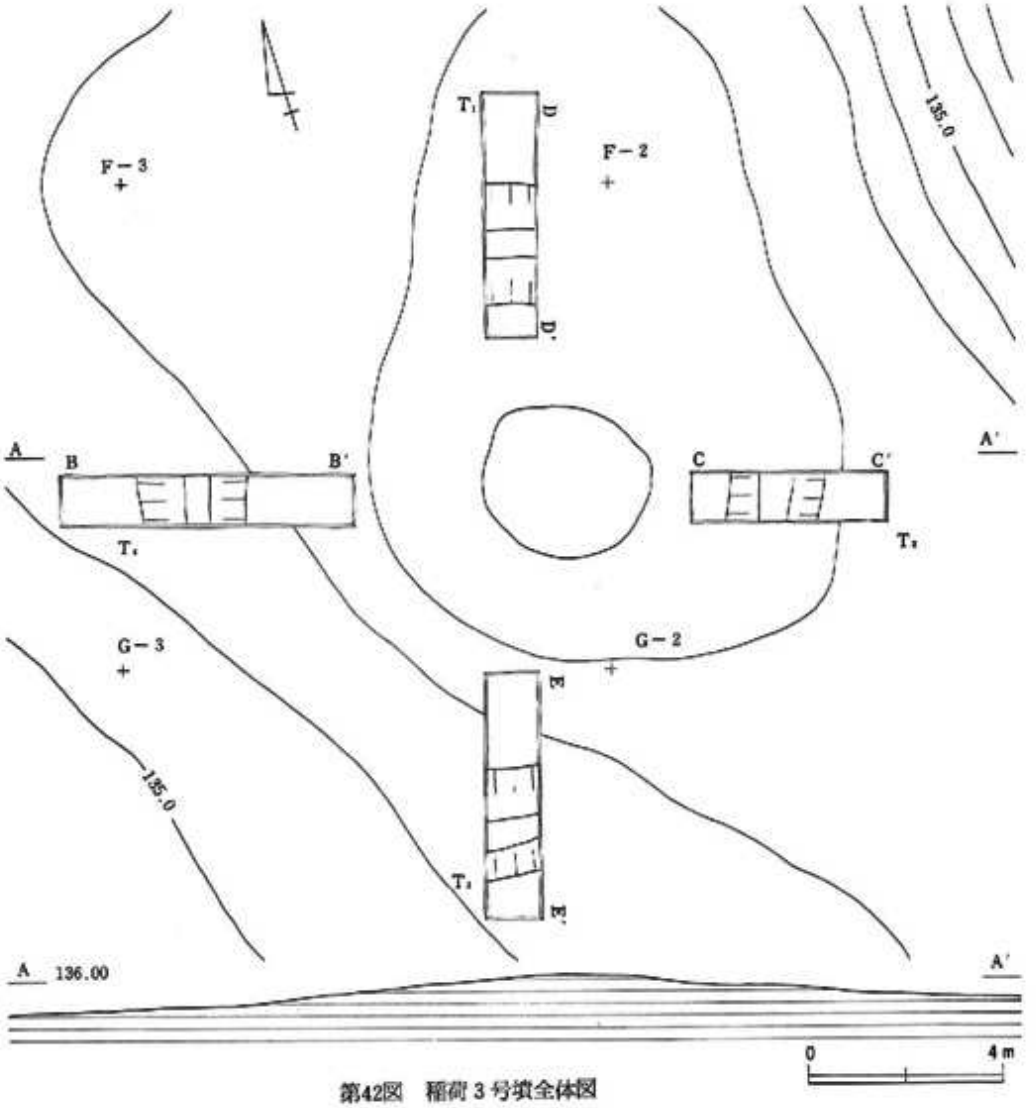
第4節　3・4号墳

1　3号墳の調査（第42図）

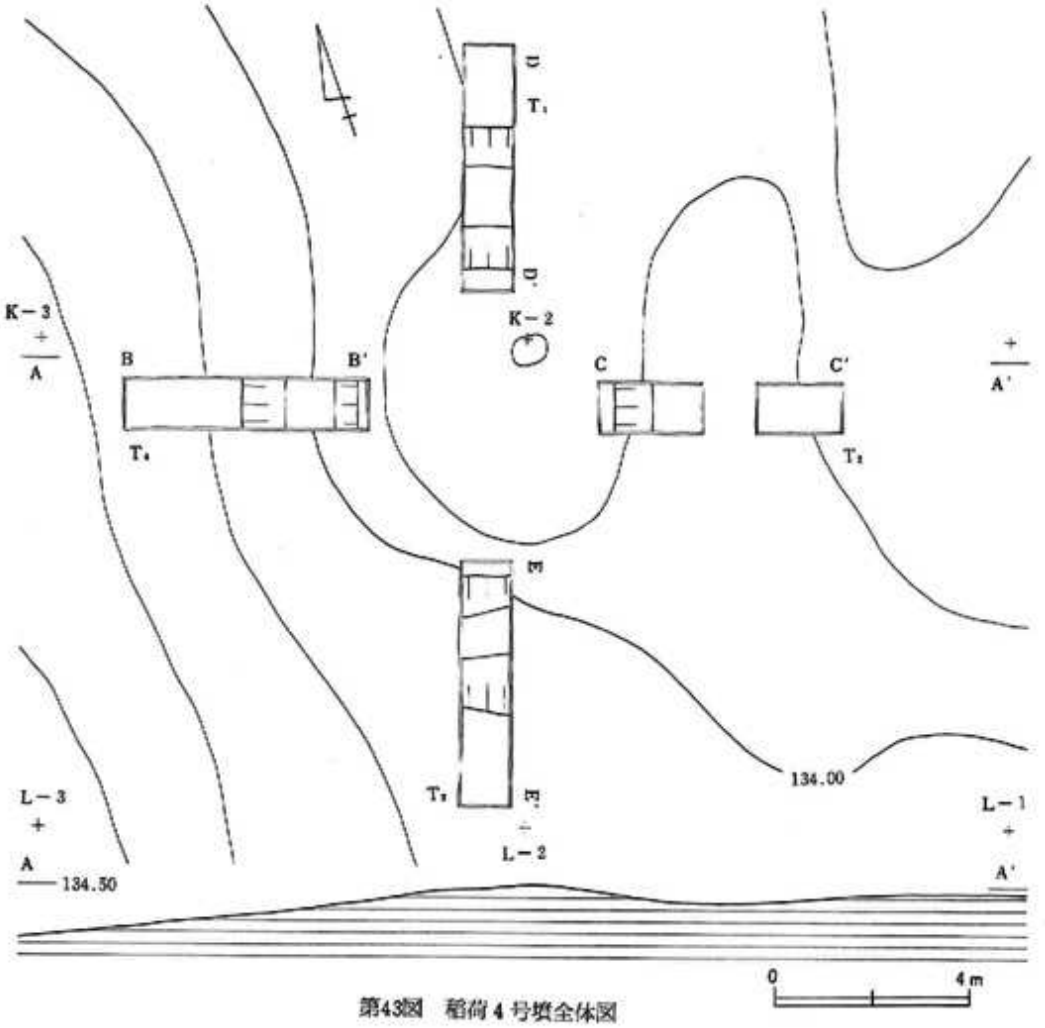
本墳は2号墳の前方部東コーナーから南へ約16mのところに位置した円墳である。台地上平坦部の東寄りに占地したものであり，東へ約10mで急斜面へと移行する。

発掘前の本墳の現況は，直径約10m，高さ0.5m程の非常に小規模なものであった。発掘調査は周溝を確認するということから，墳丘部を避けて4本のトレンチ（T_1～T_4）を十文字に設定して行ったものである。

検出された周溝の大きさは，T_1内が幅2.45m，深さ1.15m，T_2内が幅1.95m，深さ1



第42図　稲荷3号墳全体図



第43図　稲荷4号墳全体図

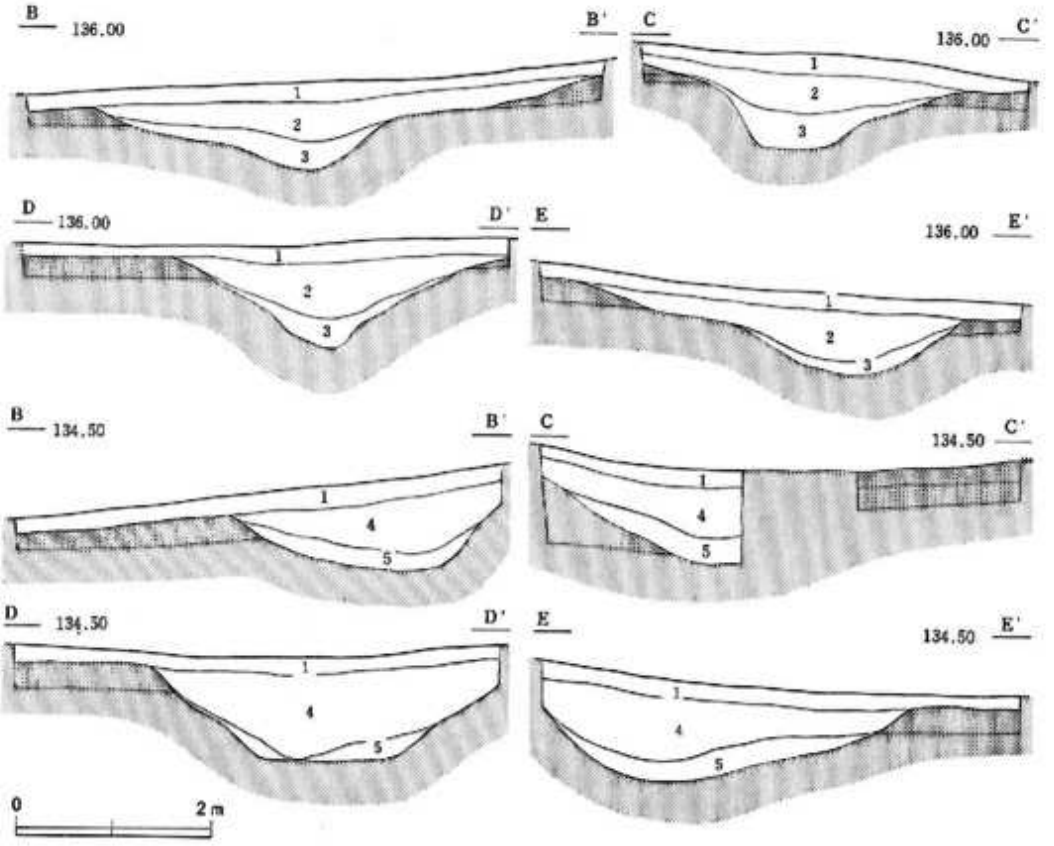
m，T_3内が幅2.3m，深さ0.85m，T_4内が幅2.2m，深さ0.9mである。調査によって得られた墳丘規模は南北10.4m，東西11.3m，周溝を含めると南北14.3m，東西14.2mである。

2　4号墳の調査（第43図）

本墳は3号墳の南方約35mに位置した円墳である。台地平坦部のやや西寄りに占地したものである。

発掘前の本墳の現況は，直径約9m，高さ0.5m程の規模で，3号墳よりもさらにひとまわり小さなものであった。発掘調査は周溝部に4基のトレンチ（T_1～T_4）を十文字に設定して行ったものである。

検出された周溝の大きさは，T_1内が幅3.9m，深さ1.1m，T_2内が幅3m以内，深さ0.95m，T_3内が幅2.8m，深さ1.05m，T_4内が幅2.4m，深さ1.1mである。調査によって得られた墳丘規模は南北7.9m，東西6.6m，周溝を含めると南北11.9m，東西10.6m以内である。



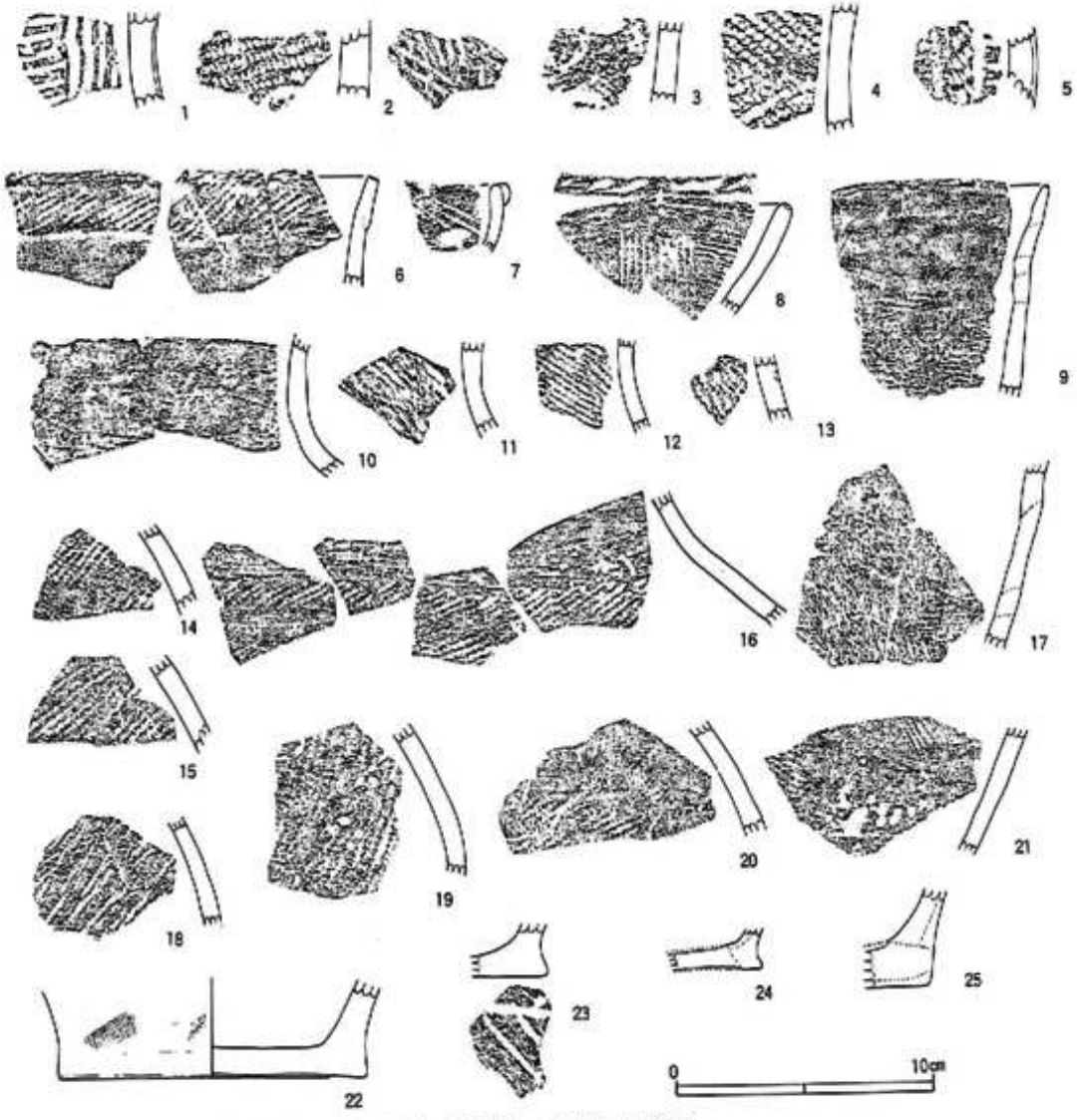
1 表 土
2 黒色土（ローム粒を含む）
3 黄褐色土（小ロームブロックを含む）
4 黒褐色土
5 黄褐色土（小ロームブロックを多く含む）

第44図 稲荷3・4号墳トレンチ断面図（上4本が3号墳，下4本が4号墳）

第5節　縄文・弥生式土器

本古墳群のトレンチ内（主に周溝覆土）からは縄文式土器，弥生式土器およそ150片が検出されている。そのうち約9割は弥生式土器と考えられるが無文のものが多く，いずれも破片で復元可能なものはない。ここでは文様をもつ代表的な例を取り上げる。

1はヘラ描きの沈線が縦横に配され，2は外面LRの縄文，内面は条痕により整形されている。3，4は繊維を含むもので4には羽状縄文が明瞭に残る。5は縦の隆帯上に縄文が施されている。以上が縄文式土器で，1，2は早期の所謂条痕文土器，3，4は前期黒浜式，5は中期加曽利E式の範囲にそれぞれ置かれるものであろう。



第45図　稲荷古墳群内出土縄文・弥生式土器拓影

6，10，14，15，16，20は胎土，色調，また出土位置が近いところから同一個体と考えられる。器形は広口壺形土器で，口縁から頸部は直立ぎみに立ち上がり折返し口縁をなす。口唇部及び口縁部外面ＬＲの縄文，頸部無文，胴上部は口縁部同様の縄文帯がみられる。焼成は良好，色調は黄褐色。７は壺形土器の口縁部で受け口状の椀形を呈し“コブ状突起”と，沈線が３本施される。８は口唇部ＬＲ原体押捺，外面は先端の鋭いヘラ状工具（おそらく一本の工具）で縦横に直線文が描かれる。外面は赤色塗彩される。９．17は同一個体であろう。口唇部に縄文（撚糸文か），口縁～頸部は４cmほどの無文部，以下Ｒの撚糸文が施文される。外面カーボンが多量に付着する。11～13は頸部の資料。ともにＲＬの縄文であるが，13はその上端がヘラ状工具で刺突される。18～21は胴部破片。このうち18には附加条縄文が用いられる。22～25は底部片で23には木葉痕がみられる。

これらの土器を県内既出資料で類例を求めると，６の折返し口縁の広口壺形，13の刺突列と縄文などは今市市上山遺跡（註１），７の形態，文様は同中小代Ａ遺跡（註２），等があげられる。また９，17の撚糸文は宇都宮市権現山北遺跡（註３）や同市宇都宮清陵高校建設地内においても良好な資料が認められ（註４），比較的時期を限定して存在するようである。以上から判断して，本遺跡の弥生式土器は概ね中期後半に位置付けられるものであろう。

（註）

註１…塙静夫ほか　1974　『上山遺跡』　今市市教育委員会

註２…藤田典夫　1982「今市市中小代Ａ遺跡出土の新資料」『栃木県考古学会誌』第７集

註３…久保哲三ほか　1979　『権現山北遺跡』　宇都宮市教育委員会

註４…海老原郁雄ほか　1984　「宇都宮地区高校（仮称）内遺跡」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』

第4章　ま　と　め

以上，今回の稲荷古墳群の調査内容について述べてきたわけであるが，最後にいくつかの問題点を整理して本報告のまとめとしたい。なお，円筒埴輪については周辺地域の資料のいくつかを併せて紹介することとする。

第1節　2号墳の墳形について

2号墳は現存する稲荷古墳群中で唯一の前方後円墳である。今回の調査では周溝及び墳丘面を確認するために入れた12本のトレンチにより，ほぼ墳形の全容を知ることができたわけであるが，ここではこの墳形の特徴点を整理してみたい。

1　周溝と盛土

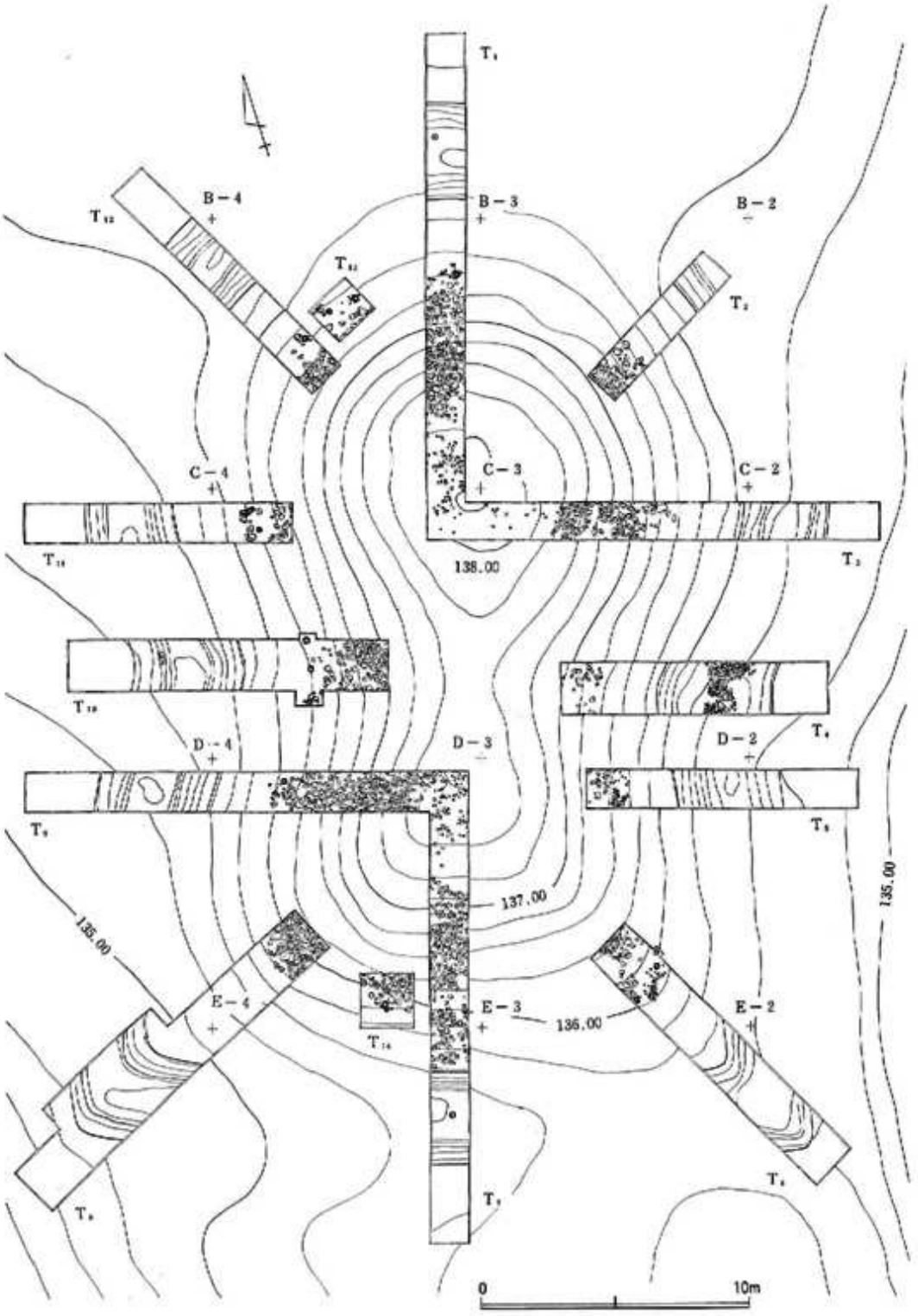
第46図は発掘終了後の全体図である。12本のトレンチ内より検出された周溝のつながり状況から明らかなように，本墳の周溝は外縁も墳形同様にくびれる形態のものである。また，盛土は部分的な調査であるが，周溝の内縁から2～2.5m内側より行なわれるのが特徴である。この周溝内縁と盛土端部（裾部）間は，地山が整形されて緩やかな斜面となっており，古墳全体からみると丁度幅の狭い基壇のような役割をしていると考えられるものである。さらに，葺石は盛土端部（裾部）から1m余り内側より行なわれ，墳丘斜面部全体を覆う形のものであるが，前方・後円部とも墳頂には行なわれないのが特徴である。なお，葺石端部（裾部）のすぐ外側，すなわち盛土端部（裾部）近くに円筒埴輪列が巡るという形になっている。

2　墳形の復元と規模

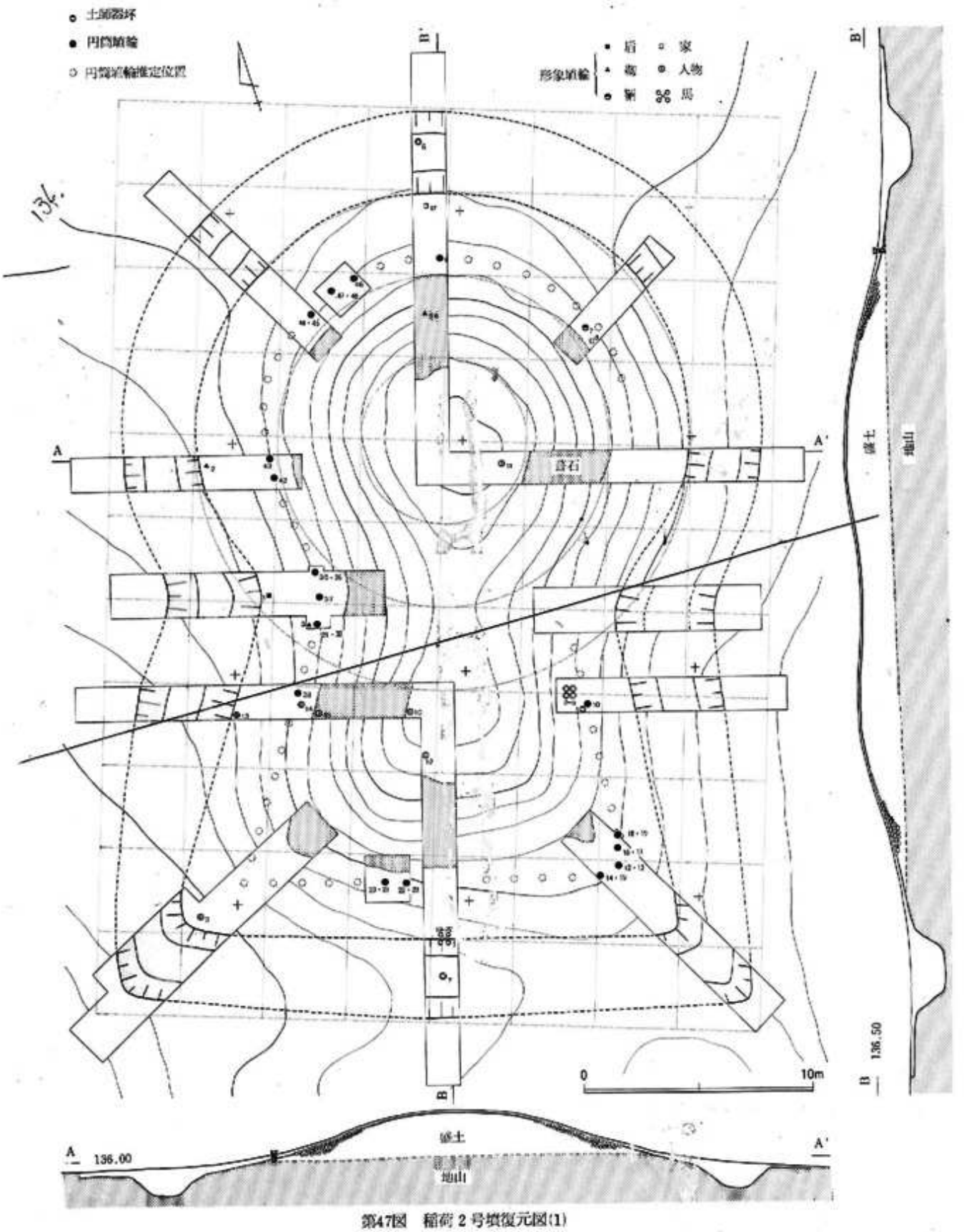
前述した周溝から盛土にかけての状況から，本墳の場合墳丘規模をどこで認定するかが問題となるが，ここでは調査により最も明確な線として現われた周溝内縁，すなわち周溝内側立ち上がりの上端を墳丘規模の外郭線として取り上げたい。

第47図は各トレンチの調査成果から復元した本墳の墳形である。これでみると墳形はトレンチ方向に対してやや東に傾いているが，これは発掘前に想定した中軸線にトレンチ方向を合わせて設定したためである。実際の中軸線は，検出されたくびれ部両側の中間点と前方部前端両コーナーの中間点を通る線（A－E）であり，N－19.5°－Eに方位をとるものである。

規模は，全長（A－E）が39.35m，墳丘長（B－D）が32.45m，後円部径が21.30m，前方部幅（R－R′）が21.55m，くびれ部幅が19.75mである。この中で後円部径の21.30mはT_3とT_{11}のラインで計測したものであるが，これは後円部の中心を僅かにはずれたラインであることから，実際の後円部径はやや大きくなり，ほぼ前方部幅と同じにな



第46図　稲荷２号墳全体図

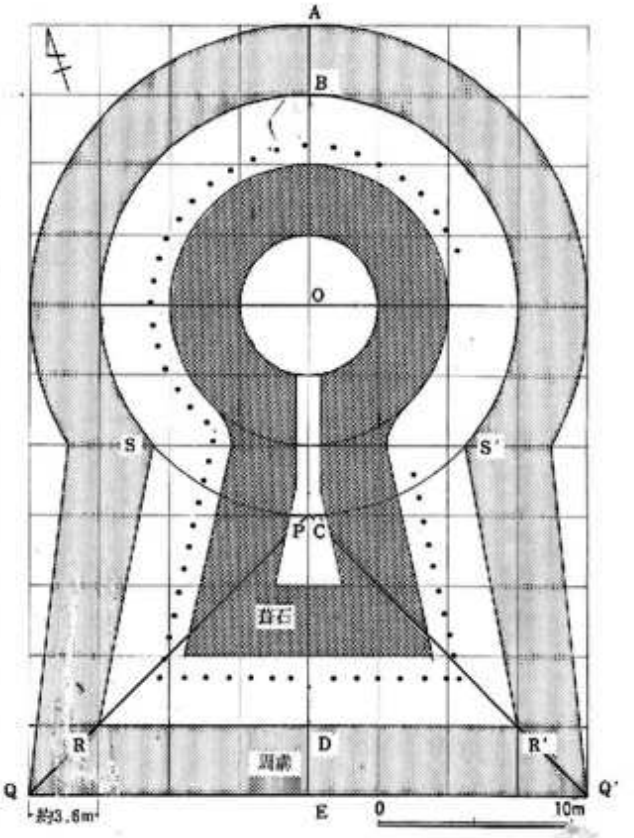


第47図　稲荷2号墳復元図(1)

るものとみられる。

3　平面企画の推定

さて，復元された墳丘形の企画を考えるために，いくつかの基準長をあてはめてみると，墳丘長を9等分したものがよくあてはまることがわかる。第47図の方眼はこの墳丘長の9分の1の長さで組んだものであるが，これによると墳丘長の9に対して後円部径及び前方部幅が6と整数倍になり，さらに部分的にではあるが周溝幅，周溝内線から葺石端部（裾部）までの距離，葺石部の水平距離，後円部墳頂平坦部の半径がそれぞれ1に近くなっていることがわかる。



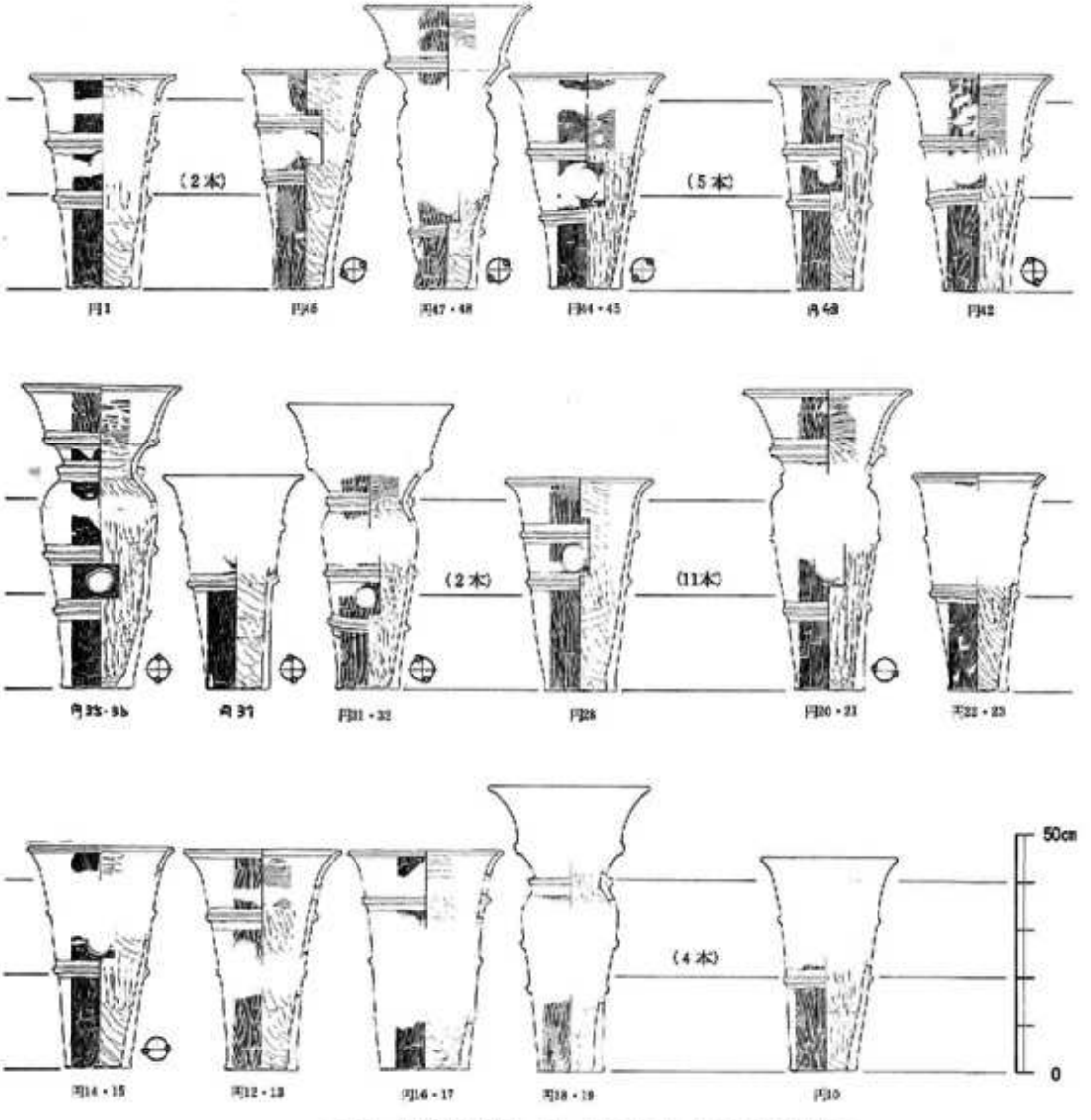
第48図　稲荷2号墳復元図(2)

以上のことから本墳築造に際しての設計について推定復元したのが第48図である。まず墳丘については，後円部を基準長の3倍を半径とする円とし，前方部を長さが後円部の半径分に幅が後円部径分に合せたものと考えられる。また，くびれ部は後円部の中心Oから基準長2つ分前方部寄りの点で中軸線に直交する線を描き，これと後円部線とが交わる点（S－S′）に決定したものと思われる。このようにして描かれた墳丘形を基本として，基準長1つ分外側に周溝の外縁線が，また基準長1つ分内側に葺石の端部（裾部）線がそれぞれ決定され，さらに葺石部の水平幅，墳頂平端部の広さなども，この基準長に合せたものと考えられる。

ところで，前方部周溝のコーナー内外線（R・Q）を結ぶ線が中軸線と交わる点をPとすると丁度後円部径が中軸線に交わる点Cに一致する。これは前方後円墳の企画について最初に指摘された上田宏範氏の型式分類[3]によると，BC：CP：PDが6：0：3となるE型式にあてはまるものであり，これについては，横穴式石室採用後で墳形の小型化が行なわれる時期にみられるものであると考察されている。また，本墳の基準長になっているとみられる墳丘長の9分の1は約3.6m（32.45m÷9≒3.606m）であるが，これもやはり上田氏が前方後円墳の企画に使用されたと考えられている高麗尺に換算すれば，ほぼ10尺になるものである。仮に，これで本墳の規模を示せば，全長110尺，墳丘長90尺，後円部径と前方部幅が60尺の古墳ということになる。なお，1号墳横穴式石室の玄室長が3.61mであり，本墳の基準長と考えたものにほぼ一致しているのは興味深い事実と言える。

第2節　2号墳の円筒埴輪列について

今回の調査では破片資料も含めて36個体分の円筒埴輪を検出したが，この内樹立位置が確かめられたのは17本である。ここでは，これら17本の資料から樹立位置や樹立状態についての特徴を整理することとしたい。



(上段　後円部北西部，中段　西側くびれ部から前方部中央，
下段　前方部東コーナーから東側部)

※(　　)内の数はその間の推定本数。なお，埴輪間の間隔は不正確。
また，円筒埴輪右下の図は測量軸線に対しての透孔の方向を示したもの。

第49図　稲荷2号墳円筒埴輪列復元図

1　樹立位置と樹立間隔

樹立位置は葺石端部（裾部）から周溝に至る緩斜面上で，周溝内縁より2.5m前後内側の葺石端部（裾部）寄りである。この位置は丁度盛土の裾部にあたる所であり，この盛土層を15～20cm掘り窪めて樹立したものである。

このように樹立された円筒埴輪はほぼ墳形と同様な形状で巡っているわけであるが，くびれ部東側から後円部東側にかけて及び前方部前面中央部では列が途絶えている。前者に関しては横穴式石室への，また後者に関しては前方部へのそれぞれ入口部ということが，恐らく影響しているものと考えられる。

各円筒埴輪間の樹立間隔についてはトレンチ調査のため断片的にしか確認されていないが，ほぼ同様な間隔を有して樹立されている。間隔の確認できたものを基底部の中心間の距離で示すと，円18・19―円16・17間が49cm，円16・17―円12・13間が74cm，円12・13―14・15間が85cm，円22・23―円20・21間が95cm，円31・32―円37間が118cm，円37―円35・36間が106cm，円42―円43間が93cm，円44・45―円47・48間が136cm，円47・48―円46間が110cmとなる。円18・19，円16・17，円12・13，円14・15の４本は前方部東コーナーの一部に他よりやや込み入った状況で樹立したものである。そこで，この４本を除いた他の６つの間隔95cm，118cm，106cm，93cm，136cm，110cmの平均をとると約109cmになる。従って，樹立間隔にある基準の長さがあったものとみれば，それは109cm前後と考えられるわけであるが，これが本墳の平面企画に使用されたと考えられる高麗尺のほぼ３尺にあたることは興味深い。

2　朝顔形埴輪の割合と透孔の方向

今回検出した36個体の円筒埴輪中，朝顔形のものは10個体であり，全体の28％となっている。もちろん部分的なトレンチ調査での検出数ではあるが，トレンチはほぼ等間隔で墳丘全体に入れたものであることから，この28％という割合は本来の状況に近いものと思われる。従って円筒埴輪列中３～４本に１本が朝顔形になると考えられるわけであるが，中にはくびれ部西側でみられるように普通円筒埴輪（円37）を挟んで両側に朝顔形埴輪（円31・32と円35・36）が並ぶという状況もみられ（第49図参照），朝顔形のものの配置については列全体を明らかにしないと不明な点が多いようである。

また，透孔については９個体で方向を確認することができたわけであるが（第49図参照），全体の傾向としては墳丘に対して平行するように，すなわち円筒埴輪列線方向に向けて樹立されていると言える。ただし，第49図でも明らかなように，普通円筒に対して朝顔形のものは透孔の位置が低く，また両者の樹立の深さもさほど異ならないことから，透孔が円筒埴輪列線上を通るという状況とは言い難い。

第3節　2号墳の円筒埴輪について

ここでは，2号墳出土の円筒埴輪について，器形及び製作の特徴をまとめることとする。

1　器　形

全体の形状はほぼ一致しており，基底部から開き気味に立ち上がり口縁部でさらに大きく外反する「ラッパ状」を呈するものである。この傾向は朝顔形の円筒部についても同様であり，やはり基底部からくびれ部までは開き気味に立ち上がっている。

高さについては完形品が少ないため正確なところは不明であるが，復元資料等も含めてみる限り，いずれも45cm前後である。このように高さについては一定していると言ってもよいようであるが，太さには太形・細形の2種がみられる。朝顔形のものについては，さらに完形品が一点もないということで高さに関しては，普通円筒より一段高いということ以外不明であるが，太さにはやはり太形・細形の2種がみられる。

突帯は朝顔形の円筒部も含めて総て2条巡らすものである。断面は台形またはM字形を呈し，8～10mmの高さを有するのが一般的であるが，朝顔形のものについては総じて大きめであると言える。突帯の貼付位置については個体により若干の差がみられるが，第一突帯の位置に注目すると普通円筒が20cm前後であるのに対し，朝顔形のものは12～16cmである。すなわち，基底部については普通円筒に対して朝顔形のものが短くなるという区別がみられる。

なお，透孔は総て円形であり，普通・朝顔とも第一突帯と第二突帯の間（胴部）に対向して2個穿たれている。また，透孔位置は当然朝顔形のものが一段低くなっている。

2　成形と調整

成形は粘土板を筒状にまるめたものを基部として，それより上を口縁部まで粘土紐積みしたものとみられる。この成形段階の基部の高さは10～15cmであり，器厚も他の部分より7～10mmぐらい厚くなっている。また，一部の円筒埴輪の外面には，この基部成形の痕跡がそのまま残っている。（ＰＬ27参照）なお，朝顔形のものも円筒部はこれらと同様な成形であるが，朝顔部の頸部・口縁部については段階的に接合して成形したものである。

調整については内面と外面で異なる。まず外面は普通，朝顔とも総て縦刷毛の一次調整のみで仕上げられている。この刷毛目は個体により異なり，幅2cmでの平均本数で比較すると7～8本の粗いものから11～12本の細かいものと何種類かがみられる。（ＰＬ27参照）これに対して内面は明瞭に2種の調整法がみられる。一つは基底部から口縁部まで総て指撫でするものであり，もう一つは基底部までを指撫でし，口縁部のみに横刷毛をつけるものである。なお，朝顔形のものは総て後者の調整法となっている。

3　器形と調整の関係

前述した器形と調整の関係をみるためにまとめたのが表7である。器形面での制約があるため残存状態の比較的良い20本についてまとめたものである。

普通と朝顔形の違い，器形における太形と細形の違いが，基底部高・調整法及び刷毛目とどう係わっているかをみたわけであるが，次のようなことを指摘することができる。

(1)　普通円筒形埴輪の基底部高は器形の太，細に係わらず一般に高い。

(2)　普通円筒埴輪における内面調整は器形の太・細に係わらず2種みられるが，傾向としては太形のものに口縁横刷毛が多いと考えられる。

(3)　朝顔形埴輪の基底部高は全体に普通円筒埴輪より低く，さらに器形の太，細によっても高さに差がみられる。

番号	器種	器形	基底部高	内面調整	刷毛目/2cm
1	円筒	太形	18.6	総て指頭で	11本
5	〃	〃	21.9	〃	10本
15·17	〃	〃	——	〃	11～12本
28	〃	〃	22.9	〃	7本
7	〃	〃	21.1	口縁部横刷毛	10～11本
10	〃	〃	19.1	〃	7～8本
42	〃	〃	19.4	〃	7～8本
44·45	〃	〃	15.1	〃	11～12本
4	〃	細形	19.5	総て指頭で	8本
6	〃	〃	——	〃	7～8本
14·15	〃	〃	20.3	〃	10～11本
22·23	〃	〃	20.1	〃	10本
43	〃	〃	18.2	〃	7～8本
46	〃	〃	23.1	〃	7～8本
12·13	〃	〃	——	口縁部横刷毛	7本
37	〃	〃	22.3	——	11～12本
20·21	朝顔形	太形	16.6	口縁部横刷毛	7～8本 10～11本
35·36	〃	〃	16.5	〃	7本 10～11本
31·32	〃	細形	13.7	〃	7～8本
47·48	〃	〃	12.9	〃	7～8本

表7　2号墳出土円筒埴輪の器形と調整

(4)　朝顔形埴輪における内面調整は器形の差異に係わらず総て口縁横刷毛である。

(5)　普通，朝顔とも刷毛目には，器形及び調整の差異と相関するような使い分けをみることはできない。

さて，以上のようなことから本墳出土円筒埴輪の製作について一つの推定をすると，普通円筒担当と朝顔形担当の二手に製作者が分かれていたと考えられる。これは，両器種における基底部高と内面調整の差異を一つの要因と考えるものであるが，普通円筒における内面調整に2種の存在していることが大きな決め手となっている。つまり，普通円筒における内面口縁部横刷毛目調整は全体の約3割と少ないわけであるが，これを数少ない朝顔形の製作終了後に同じ製作者が分担したものと考えるわけである。なお，この推定を裏付けるものとして円44・45は好資料である。これは口縁部内面に横刷毛調整のみられる普通円筒であるが，他の普通円筒に比較して基底部高が低く，太形の朝顔形のものと同じ高さになっている。恐らく朝顔形を作ろうとしたものと考えられるが，必要数に達していたために普通の円筒として完成させたものと考えられるわけである。

ところで表8は，本古墳出土円筒埴輪の器形的な大きな特徴である基底部から口縁部に

かけこの開きをグラフに示したものである。宇都宮市塚山西古墳[⑩]，同南古墳[⑨]，射撃塚内古墳[⑧]，小山市摩利支天塚古墳[⑦]，琵琶塚古墳[⑥]の出土円筒埴輪を比較資料として使用したわけであるが，このグラフからも明らかなように，本古墳出土円筒埴輪は口径が底径のほぼ2倍になるというものであり，他の比較資料とは明確な差異を示している。

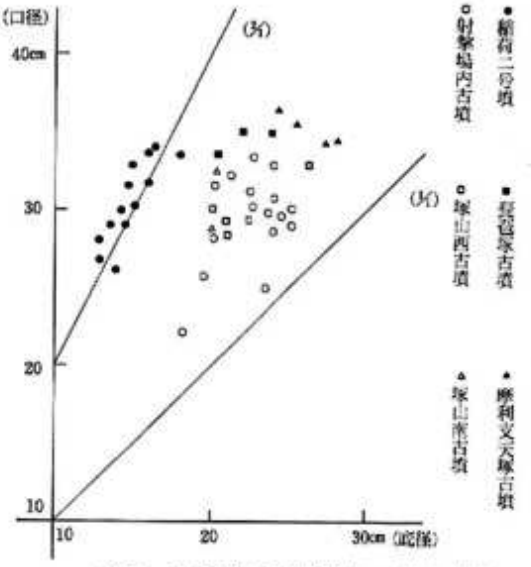


表8　各古墳出土円筒埴輪の口径と底径

第4節　周辺地域出土の円筒埴輪について

1　はじめに

前節では2号墳出土の円筒埴輪について，その器形及び製作技法面での特徴を整理してきたが，ここではそれらの位置付けを考えるために周辺地域の円筒埴輪について触れておくことにしたい。

なお，第1章でも触れたように本古墳群周辺には円筒埴輪を出土する古墳がかなりみられる（第3図及び表1・2参照）。そこで，ここでは特に本古墳群との関係を考えるということから，地域を姿川及び黒川の上流域に限定し，それらの中でも比較的資料のまとまっている鹿沼市狼塚古墳（第3図31），同市下台原古墳（第3図56），同市判官塚古墳（第3図64），宇都宮市亀塚古墳（第3図57）の4古墳について，それぞれの出土円筒埴輪の特徴をまとめることとしたい。

2　各古墳出土の円筒埴輪について

狼塚古墳（第50図）

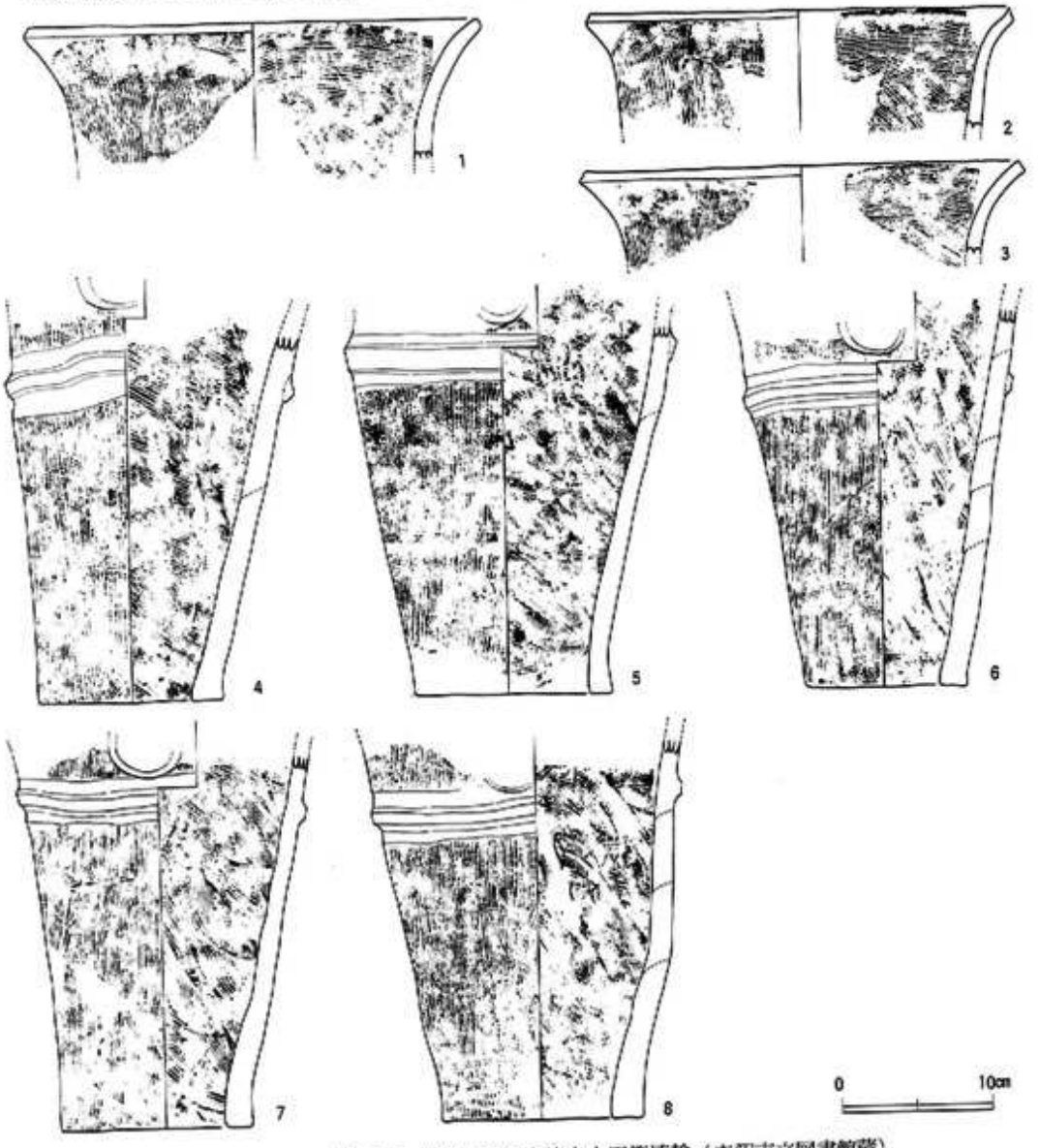
狼塚古墳は鹿沼市茂呂西茂呂の地にかつて存在した前方後円墳で，前方部を南西に向けるものであった。立地は鹿沼市街を南流する黒川の東段丘上である。周辺にはかつて多数の小円墳が存在し，西茂呂古墳群を形成していたが，現在ではすべて消滅してしまった。

本墳は昭和40年，41年の二度にわたって発掘調査が行われたが[⑪]，それによると，全長27.3m，後円部径14.8m，前方部幅19.7mの計測値が得られている。内部主体は後円部に存在した無袖型の横穴式石室である。奥壁には二枚の巨石が用いられ，側壁は河原石を小口

積みにしたものであった。石室内の遺物としては，玉類・馬具・鉄鏃・刀子・直刀が，また外部施設としては葺石・埴輪が検出されているが，埴輪には円筒埴輪以外に靫・太刀・馬・人物などの形象埴輪もみられる。

本稿で紹介する円筒埴輪は現在，鹿沼市立図書館に保存されており，今回，同図書館と鹿沼市教育委員会の御好意によって実見・実測させて頂いた。ここでは円筒埴輪の特徴を器形，口縁部，基底部，突帯，透孔，胎土，色調，焼成といった点から見ていきたい。

まず，器形についてみると，全体の復元できた個体がなかったため確証はないが，おそらく稲荷２号墳の円筒埴輪と同様に二条の突帯が巡るものと思われる。復元による口径は30cm前後，基底面から第１突帯までの高さは約20cmと稲荷２号墳のそれとほぼ類似する。



第50図　鹿沼市狼塚古墳出土円筒埴輪（鹿沼市立図書館蔵）

ただ，底径については狼塚古墳のものの方が若干，小さいようである。

口縁部は形態的にみて，口縁部に近づくにつれて緩やかに外反する１・３のようなタイプと胴部から直立気味に立ち上がってきて，口縁部付近で急に外反する２のようなタイプがある。口唇端部の形態は，１が丸みを帯びるのに対し，２・３ではM字形を呈する。なお２の口唇部内面は若干のくぼみを持つ。外面調整は１次調整のみの縦刷毛目，内面調整が口縁部付近が横刷毛目で，それ以上では，ななめの刷毛目調整を行っている。ちなみに，稲荷２号墳における円筒埴輪の口縁部内面調整には横刷毛目による調整と指なでによる調整のものとの二種類がある。

次に基底部は底径が10.8cm～13.3cmと非常に小さいものである。基部には繊維状の圧痕があり，４・６・７については粘土板で基部を製作した際に生じる接合痕も観察された。外面調整は一次調整の縦刷毛目に限られる。内面調整はななめの刷毛目調整である。

突帯で今回，実見できたものは第１突帯に限られた。基底面からの高さは各個体ともに約20cm～22cmの間で一定している。断面の観察できた個体については，すべて貼り付けによるものであった。形状は台形を基本とするが，下端が上端にくらべて低いために，あたかも三角形のようにみえるタイプ（４・５）もある。突出度はいずれも小さい。

透孔は第１突帯の直上に位置し，対向する位置に円形のものが二孔穿たれる。復元径は残存部分が小さいために明確ではないが，およそ５cm前後である。

胎土は全般に砂質であり，５～10mmの比較的粗い砂粒を特徴的に含むものである。

色調は赤褐色，および橙色を呈する。

焼成には脆弱気味なものから良好なものまで，ばらつきがあり，５では内外面ともに，基底面から５～８cmの範囲で焼成むらが観察される。

下台原古墳（第51図，第52図１～５）

下台原古墳は鹿沼市深津字下台原に所在する。姿川から西方に約1.0kmの段丘上に位置し，現在は雑木林に囲まれている。周囲の山林中には，多数の小円墳が存在し，古墳群として残存状態の良好なものである。本墳はこれまであまり注目されてなかったが，山ノ井清人先生の御教示によって，その存在が明らかになった。（航空写真参照）墳丘は基壇状のテラスを有する前方後円墳で，ほぼ西面する。周溝の残存状態は極めて良好である。

なお，『栃木県史跡名勝天然記念物調査報告』第三輯姿川村亀塚古墳の項の中に「姿川の西八町に朱雀天皇の御陵ありと伝ふる……」という記載が見られる[8]。おそらく，これは本墳について記載したものであろう。

1984年12月，梁木と水沼は本墳の略測を行った。その結果，墳丘長57m，後円部径22m，後円部高3m，前方部幅31.5m，前方部高3m，基壇長69m，基壇幅48.5m，周溝を含めた全長92m，周溝を含めた幅70.5mといった計測値を得ることができた。

次に本墳より出土した埴輪の紹介に移りたい。なお，ここに紹介する埴輪の中で第51図の二個体については，山ノ井清人先生により提供を受けたものである。

第51図1は口縁部の復元径が35.2cmで，全周の約½を残存する。現高は29.0cmである。器形は筒状を呈し，かなり大形である。

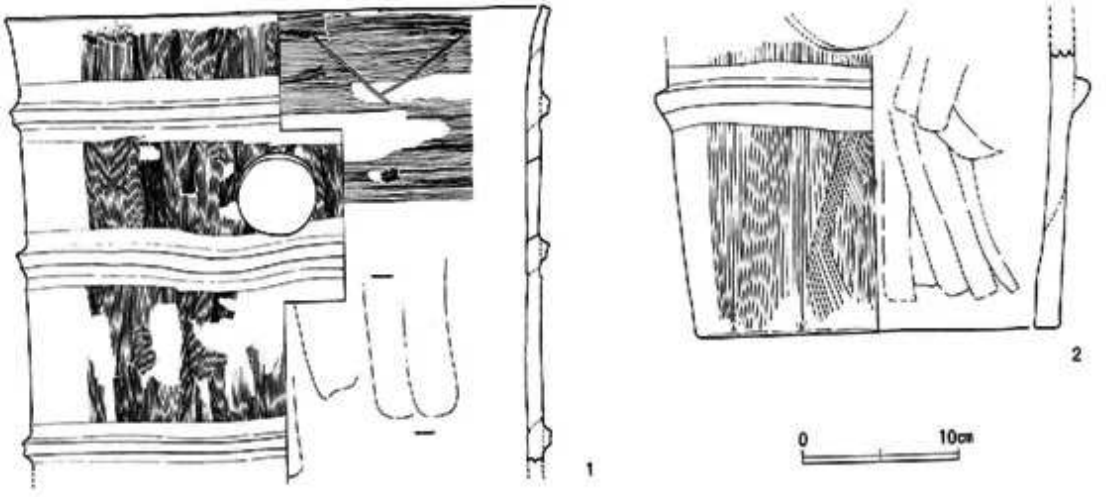
口縁部はあまり外反せず，胴部から直立気味に立ち上がる。口唇端部は，若干M字状に内彎する。外面調整は一次調整のみの縦刷毛目。内面調整は横刷毛目である。なお，内面には横刷毛目調整の後に施された「V」字のヘラ記号がみられる。

胴部は口縁部より数えて三段目の突帯まで残存する。外面調整は縦刷毛目で二次調整はみられない。内面調整は口縁部下二段目の突帯付近まで横刷毛目調整で，それ以下では，なで調整が行われる。突帯付近には，いずれも粘土紐の接合痕が観察される。

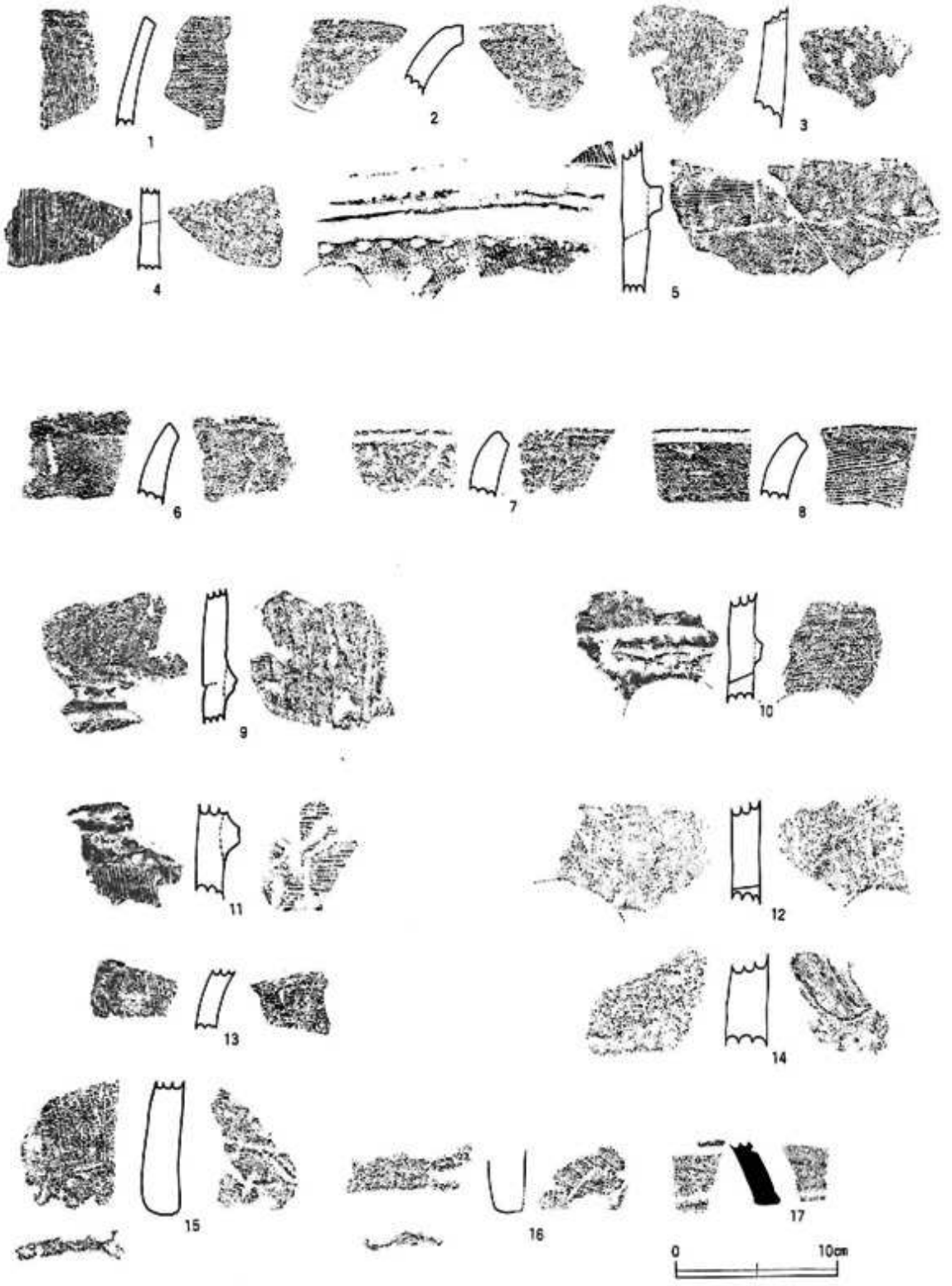
突帯は断面が台形でM字状に内彎する。突出度はあまり高くない。また，最上段の突帯は口唇部から下に約6cmと高い位置にあり興味深い。

透孔は口縁部下1段目と2段目の突帯間に約5cmの円形透孔がある。本来は対向する位置に2孔存在したものと思われる。残存するものは鋭い金属性のもので穿たれている。

焼成は良好で，器厚も薄い。調整等も合わせて，全般に非常に丁寧な作りである印象が強い個体である。



第51図　鹿沼市下台原古墳出土円筒埴輪



第52図　鹿沼市下台原古墳・宇都宮市亀塚古墳出土遺物

第51図２は基底部で，底径は23.2cmである。基部には棒状の圧痕がみられる。

突帯は基底面より約15cm上の位置に第１突帯が存在する。断面は三角形を呈し，突出度が高く，しっかりとした感がある。

透孔は第１突帯より約２cm上の位置に対向する二つの円形透孔が穿たれる。復元径は約６cmを計る。

外面調整は一次調整のみの縦刷毛目で，前述の１にくらべると粗いものである。

内面調整は丁寧になで上げている。

以上の外に本墳から出土した埴輪の破片をみると，口縁部破片で直線的な形態の第52図１のようなものや，開く度合いが大きく，朝顔形埴輪ではないかと思われる第52図２のようなものもある。

胴部破片第52図５は突帯の上下で若干のふくらみを持つ。朝顔形埴輪になるのかもしれない。復元径は28.0cmである。

突帯は断面が台形でM字状を呈する。わりとしっかりしたものである。

透孔は突帯下約2.5cmの位置にあり，復元径約７cmの円形透孔である。

外面調整は一次調整のみの縦刷毛目である。突帯部分なで調整の直下には0.5～1.5cmの間隔で，指によるおさえの痕跡が残る。

内面調整はななめのなで調整で，一部には横刷毛目が残される。突帯の直下には接合痕もみられる。

また，同じく胴部破片である第52図３の外面には，焼成むらが観察される。

亀塚古墳（第52図６～17）

亀塚古墳は宇都宮市下欠町川入に所在する。東方0.2kmには姿川が南流しており，本墳はその沖積地に占地する。かつては前方後円墳であったらしいが，大正10年の姿川堤防修築の際に前方部を中心に土取りが行われたため[8]，現在では後円部を残すにすぎない。

本墳出土の埴輪は近年，内山敏行氏によって紹介されているが[9]，資料の増加のために，ここで今回表採した遺物を紹介してみたい。

埴輪片は，周囲に広がる水田の畦にて表採された。表面の摩滅が激しいために細部の観察ができない破片もある。次に各部位に分けて紹介してみたい。

口縁部は小破片のために口径を復元することはできないが，口唇端部が６のように丸みを持つタイプと７・８のようにM字状に若干内彎するタイプとに分かれる。13についても外反の度合いからして口縁部付近の破片である可能性がある。外面調整はななめ刷毛目の後，横なで。内面調整は口唇部が横なでで，それ以下では刷毛目調整が行われる。

胴部の外面調整は，一次調整の縦刷毛目に限られる。内面調整には横，およびななめの刷毛目調整となで調整がある。

基底部については摩滅が激しく明らかにしえない点が多いが，外面に縦刷毛目，内面に

ななめ刷毛目，およびなでによる調整がおこなわれる。基部における圧痕は何ら観察されない。なお，14も基底部付近の破片であると思われる。

次に突帯は，断面が台形で，中央がM字状に若干内彎する。突出度の大きいものと小さいものとがある。

透孔は10と12に確認できた。いずれも破片であるため復元径には誤差が含まれるが，約6cmと大きなものである。

胎土には若干の小砂粒が含まれ，色調は淡褐色と灰褐色とに分かれる。焼成はいずれも良好である。なお，黒斑および焼成むらは確認されなかった。

また，埴輪片以外に須恵器片（17）を確認した。内外面ともなでによって仕上げられたもので，台付壺等の台部の破片と思われる。

判官塚古墳（第53図）

判官塚古墳は鹿沼市北赤塚町に所在する前方後円墳である。東には黒川が南流し，古墳は，その沖積地に占地している。墳丘裾部は，若干削り取られているが，現在部分で全長が60.9m，後円部径31.3m，後円部高5.5m，前方部幅39.2m，前方部高4.7mを計り，墳丘はほぼ西面する。内部主体は後円部南面に開口し，自然石積みの両袖型石室であるが，現在では，土砂が流入していて，内部はよく窺い知ることができない。『栃木県史蹟名勝天然記念物報告』第三輯によると，周囲には，かつて10数基の古墳が存在していたことが知られる[9]。

本墳出土の埴輪は以前，森田久男氏，鈴木勝氏によって紹介されているが[10]，亀塚古墳同様，資料の増加を図る意味で，今回，採集された資料をここに掲載することにした。

ここに紹介する埴輪は1984年12月，梁木と水沼が主に前方部前端にて表採した資料である。すべて破片であるので，各部位に分けて紹介を行いたい。

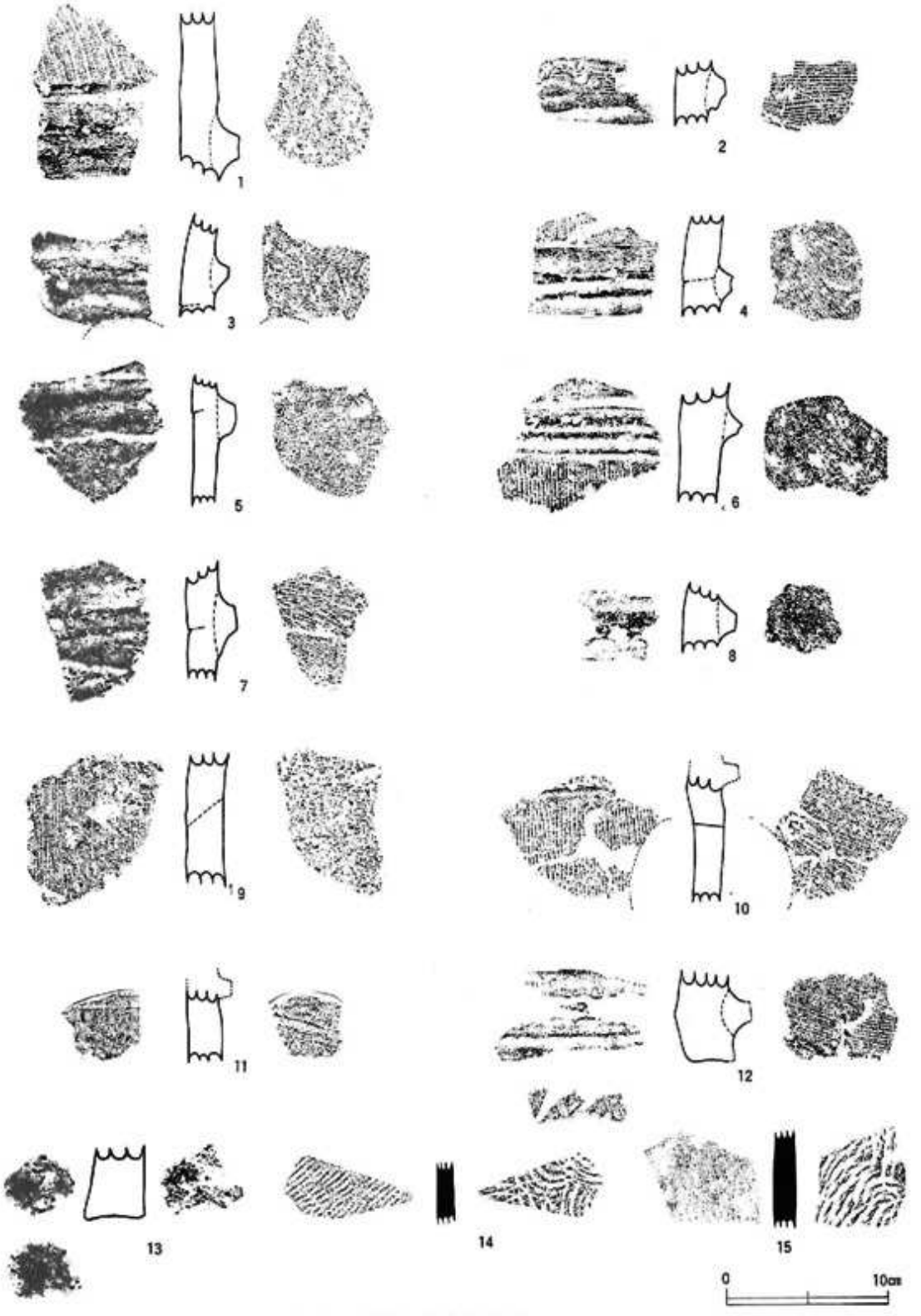
まず，胴部は外面に一次調整の縦刷毛目を行った後，突帯を貼り付けたものである。二次調整は確認されない。なおここで工具の性格を明確にする準備は持たないが，1の外面調整に従来の刷毛目調整と趣を変えるものが存在することは興味深い。内面には横およびななめ方向の刷毛目調整となで調整とがみられる。

基底部は二片表採され，そのうち12は基底面から1.4cm上の位置に最下段の突帯を有するものである。また13についても，外面の破片上部に横なでによる調整が見られることから，この直上に最下段の突帯が巡る可能性がある。基部にはいずれも棒状の圧痕を有する。

なお，口縁部の破片は残念ながら今回，表採することができなかった。

次に突帯についてみると，断面は台形を基本とし，1・4・6はM字状に内彎するものである。また，5のように丸みを持つものもある。これらはすべて貼り付けによるものであり，器厚の厚さと合わせて全般にしっかりとした印象をうけるものである。

透孔は3と10にみられる。突帯下1～2cmの位置に穿たれた復元径約7cmの円形透孔で



第53図　鹿沼市判官塚古墳出土遺物

ある。

胎土には多量の小砂粒と0.2～1.0cm大の小石を若干混入し，粘土の選択にあたって非常に粗雑であったという感は拭えない。

色調は主に赤褐色および暗褐色で，焼成は脆弱なものから良好なものまである。

埴輪の他に，くびれ部付近から須恵器片を表採した。14は外面に平行叩き，内面に同心円文が残る。15には外面に格子叩き，内面に同心円文が残されている。ともに甕の破片と思われる。

以上，判官塚古墳から出土した遺物の紹介を行った。破片からなので全容は知りえないが，器形はかなり大形である可能性が強い。それとともに，胎土は粗悪であり，大ざっぱな作りといった印象をうける。さらに，本墳を考える上で重要な低位置突帯の問題については，特にその分布が県内において一定の地域性を有するとされるが，今なお明らかにされない部分も多い。今後の研究の進展が期待されるところである。

3　まとめにかえて

以上，稲荷２号墳周辺に分布する前方後円墳４基から出土した円筒埴輪を中心に資料紹介を行った。現在までに４基のうちで出土遺物からある程度時期の限定されるものには狼塚古墳を掲げることができる。６世紀末葉から７世紀初頭という年代観の与えられた狼塚古墳から出土した土師器坏と稲荷２号墳出土のそれを比較した場合，形態的に類似してはいるものの，内面にヘラ磨きのある稲荷２号墳と，それのない狼塚古墳との相異を指摘することができる。これをもって稲荷２号墳の築造年代が狼塚古墳にくらべ，平行するか，あるいは若干遡ると考えてよいかと思われる。

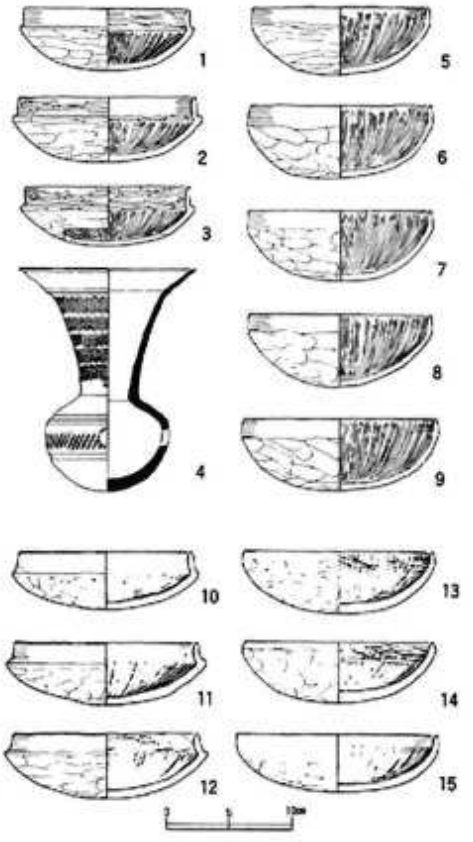
両古墳出土の埴輪をみると，第一に類似したプロポーションを指摘できるものの，内面調整の相違，突帯の突出度の差異，朝顔形埴輪の有無等の相違点も認められる。それらが，若干の年代差の決め手になるのか，あるいは年代は平行するものの地域性の相違によっているものなのかは微妙な問題であろう。判官塚古墳，下台原古墳，亀塚古墳との関係とも合わせて，今後の研究課題としたい。

第５節　稲荷２号墳の位置付けについて

1　年代的位置付け

本墳の築造年代を考える上で，周溝内及び墳端部から出土した土師器坏群が一つの材料となる。調査内容で触れたように周溝内出土のもの（第19図６～８）は底面からやや浮いたものではあったが，墳端部円筒埴輪列近くの墳丘面より密着した状態で出土したもの（第19図１～５）とそれほどの形態差は認められない。そこで，ここでは古墳築造年代に近い一括遺物としてこれらを扱うこととしたい。土師器坏群は形状から，外面に稜をもっ

て口縁部が内傾するもの（第19図１～４で以下A類とする）と半球形状で口縁部が短く立つもの（第19図５～８で以下B類とする）との２つに分かれる。これらは本地方において普遍的にみられる須恵器模倣の土師器坏であり，古墳からもしばしば出土するものである。おおよそ本地方の古墳に横穴式石室が採用される時期の前後からその終末まで存続する形態と考えられるが，僅かながらも器形・技法的な変遷を認めることができるものである。第54図は本古墳群近くの聖山２号墳[9]（１～９）と針ケ谷新田１号墳[10]（10～15）から出土した同形態の土器群である。聖山２号墳は木棺直葬を主体部とする円墳，また針ケ谷新田１号墳は切石積みの横穴式石室を主体部とする円墳であったわけであるが，両土器群を比較すると前者に対する後者の全体的な器形の扁平化及び口径の大型化，さらにはA類における口縁部立ち上がりの内傾化などが認められる。このような器形変化の中で本土師器坏群を位置付けるとすれば，聖山２号墳出土のものよりやや新しい傾向が窺えるということになろう。



第54図　周辺古墳出土土器

さて，以上のように位置付けた本土師器坏群の年代であるが，聖山２号墳の土師器坏群に共伴した須恵器𤭯（第54図４）が陶色編年の TK43型前後に考えられることから，６世紀末葉頃に考えるのが妥当と思われる。

なお，円筒埴輪については，県中・南部の資料を中心にして全体を７期に分けた小森哲也氏の編年が提示されている[11]。この小森編年によると，前節で本古墳出土円筒埴輪に最も類似すると考えた狼塚古墳出土円筒埴輪がⅥ期－６世紀後半後葉－にあてられている。前節でも述べたように本古墳出土円筒埴輪は調整，突帯の形状，及び朝埴輪円筒の存在などという点から狼塚古墳出土のそれよりやや古い様相がみられるものである。ただし，器形的な大きな特徴である「口径と底径の比が大きいラッパ型」という点では，両者に差異をみい出すことが困難であり，小森編年のⅤ期－６世紀後半前葉－までは遡らないものと考えられる。

２　周辺地域の中での位置付け

本墳周辺の古墳分布については第１章で触れたとおりであるが，ここでは特に菱川及び

黒川の上流域における古墳分布の状況（第３図参照）に注目し，本古墳の位置付けを考えてみたい。

まず，両河川中流域には茶臼山古墳（62）を中心とする羽生田古墳群や亀塚古墳(57)下台原古墳（56）を中心とする古墳群など，50m～80mという比較的大形の前方後円墳を含むものが集中しているわけであるが，これらの上流または周辺をみるとやや様相が変わり，小形の前方後円墳や小円墳群が点在するという状況となる。このうち前方後円墳についてみると，本墳（30），和田塚古墳（58），狼塚古墳（31），藤江古墳[8]（61），酒野谷28・40号墳（70・71），さらにはやや位置的に離れるが西方山６号墳[9]（72）等を挙げることができる。これらの前方後円墳を比較すると，いずれも全長20～30m前後の小規模なものであること，周囲に小円墳は存在するが前方後円墳としては単独である場合が多いこと，立地が台地上であることなど共通点が多い。また，時期的には不明な点が多いが，河原石小口積の横穴式石室を主体部とするものが多いこと（狼塚古墳，藤江古墳，西方山６号墳），前述したような須恵器模倣の土師器坏を出土するものが多いこと（本墳，狼塚古墳，藤江古墳，西方山６号墳）等からみて，いずれも古墳時代後期の比較的近接した時期の所産と考えられる。

以上のようなことから，古墳時代後期の姿川・黒川上流域においては，かなり狭い地域（おそらくは両河川の支流域単位程度）を生産基盤とした前方後円墳の造営がみられるようになったものと考えられ，本古墳もそのような古墳の一つとみることができるわけである。なお，これらの前方後円墳はそれぞれの地域においては最後の前方後円墳と考えられるわけであるが，藤江古墳や和田塚古墳など埴輪のないものもみられ，前方後円墳全体の中でも終末的な様相を有するものである[9]。

さて最後に集落との関係をみてみたい。本墳と谷を介した隣りの台地には，古墳時代後期の集落跡と円墳数基を発掘した聖山公園遺跡が存在する。この遺跡は，集落が古墳時代後期の初頭から開始され，円墳群が出土した土器等から集落よりやや遅れて造営が開始されたと考えられるものである[9]。環境（第１章）でも触れたように周辺にはいくつかの土師器散布地とそれに付随するような形で小円墳群がみられる。もちろん発掘調査によらなければ正確なことはわからないわけであるが，これらも聖山公園遺跡と同様な形で集落がそして円墳が営まれたものとも考えられる。つまり，本墳造営の背景には，聖山公園遺跡でみられるような集落とそれに付随する円墳群が一つの単位として存在したと考えられるわけれである。さらにつけ加えるならば，前述したように聖山公園遺跡中の２号墳が本墳より古いと考えられることより，周辺集落においては，前方後円墳の造営に先がけて円墳の造営がなされていたとみることができる。

註

① 上田宏範　『前方後円墳』学生社　1969年

② 常川秀夫・大金宣亮・石川　均・熊倉直子　『塚山古墳群』　栃木県教育委員会　1979年

③ ②前掲書

④ ②前掲書

⑤ 岩崎卓也・森田久男・富永則子・稲葉英男・鈴木一男　『摩利支天塚古墳』小山市教育委員会　1983年

⑥ 岩崎卓也　「琵琶塚古墳」『小山市史』史料編・原始古代　1981年

⑦ 大和久震平　『狼塚古墳発掘調査報告書』　鹿沼市教育委員会　1966年

なお，資料の実測に際しては，大和久氏の御指導をいただいた。

⑧ 『栃木県史蹟名勝天然記念物調査報告』　第3輯　栃木県　1928年

⑨ ⑧前掲書

⑩ 内山敏行　「宇都宮市下欠亀塚古墳の埴輪」『下野考古学』　5　下野考古学研究会1982年

⑪ ⑧前掲書

⑫ 森田久男・鈴木　勝　「栃木県における後期古墳出土の埴輪の一様相――最下段における「低位置凸帯埴輪」資料の紹介」『栃木県史研究』19　栃木県史編さん委員会1980年

森田久男　「円筒埴輪」『小山市史』　史料編・原始古代　1981年

⑬ 宇都宮市教育委員会『聖山公園遺跡』　Ⅰ　1983年

⑭ 宇都宮市教育委員会『針ヶ谷新田古墳群』　1983年

⑮ 小森哲也　「栃木県内古墳出土遺物考（Ⅰ）――鉄鏃の変遷――」『栃木県考古学会誌』　第8集　1984年

⑯ 塙　静夫　『鹿沼市藤江古墳発掘調査報告書』　鹿沼市教育委員会　1965年

⑰ 倉田芳郎　「西方山古墳群」『東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』　日本道路公団東京支社・栃木県教育委員会　1972

⑱ 大金宣亮　「栃木県における前方後円墳の終焉」『古代学研究』　104号　1984年　県央部における大形前方後円墳の変遷の中で，氏はその終焉時の一つの様相として埴輪の消滅をあげられている。

⑲ 宇都宮市教育委員会　『聖山公園遺跡』　Ⅰ～Ⅲ　1983～1985年

図　版

(1) 遺跡遠景（南上空より，左上の台地先端部，手前は聖山公園遺跡）

(2) 遺跡全景（上空より）

(1) 2号墳下草刈り風景（南東より）

(2) 発掘前の2号墳全景（西方より）

(1) 2号墳T₂（北方より）

(2) 2号墳T₁（北東より）

(3) 2号墳T₄（西方より）

(4) 2号墳T₄（東方より）

(1) 2号墳T_1（東方より）

(2) 2号墳T_2（東方より）

(3) 2号墳T_3（北西より）

(4) 2号墳T_4（南東より）

(1) 2号墳T₁（西方より）

(2) 2号墳T₁（南方より）

(3) 2号墳T₁（北東より）

(4) 2号墳T₁（南西より）

(1) 2号墳T_{10}（東より）

(2) 2号墳T_{10}（西より）

(3) 2号墳T_{10}（北西より）

(4) 2号墳T_{11}（西より）

(1)　2号墳後円部北西（南東上方より）

(2)　2号墳後円部北東（南西上方より）

(1)　2号墳くびれ部東（北西上方より）

(2)　2号墳くびれ部西（東上方より）

(1)　2号墳前方部西（北東上方より）

(2)　2号墳前方部中央ー西（北東上方より）

(1)　2号墳全景（北西より）

(2)　2号墳T_{18} 葺石部断面

(1)　2号墳T，葺石部断面

(2)　2号墳T，葺石裾部断面

(1)　2号墳後円部北西（T_{12}・T_{13}）円筒埴輪列（西上方より）

(2)　2号墳T_{12}円筒埴輪出土状況

(1) 2号墳くびれ部西（T_{16}）円筒埴輪列（東上方より）

(2) 2号墳くびれ部西（T_{16}）円筒埴輪列断面

(1)　2号墳T_{19} 円筒埴輪出土状況

(2)　2号墳T_{19} 円筒埴輪出土状況

(1) 2号墳前方部南東コーナー（T_5）円筒埴輪列（南東上方より）

(2) 2号墳T_5円筒埴輪，土師器坏出土状況

(1)　2号墳T₁ 周溝内土師器坏出土状況（南東上方より）

(2)　2号墳T₁ 周溝内土師器坏出土状況（南上方より）

(1) 発掘前の1号墳全景（南方より）

(2) 1号墳横穴式石室検出状況（南上方より）

(1) 1号墳横穴式石室（南上方より）

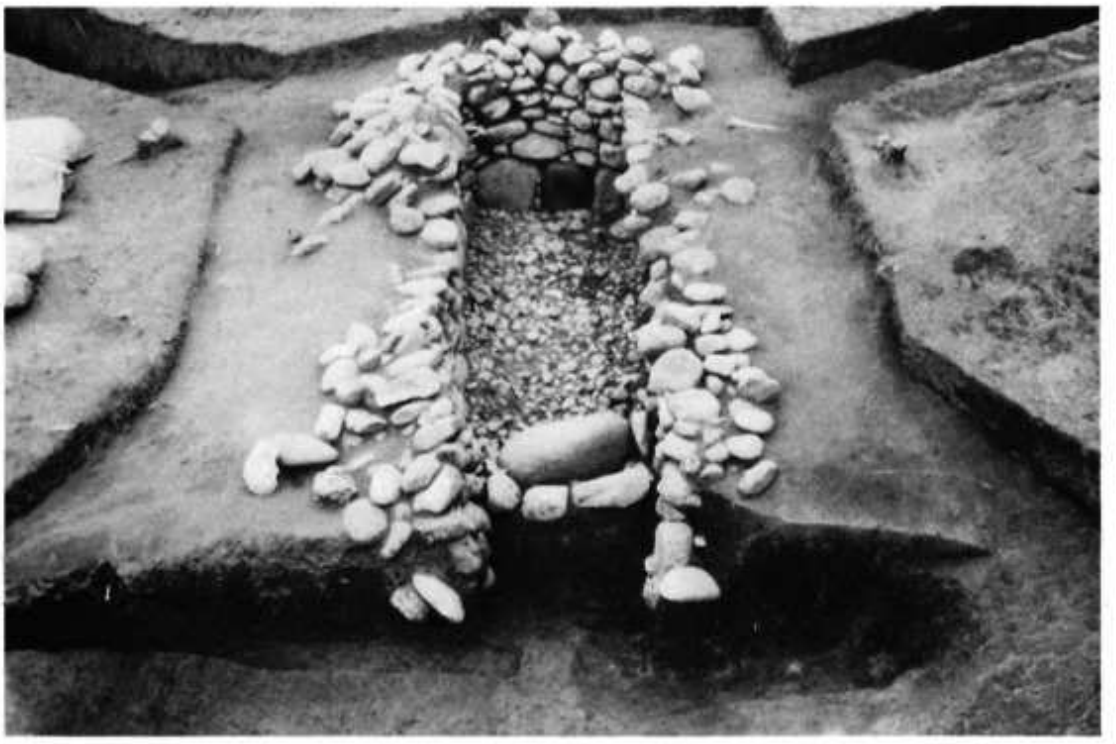
(2) 1号墳横穴式石室（南上方より）

(1)　1号墳横穴式石室閉塞状況（北西上方より）

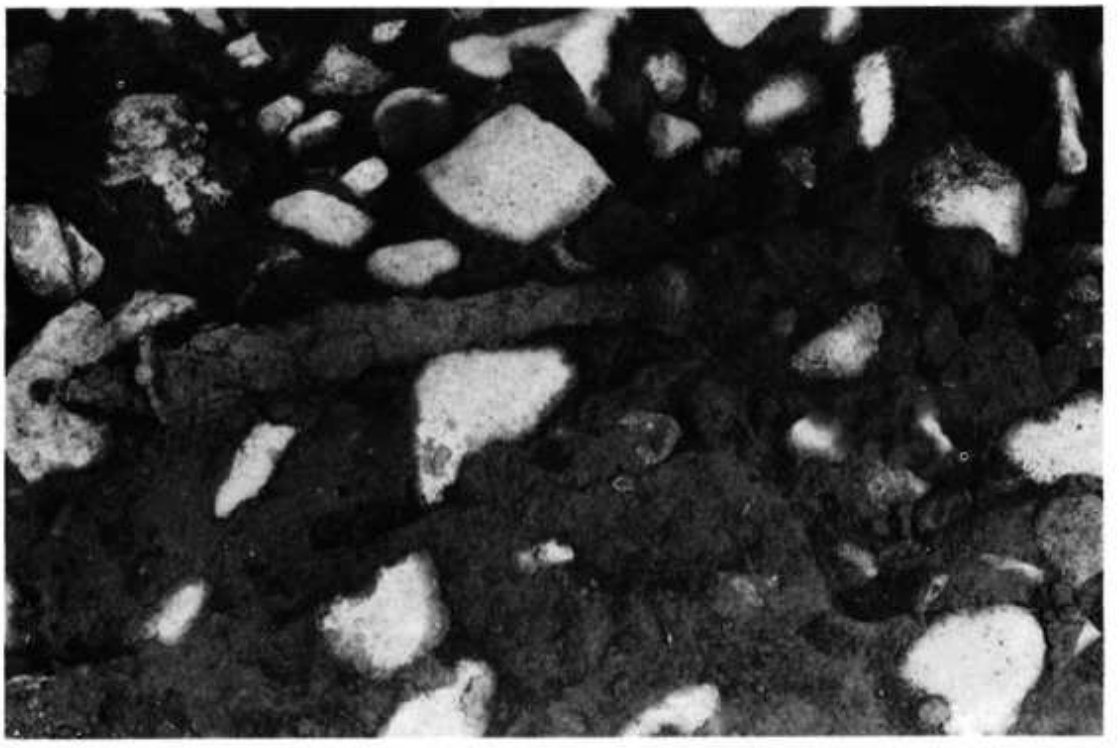
(2)　1号墳横穴式石室閉塞の断面（東方より）

(1)　1号墳横穴式石室羨道部埋土状況（南東より）

(2)　1号墳横穴式石室羨道部埋土状況（南より）



(1) 1号墳横穴式石室全景（南上方より）



(2) 1号墳玄室床面上鉄器出土状況

(1) 2号土墳出土土師器坏

(2) 2号墳出土形象埴輪1)

2号墳出土形象埴輪(2)

20-5

20-4

26-43

21-6

2号墳出土円筒埴輪(1)

25-36

21-7

24-32

25-37

26-42

27-48

2号墳出土円筒埴輪(2)

26-45

22-15

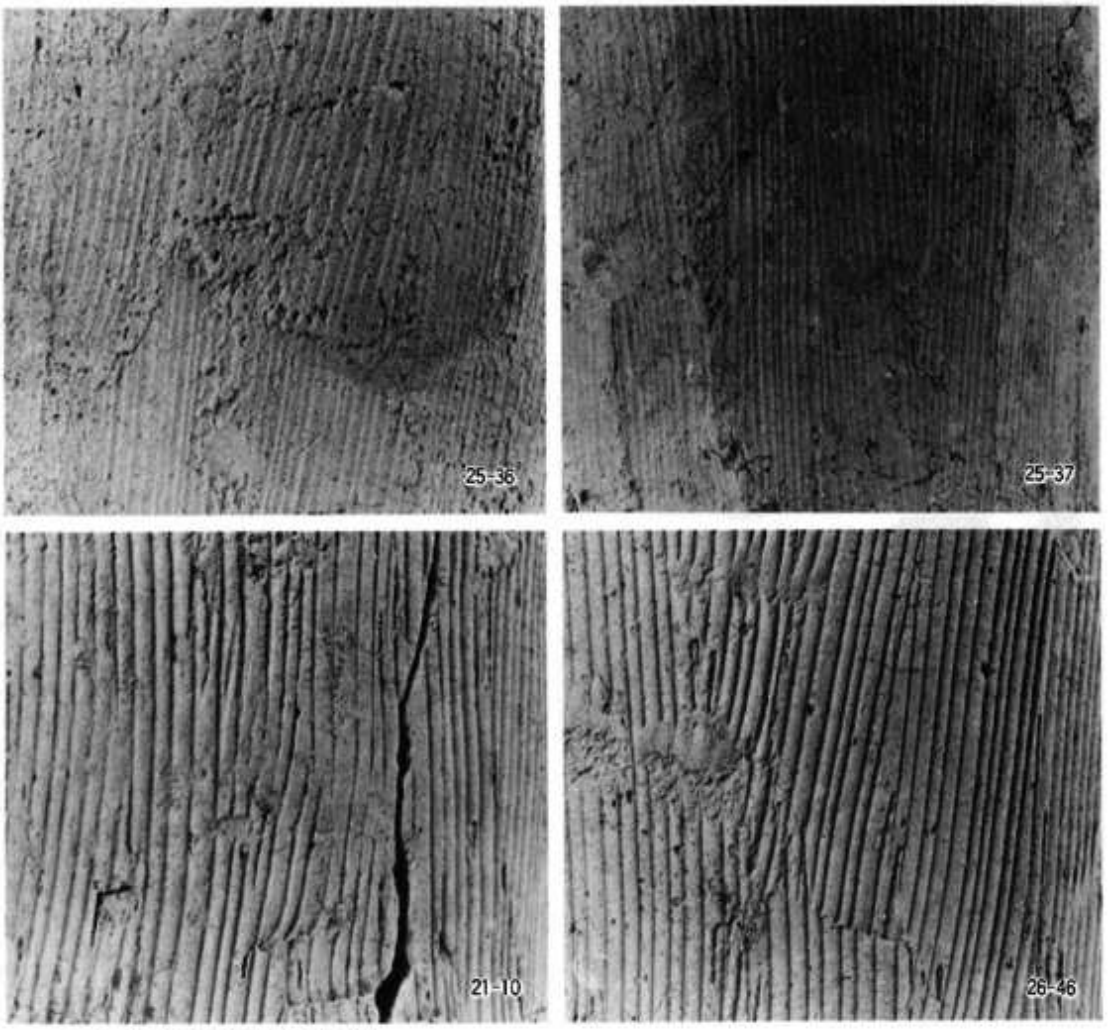
24-28

26-46

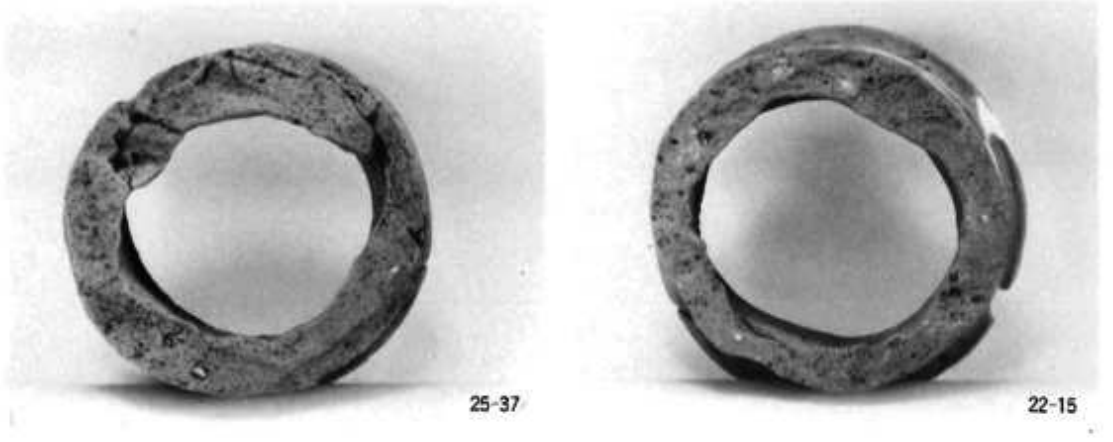
23-23

21-10

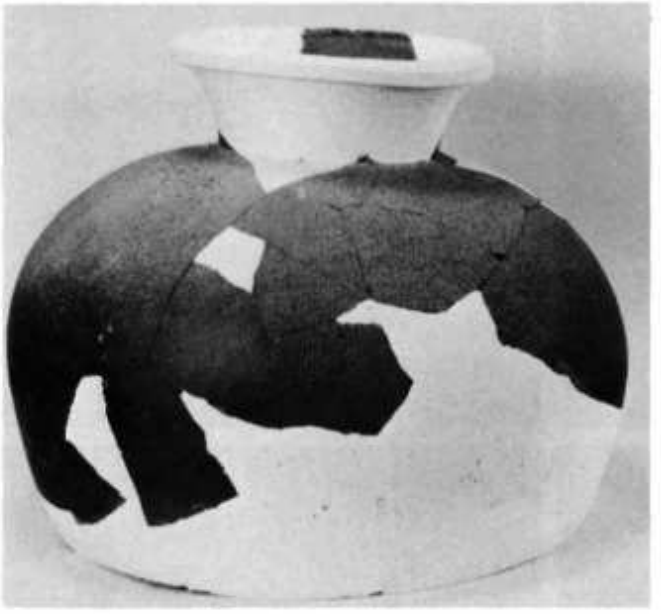
2号墳出土円筒埴輪(3)

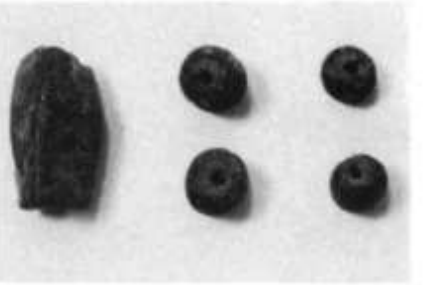


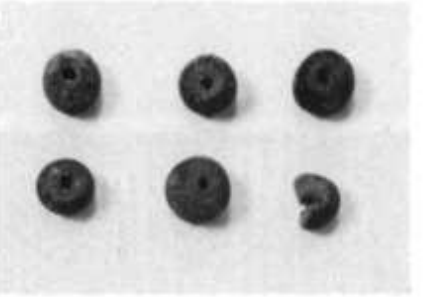
(1) 2号墳出土円筒埴輪外面の刷毛目



(2) 2号墳出土円筒埴輪基底部外面







1号墳出土須恵器甕・玉類

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第17集
稲荷古墳群

昭和60年3月発行

発行　宇都宮市教育委員会社会教育課
（宇都宮市中央1-1-13）
TEL　(0286)37-2111

印刷　㈱松井ピ・テ・オ印刷
（宇都宮市平出町4287-7）
TEL　(0286)62-2511